

八尾市埋蔵文化財発掘調査概報  
1980・1981年度

1983年3月  
八尾市教育委員会

## 正誤表

頁數	行 數	誤	正
1	本文目次Ⅺ	遺物觀察表	出土遺物觀察表
2	挿図目次図17	瓦実測圖	瓦類実測図
7	18行め	深1.0m	深さ1.0m
14	8行め	跡切れる	途切れる
20	17行め	ヘラガキ	ヘラミガキ
28	4行め	本調査	当調査
24	16行め	(菜種・ゴマ)	(荏胡麻)
26	8小皿備考欄	に煤化	に炭化
37	図版7上段見出し	人物像…	仏事遺物人物像…
39	本文目次Ⅹ	遺物	出土遺物
41	5・6行め	試掘調査	試掘調査
42	図2右上グリッド	空白	a
68	例言9行め	奥田尚	奥田尚氏
66	10行め	鋼矢板	鋼矢板
71	19行め	上東・鬼川市Ⅱ様式	上東遺跡鬼川市Ⅱ式
83	14行め	微粒	微粒
110	挿図目次図3	土層模式図	土層柱状図
"	図版目次図版2	上塙遺物出土狀況	SKI遺物出土狀況
"	図版目次図版3	水田全圖	水田全景
"	図版目次図版4	上塙出土遺物	SKI出土遺物
116	11行め	底と	底跡と
129	24行め	N-14-W	N-14-W
144	15行め	暗灰色粘土	暗灰色粘土Ⅰ
"	16行め	灰色粘土	灰色粘土Ⅲ
159	5行め	関西電力	関西電力
169	例言5行め	文財室	文化財室
170	第2節本文目次Ⅲ		
"	第3節本文目次Ⅳ		
"	第4節本文目次Ⅴ		
"	第5節本文目次Ⅵ		
171	第6節本文目次Ⅶ	遺物觀察表	出土遺物觀察表
"	第7節本文目次Ⅷ		
"	第8節本文目次Ⅸ		
172	第9節本文目次Ⅹ		
173	挿図目次図22	S E 2 平断面図	SB 2 平断面図
174	挿図目次図38	出土遺物実測図	出土遺物実測図
175	挿表目次表1頁数	188	180
177	図版目次図版32	SP1・SB7…	SP1・SP2・SB7…

頁數	行 數	誤	正
190	見出し右端	胎工	胎土
197	4 行め	どある	である
208	タイトル	遺物観察表	出土遺物観察表
〃	5 装備考欄	長を	長石を
207	図 21 見出し	SB1 実測図	SB1 平断面図
228	14 窓手法欄	磨耗	磨耗
〃	〃	がふられる	がみられる
231	36 高杯手法欄	内元	内面
234	62 盆形態欄	わじか	わずか
235	67 装形態欄	屈内奇	屈曲し内奇
237	83 装形態欄	上げ、	上げぎ
240	106 小型器台形態欄	外反ぎひに	外反ぎみに
248	21 行め	・反面	る反面
252	タイトル	遺物観察表	出土遺物観察表
〃	2 盖杯手法欄	回転ペラ削	回転ペラ削
〃	3 盖杯手法欄	ペラ切ノ	ペラ切り
〃	4 盖杯手法欄	自転ナデ	回転ナデ
264	12 行め	砂祐土	砂粘土
268	24 行め	暗茶灰シルト	暗茶灰色シルト
275	図 61 見出し	横列平断面図	柱穴列平断面図
288	図 69 見出し	SE1 実測図	SE1 平断面図
305	56 装形態欄	平坦面	平坦面
324	タイトル	第4次調査	第3次調査
331	木製品の番号	空白	333 頁の番号
350	見出し	SP1 (7-8) : SB7 .....	SP1 (7-8) - SP2 (10) ...

なお手違いから、以下の 2 点に印刷ミスがあることを御断わり致します。大変御見苦しいかとは存じますが、当方の本意ではないことを御認承下さい。

1. 第 8 章第 3 節・第 5 節・第 8 節は当初のレイアウトとは異なり、偶数頁から始まっているため、挿図がすべて内側に配置されています。
2. 写真図版も片面印刷の予定が両面印刷され、偶数頁の見出しが内側に配置されています。

八尾市埋蔵文化財発掘調査概報  
1980・1981年度

1983年3月  
八尾市教育委員会

## はしがき

滔滔と流れる大和川は、母なる大地に生命の萌芽を促し、幾久しく変わることなく農耕の喜びを与えてきました。それ故河内平野は、幾多の先人の活動の舞台として、古来より重要な役割を果たしつつ、今日に至っています。しかし、山紫水明を貢えたこの地も近年の開発の波に追われ、近代都市へと変貌しつつあります。

八尾市域では、これらの先人の足跡である埋蔵文化財を保護する目的で、昭和55年10月1日より要綱を定めました。それ以後、遺跡指定区域内の開発事業に際しては、開発申請者の御理解のうえ調査を実施し、埋蔵文化財の実態把握と保存に務めています。

今後、こうした祖先の遺産を受け継ぎ、後世の人々に未来の遺産として継承していくことは、現在の私どもに課せられた使命であります。

なお、現地調査および本書の作成にあたって御協力いただいた調査補助員諸子、関係者の方々に厚く感謝の意を表する次第であります。

昭和58年3月

八尾市教育委員会

教育長 坂本 正一

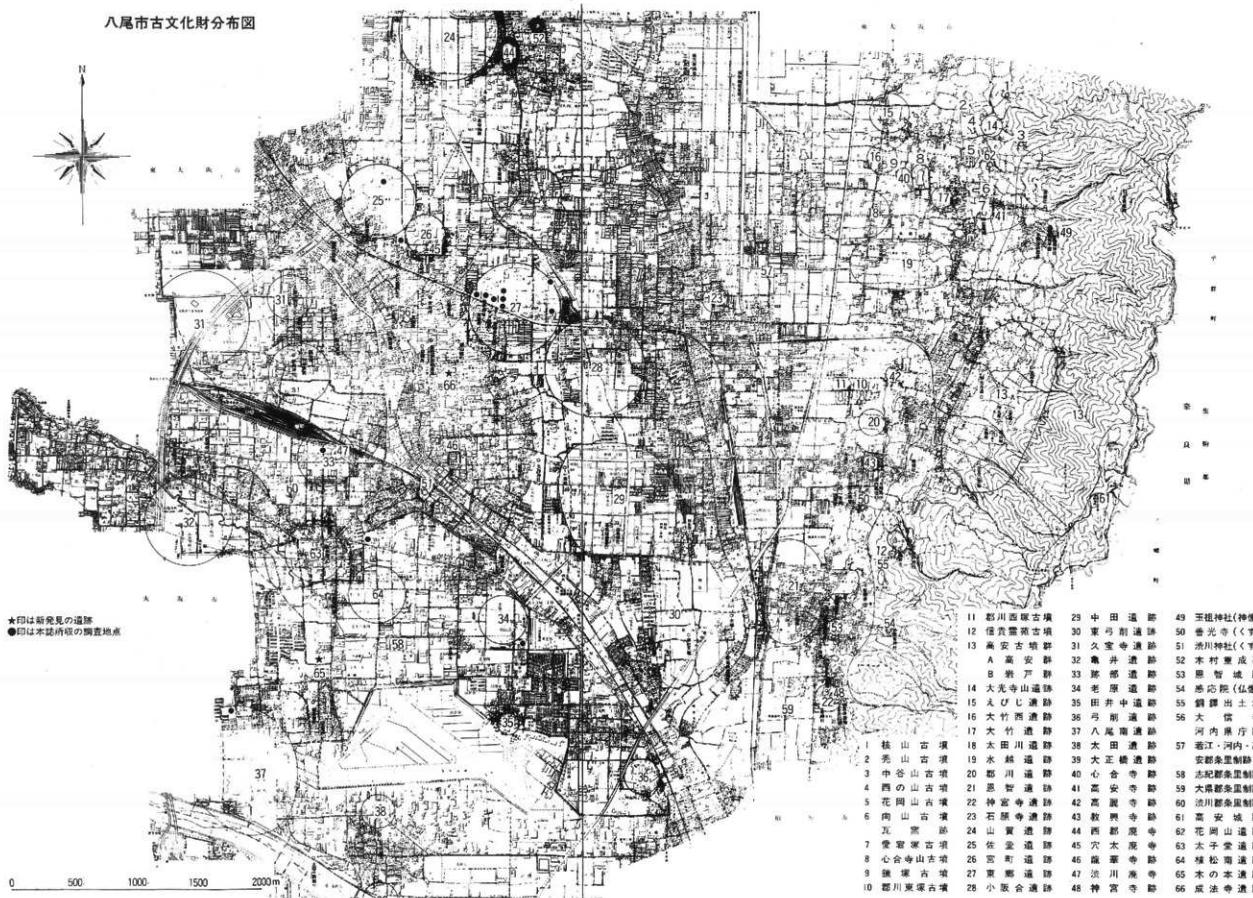
## 例　　言

1. 本書は、昭和55・56年度に八尾市教育委員会文化財室が実施した、埋蔵文化財発掘調査の概要報告を集録したものである。なお、本書作成に係る業務は、  
　　即ち八尾市文化財調査研究会が昭和57年7月1日から継続して行なった。
1. 本書に掲載した概要報告は、下記の目次に記したとおりである。なお、調査地の位置は、次頁の八尾市古文化財分布図に示している。
1. 本書作成にあたっては、山本昭の指導のもと調査担当者の米田敏幸・高萩千秋・原田昌則・高木真光・成海佳子が行ない、文責は各例言に明示した。

## 目　　次

第1章 宮町遺跡発掘調査概要報告	1
第2章 横松南遺跡発掘調査概要報告	39
第3章 木の本遺跡発掘調査概要報告	68
第4章 八尾南遺跡発掘調査概要報告	109
第5章 美園遺跡発掘調査概要報告	127
第6章 跡部遺跡発掘調査概要報告	139
第7章 老原遺跡発掘調査概要報告	157
第8章 東郷遺跡発掘調査概要報告	169
付　載 昭和55・56年度調査一覧表	363

八尾市古文化財分布図



# 第1章 宮町遺跡発掘調査概要報告

## 例　　言

1. 本書は、八尾市宮町2丁目1番地において実施した。　　店舗  
建設工事に伴なう発掘調査の概要報告である。
1. 発掘調査は、昭和55年7月7日から7月29日にかけて実施した。
1. 発掘調査は、八尾市教育委員会文化財室が行ない、原田昌則・高木真光が現地を担当した。なお、調査にあっては、駒沢敦の協力があった。
1. 本書作成にあたっては、上記担当者のほか駒沢敦・野田雅彦(遺物実測)、成海佳子・池田まゆみ(トレース)があたり、執筆は原田昌則が担当した。

## 本 文 目 次

I 調査の目的と経過	3
II 調査方法	4
III 検出遺構	5
IV 出土遺物	10
V まとめ	28
VI 遺物観察表	26

## 挿 図 目 次

図1 調査地周辺図	3
図2 グリッド設定図	4
図3 Aグリッド平断面図	6
図4 S E 1(北から)	7
図5 S E 1 平断面図	7
図6 Bグリッド平断面図	8

図7 Cグリッド断面図	9
図8 土師質皿実測図	11
図9 瓦器椀実測図	12
図10 撥鉢・ねり鉢実測図	13
図11 羽釜実測図	15
図12 中国製磁器実測図	16
図13 国産陶磁器実測図	18
図14 漆器椀実測図	19
図15 人物像を墨書きした小石	19
図16 花瓶実測図	20
図17 瓦実測図	21
図18 瓢実測図	22

## 図 版 目 次

図版1 調査地近景	図版5 撥鉢・ねり鉢II
Aグリッド 遺構検出状況	同上(内面)
図版2 Bグリッド 遺構検出状況	図版6 羽釜
同上 瓦溜	中国製磁器
図版3 土師質小皿	図版7 仏事遺物
	中国製磁器
図版4 撥鉢・ねり鉢I	図版8 瓢・瓦・漆器
同上(内面)	

# 第1章 宮町遺跡(宮町2丁目1番地)

## I 調査の目的と経過

宮町遺跡は八尾市宮町1丁目に位置する穴太神社を中心に拡がる遺跡である。穴太神社境内からは、平安時代末期から室町時代にかけての屋瓦片の出土があり<sup>①</sup>、「河内鑑名所記」・「和漢三才図会」等に記述してきた千眼寺に推定される地点である。

今回調査が予定された地点は、穴太神社西方約100mに位置し、周囲一帯が開発された中にあっては、わずかに残された閑地の一つである。このような状況から、急務とされる宮町遺跡の拡がりを知るためにも、重要な地点であるものと判断し、工事に先立って発掘調査を実施することを決定した。

調査は、調査地が穴太神社に近接する関係から、寺院を中心とした集落の有無を確認し、記



図1 調査地周辺図

録保存を計るとともに、必要な場合には遺構を保存するための資料を作成する目的で実施した。調査は昭和55年7月7日から7月29日まで実施し、調査面積は約80m<sup>2</sup>におよんだ。

## II 調査方法

調査対象地は、府道八尾枚方線と市道弥刀上ノ島線が交差する南西隅に位置する土地で、面積は1857m<sup>2</sup>を測る。

調査はまず、調査地の北西にAグリッドを設定し、遺構の検出状況を見て他のグリッドを設定する方法をとった。その結果、中世末期の遺構面を検出したことから、南・東への拡がりを追求する目的でB・Cグリッド(各5m×5m)を設定した。調査は原則として、盛土および耕土は機械掘削を行ない、以下は人力により実施した。

なお、基準レベルは穴太神社内のOP+9.66mを使用した。

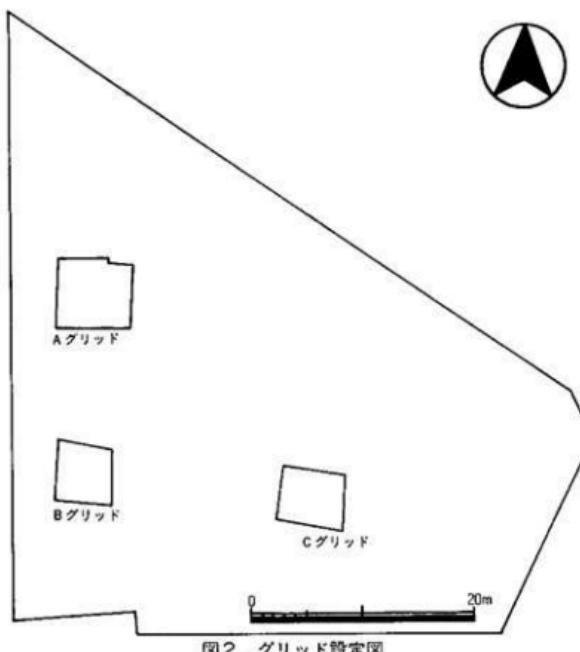


図2 グリッド設定図

### III 検出遺構

#### 1) Aグリッド

Aグリッドは調査地の北西部に南北5m・東西4mを設定して調査を実施したが、後に遺構の拡張を追求する目的で東側へ2m拡張している。

調査の結果、第5層青灰色砂混粘土層を切り込む近世溝遺構2条(S D 1・S D 2)から成る第1遺構面と、黄褐色砂混粘土層を基盤として、水溜状遺構・井戸(SE 1)・溝4条(S D 3-S D 6)から構成される第2遺構面を検出した。

#### S D 1

グリッドの西壁面に沿って検出した。西側は調査区外のため不明で、深さもわずかに窪みを残す程度である。溝内からは近世陶磁器等の細片が少量出土した。

#### S D 2

南北方向に延びるもので、上部が削平されているため南側では痕跡をとどめないが、残存部では幅90cm・深さ10cmを測る。S D 1と同様に農耕に関連した小溝であろう。

溝内からは近世陶磁器・土師質皿等の細片が少量出土した。

#### S D 3

水溜状遺構とSE 1をつなぐ溝で、幅130cm・深さ約40cmを測り、南流するものである。溝は2段で形成され、底部は「U」字形を呈し、底部の比高差は約5cmを測る。

遺物は土師質皿・ねり鉢・中国製磁器・国産陶磁器等の細片が少量出土した。

#### S D 4

南北方向に延びる溝で幅50cm・深さ5~8cmを測り、北側では水溜状遺構の東側の水口と接続している。接続部では拳大の石や瓦片を使って水口施設を造っているが、レベル的にはやや高位置にあり、溝の水を直接水溜状遺構に入れたものではなく、水位の高い時にのみ機能を果したものと推定される。

出土遺物は少量ではあるが瓦器碗・土師質皿・屋瓦等の細片が認められた。

#### S D 5

北流する溝で幅30cm・深さ35cmを測り、北側ではS D 4を切り込んでいる。内部埋土は上層黄褐色砂まじり粘土、下層暗褐色砂まじり粘土から構成されているが、主な遺物包含層は上層で、土師質皿・瓦器碗・ねり鉢・土釜・青磁等の細片が出土した。

#### S D 6

S D 5に流れ込む溝であるが、小規模の検出のため詳細は不明である。

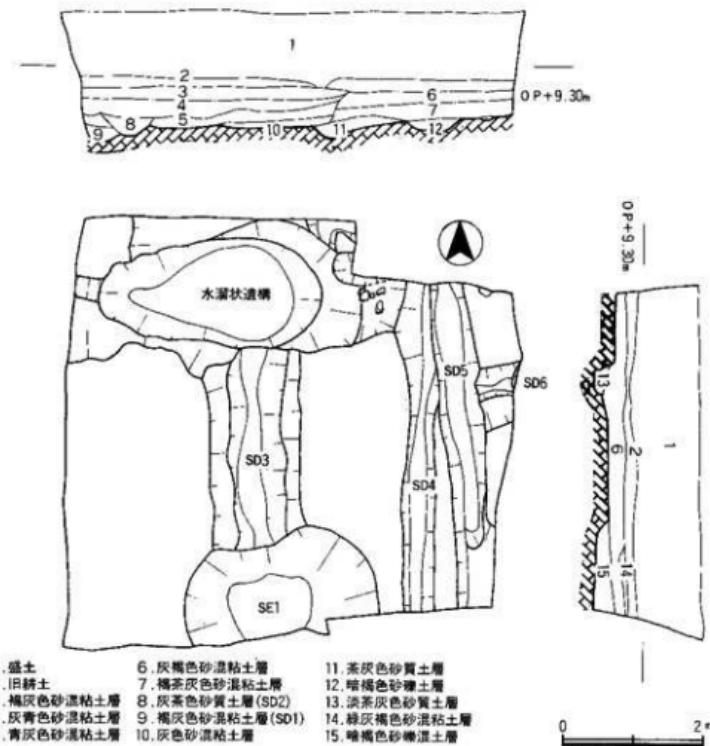


図3 Aグリッド平断面図

#### 水溜状造構

東西方向に長い楕円形を呈する造構で東西3.7m・南北2.0m・深さ0.8mを測る。底部は平らで最下層は青灰色シルト層に達している。水溜状造構に付随する水口は東側・西側・北東の3ヶ所にあり、それぞれ水溜状造構内側へ向かって急角度の傾斜面を造っている。以上のことからこの水溜状造構は、水口を通じて各方面から流入する雨水および生活排水を一時的に溜めておき、水位に応じてSD3へ流す機能を果たしたものと推定される。

また、この造構の上面積存時において、径約1.5mを測り円形を呈する青灰色砂質土層の存

在を確認していることから、水溜状遺構が後に縮少し、井戸として使用された可能性も考えられる。

遺物は第2層灰黄色砂混じり粘土層と第4層灰黄色粘土層から出土し、第2層からは土師質皿・擂鉢・ねり鉢・土釜・中国製磁器等の破片が出土し、第4層では漆器椀・花瓶・人物像を墨書きした小石・経木の編みもの等が出土した。

#### SE1

SD3に接続する円形の素掘り井戸で上面径2.8m・底径1.2m・深1.0mを測る。最下層はシルト層に達していて、調査中多量の湧水が認められた。

調査では井戸の全容を知るまでに至らなかったが、南壁で直立した2枚の板材を検出したことから、板枠を有した井戸であった可能性も考えられる。

またSD3とは同レベルから切り込む関係にあるが、SE1下層からは瓦器椀片が比較的多数出土しており、両者が同時期に併存していたとは考え難く、SE1の埋没後にはSD3が開溝されたものと考えられる。ただ平面精査時においては、両遺構を明確に判別することはできなかった。

遺物は第1層茶褐色粘土層、第2層灰青色粘砂土層、第6層灰緑色微砂層から土師質皿・瓦器椀等が出土した。

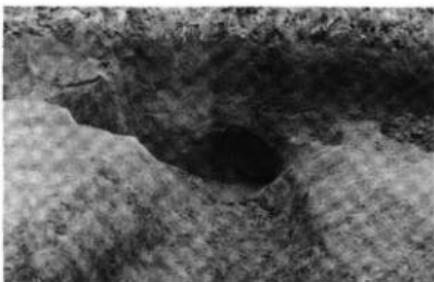


図4 SE1(北から)

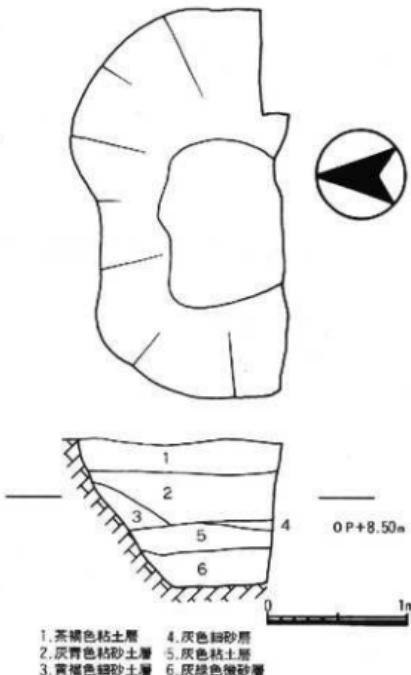


図5 SE1平面面図

## 2) Bグリッド

Aグリッドの南側に設定した調査地で、 $5\text{m} \times 5\text{m}$ を測る。地表下 $1.5\text{m}$ の地点で瓦溜と溝1条から成る遺構面を検出した。

### 瓦溜

グリッド南西部で検出した。瓦溜は直径約90cmを測りほぼ円形に拡がるもので、一部で地山面を切り込んでいるが、断面で見る限りでは上層からの切り込みは無く、遺物の堆積もほぼ水平である。また、西側への拡がりを追求する目的で一部拡張し、瓦溜が西側に30cm拡がって終わることを確認している。

出土遺物はコンテナ2箱分におよび、丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦等の屋瓦類が大半を占め、他に檣鉢・ねり鉢・土蓋・砥石等の細片が出土した。

### SD7

上部が削平されていて底部のみの残存であるが、南北方向に延びて南端部で大きく東側へ拡がるもので、幅40cm・深さ10~17cmを測る。溝内からは、国産陶磁器の細片が小量出土した。

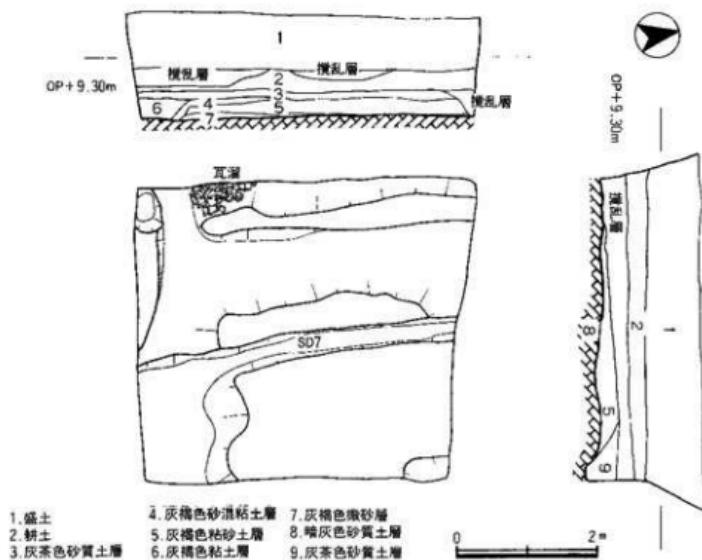


図6 Bグリッド平面図

### 3) Cグリッド

Aグリッドの東側に設定した調査地で、 $5\text{m} \times 5\text{m}$ を測る。全体的な層位は上層より第3層まではA・Bグリッドに対応しているが、以下は最下層まで複雑な堆積で、遺構面も認められなかった。また、最下層のシルト層以下は粗砂層の堆積が顕著に認められることから、Cグリッドの東側一帯は、河川が南北方向に拡がっていたものと推定される。

遺物は第4層灰褐色砂質土層より出土したが、主な包含層は第9層灰色粘土層で、土師質皿・瓦器碗・土釜・屋瓦の細片および植物遺体が多数出土した。

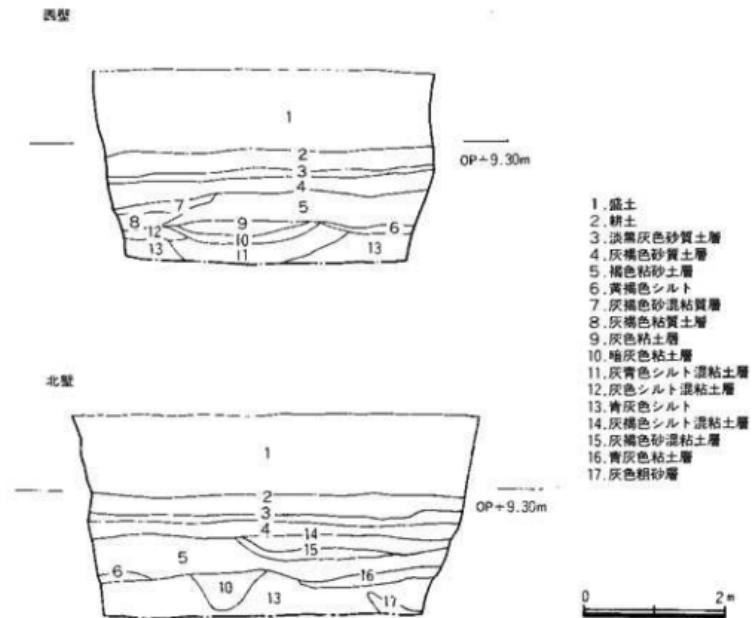


図7 Cグリッド断面図

## IV 出土遺物

出土遺物は、土師質土器・須恵質土器・瓦器・瓦質土器・屋瓦・羽蓋・擂鉢・ねり鉢・中国製磁器・國産陶磁器・漆器・石製品等の中世遺物が主体で、総量はコンテナ5箱分である。

その中でも特にAグリッドの水溜状遺構からは、多数の中世日常雑器と共に数点の漆器碗を検出している。これらの漆器碗は八尾市域にあっては数少ない出土例で、中世末期の生活必需器との組み合わせを知るうえで重要な資料であるばかりでなく、瓦器碗消滅以後の日常雑器の変化を示唆するものと言えよう。

また、仏事に使用されたと推定される花瓶や人物を墨書きした小石は、中世末期の民間信仰の一端を知るうえで、格好の資料を提供している。

以下器種ごとに概観し、遺物の法量・技法・調整についての詳細は一覧表で文末に明示する。

### 1) 土師質皿(図8-1~23)

土師質皿はAグリッドの水溜状遺構、SD3および拡張部の遺構面より多数出土した。

図示した23点は、その口径より概ね小皿・中皿の2種に大別できる。小皿は口径7.1~8.3cm・器高1.4~2.1cm、中皿は口径10.7~12.4cm・器高2.1~2.5cmで、量的には小皿が圧倒的に多く、中皿はわずかに出土した程度である。

#### A類(1~3)

土師質小皿は、完形品を含めて良好な資料を17点図示している。すべて粘土円板手すくね成形を基本とするもので、形状から大別してA~D類の4種に分類することができる。

#### B類(4~8)

技法・調整ともにA類に類似するが、底部中央の突出がゆるやかで、外面に指頭圧痕が目立つものである。

#### C類(9~12)

口縁部をつまみながらヨコナデすることにより端部が尖り気味に終わるもので、底部中央は

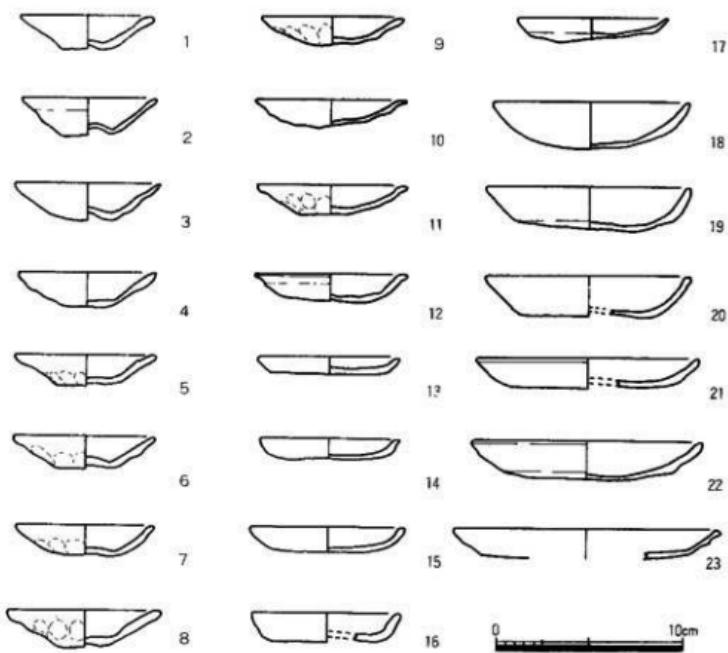


図8 土師質皿実測図

突出しないタイプである。調整は内面に時計回りのナデがあり、外縁には全体に弱いナデを施す。胎土・色調・焼成はA・B類に類似している。また、(10・12)は内外面に灯芯油痕を残す灯明皿である。

#### D類(13~17)

いずれも底部からゆるやかなカーブを描いて立ち上がるるもので、口縁部は上方へつまみ上げられている。調整は口縁部と内面がナデ、外底部は指頭圧痕を残す。焼成は良好であるが、胎土はA~C類が化粧土であるのに対しD類には小砂粒が散見され、色調も乳褐色を呈する。また、D類は全てAグリッド拡張部からの出土で、時期的にはA~C類より若干先行するものと考えられる。

## 2. 中皿(図8-18~23)

小皿同様Aグリッドからの出土で5点を図示している。

(18)は皿というより椀に近い形状で、内面はナデ、外面は指頭圧成形の調整を行なっている。(19・20)はともに底部より斜方向に立ち上がるもので、内面および口縁部にはナデ、外面には指頭圧痕を残す。(21・22)はやや扁平な形状を呈し、体部外面にはヨコナデによる明瞭な段を残す。調整は油者とも内外面にナデを行なうが、(22)は体部内面の一部に一次調整のハケメを残す。(23)も前者同様の調整が行なわれるが、他資料よりやや大型である。

## 2) 瓦器椀(図9-1~9)

瓦器椀は(1)を除き、すべてAグリッド拡張部から出土した。遺物はすべて細片で全容をつかむまでは至らなかったが、その特徴から扁平化が顕著に認められ、調整も全体に粗い。

口縁部の形態には、外面を強くヨコナデすることにより段をもつ(2・4)や弱いヨコナデを行なう(1・3)がある。高台はすべて簡略化の著しい貼付高台で、断面逆三角形を呈する(5~8)や外方向に開き台形状を呈する(9)がある。見込み部には平行直線文を施文する(3・8・9)や格子文を呈する(5)、平行直線文の一部を交差させる(6・7)がある。また、暗文の施線幅には2~3mmを測る(1・6~8)や1mm程度の(3・5)の2タイプが認められる。調整は口縁部外面はヨコナデ、以下は指頭圧痕を残すものが大半を占める。内面は体部・底部ともにナデで平滑にする。胎土は一様に良好であるが、(1)の様に大粒の砂礫を散見するものもある。焼成は良好であるが一部に炭素付着の不良があり、灰白色のものが多い。

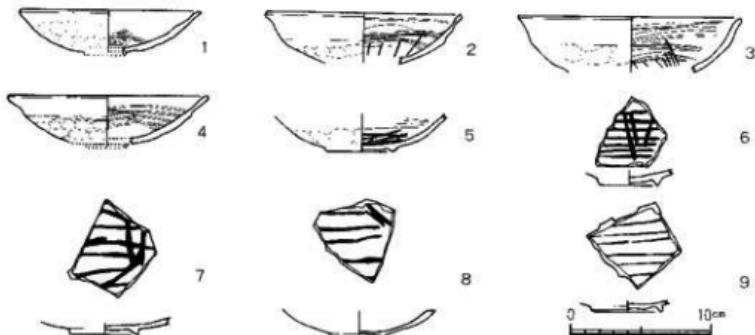


図9 瓦器椀実測図

### 3) 撋鉢・ねり鉢 (図10-1~11)

撋鉢・ねり鉢はA・Bの各グリッドで普遍的に認められたが、(5)以外はすべて細片で出土した。種別には土師質・須恵質・瓦質・陶質の4種がある。

(1)は口縁部が外方向に開き気味に終わる瓦質の撋鉢で、内面には7本単位とする撋目が構

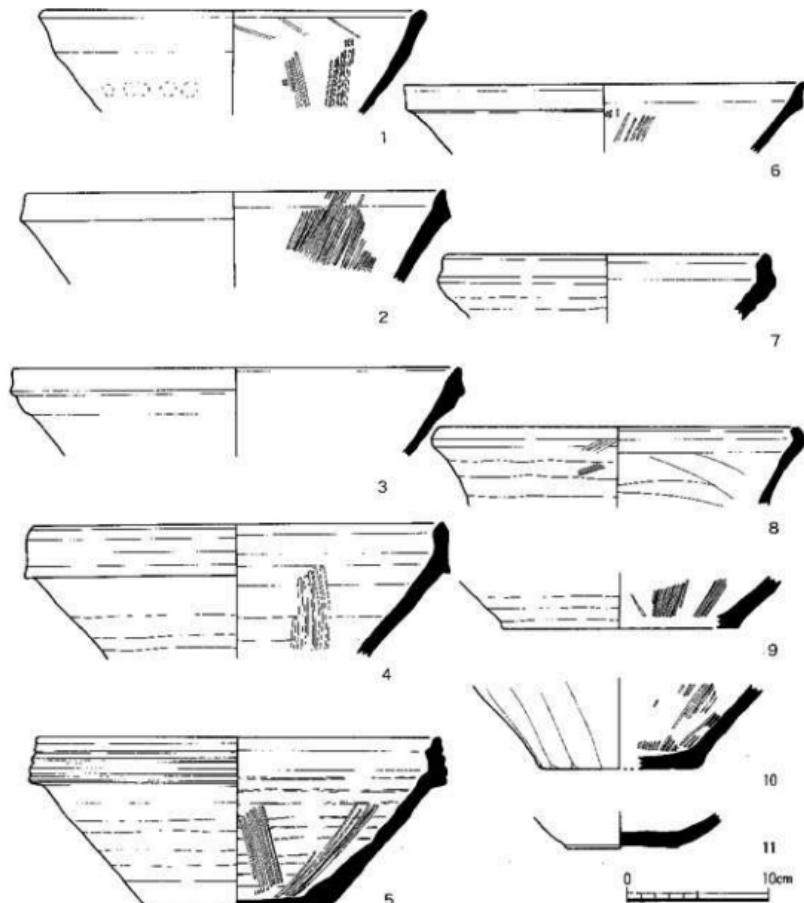


図10 撋鉢・ねり鉢実測図

状工具で描かれている。(2)は逆「く」の字に屈曲する口縁部をもつもので、内面の擋目は単位的でなく、全面に施される。(1)同様瓦質であるが、形態や調整には差異が認められる。(3)は土師質で内面が著しく剥離しているため、擂鉢かねり鉢かの判定はし難いが、同形態のものには瓦質で擂鉢とするものがある。(4・5・7)は偏削焼の擂鉢で、いずれも粘土紐巻き上げ成形によるもので口縁部外外面はヨコナデ調整、体部内外面にはロクロ痕を残す。口縁部の特徴では、直立気味に立ち上がり口縁部下端に垂下りのある(4)や、凹線をもつ(5)や、逆「く」の字形に屈曲する(7)がある。擋目は太めの横状工具を使用する(4)や、ロクロ痕との関係から途中で一部が跡切れる(5)がある。(4)は問壁編年の第ⅣB期に、(5)はV期に比定できる。  
(6)は俗樂焼の擂鉢である。擋目は細片のため単位数・幅とも不明であるが、残存部の擋目は櫛描きでなくヘラ描き条線である。(8)はよく焼しまった土師質のねり鉢で、口縁部外外面は重ね焼のため灰色を呈する。(9)は陶質の擂鉢の底部で、9本を単位とする擋目が横状工具で描かれている。(10)は土師質の擂鉢である。内面の擋目は長期間の使用のため磨滅が著しい。また、外面全体には煤の付着が認められ、一部で指摘されているように直接火にかけて調理する機能を果たした擂鉢であった可能性も考えられる。(11)は須恵質のねり鉢と推定され、外底面には静止糸切り痕が認められる。

#### 4) 羽釜 (図11-1~7)

羽釜はA・Bグリッドから多数出土した。(1)の足蓋を除いてはすべて丸底球形の胴部から水平に伸びる鈎を有するもので、6点を図示している。しかし、大半が口頭部から胴部上半にかけての破片で、全様を知り得た資料は1点も検出していない。

羽釜は口径の大きさにより21cm前後の小型のもの(2・3)、27cm前後の中型のもの(4~6)、31cm以上の大型(7)の3種に大別できる。口頭部は(6)を除いては内傾するもので、外面に2~4の段もしくは凹線を配する。鈎は幅広で、水平方向ないしは斜上方に付けられていて接合部下半で段を有するものが多い。調整は口頭部内面に横または斜方向のハケとナデを施し、外面には丁寧なヨコナデを行なう。胴部以下は横方向にヘラで粗削りが行なわれ、器壁を薄く仕上げている。焼成は灰黒色に焼かれて瓦質を呈する(2・7)と、土師質(3~6)の2種に区別されるが、両者とも技法や調整面では大きな差異は認められない。また、胴部外面は二次焼成を受けて黒色に煤化し、有機物の付着を認める個体が大半を占める。

これら一群の土釜は、当代の鉄釜を模倣したと推定されるもので、口頭部の形態変化から8期に区別されている。問壁編年では、(2・3・4・6)が第6期E<sub>2</sub>、(7)がE<sub>1</sub>に分類される。  
(3)

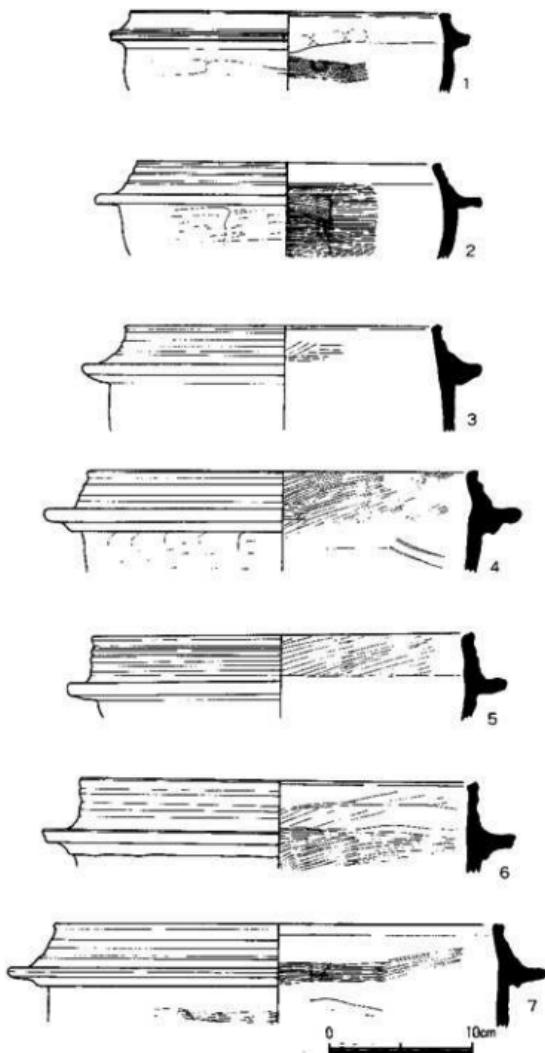


図11 羽茎実測図

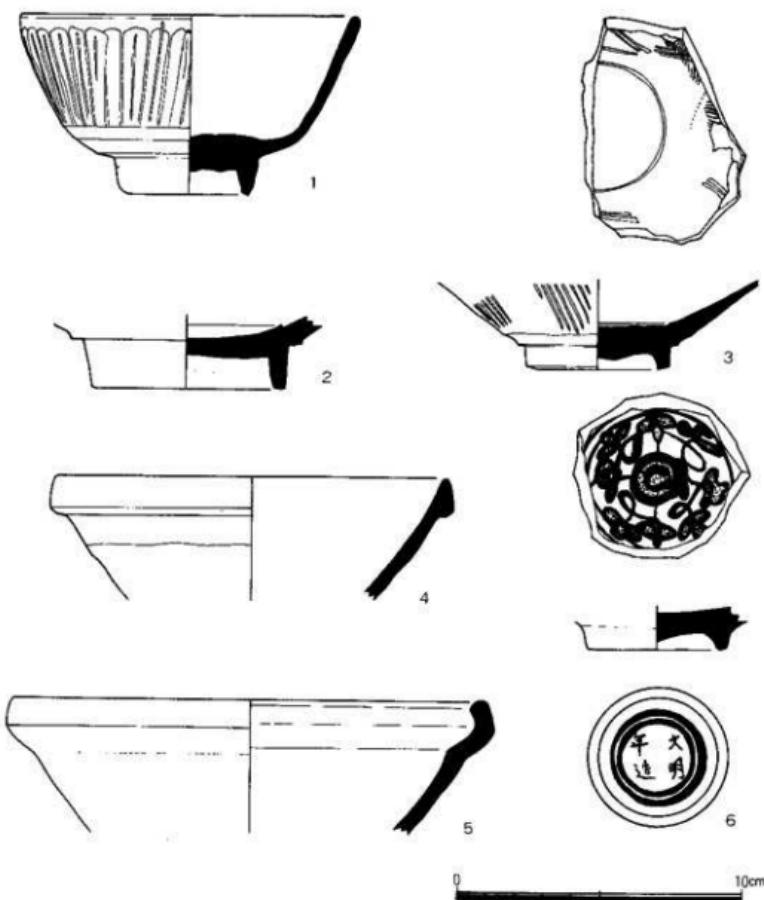


図12 中国製磁器実測図

5) 中国製磁器(図12-1～6)

中国製磁器はA～Cの各グリッドから散発的に出土した。量的には小破片を含めて20点あまりで、器種は碗が大半を占める。碗は、白磁(2・4)・青磁(1・3・5)・染付(6)に区別され、出上位置の違いにより時期差が認められる。

(1)は直口の青磁碗である。体部外面に細蓮弁文をヘラ描きした後、下半をヘラで横方向に削る。釉は淡灰緑色で光沢があり、釉層も厚い。兵庫県伊丹城址の調査では備前焼の擂鉢(間壁編<sup>④</sup>年の第V期)と共に作る例が報告されている。(2)は直立する高台を有する白磁碗で、高台径6.8cmを測る。見込み部は沈線状の浅い段を持ち、中央部はわずかに窪む。釉は白緑色で薄く施釉しているが、全面に細かい貫入が入る。白磁碗V類に分類される。(3)は体部上半を欠損する青磁碗である。内面は弧状の刻線と細かい点綴文を施す。外面は猫かきと称される模描直線文<sup>⑥</sup>が、底部から口縁部にかけて放射状に施される。釉は灰緑色で光沢があり、体部下半まで施釉される。同安窯系青磁碗I類-1-Dに分類される。(4)は玉縁状口縁を持つ白磁碗である。<sup>⑦</sup>釉は灰白色で光沢があり、内面および体部上半に施されている。白磁碗IV類-2に分類される。<sup>⑧</sup>(5)は体部が斜上方へ立ち上がり、上半で外折し角度を変え内弯する口縁部を作る。釉は光沢の少ない青灰色で全体に釉層が厚い。(6)は底部のみ残存の染付碗で、高台底径4.9cmを測る。見込み部分は植物と推定される文様が呉須で描かれている。輪内には2条の圓線の中に銘款がある。双方ともに発色の良い呉須で描かれているが、全体に釉層が厚く染付がくすんで薄く感じられる。釉は透明ガラス質で光沢があり、墨付を除いた全体に施釉されている。墨付には重ね焼の際生じたと推定される陶片の付着が認められる。また、銘款されている文字は「大明」とも、日本の年号である「文明」(1469~1486)とも読むことができる。中国製磁器であり「大明」と読むのが妥当であろうが、文明年間は中国明代で優秀な磁器を生産した成化年間(1465~1487)と併行することから、この時期に日本の注文により製作された可能性も考えられる。日本年号を銘款する最古の例は、和歌山県根木寺遺跡出土の白磁小皿(「天文年造」1532~1555)があり、本資料を「文明年造」と読めばそれよりも古い時期に比定できるが、現段階ではやや疑問を残す。

#### 6) 国産陶磁器 (図13-1~8)

国産陶磁器は主としてAグリッド第1遺構面を構成するSD1・SD2およびBグリッドの遺構面から少量出土した。

(1~4)は伊万里焼の碗である。(1)は丸文の中に桐文様を発色の悪い呉須で濃淡に描いている。(2)は高台脇と体部に圓線が回り、外面には網目文様が淡い呉須で描かれる。(3)は白色の素地に透明釉が施され、高台部に2条、体部に1条の圓線が染付けられる。(4)は高台部から体部にかけて淡い呉須で3条の圓線が施文される。体部の文様は植物を表現したものと考えられるが、破片であり明らかでない。(5)は淡灰色の素地に灰茶色の釉を施す。体部外面の2条の圓線は茶褐色、網目模様はくすんだ呉須で染付けられる。内外面に粗い貫入がはいる唐

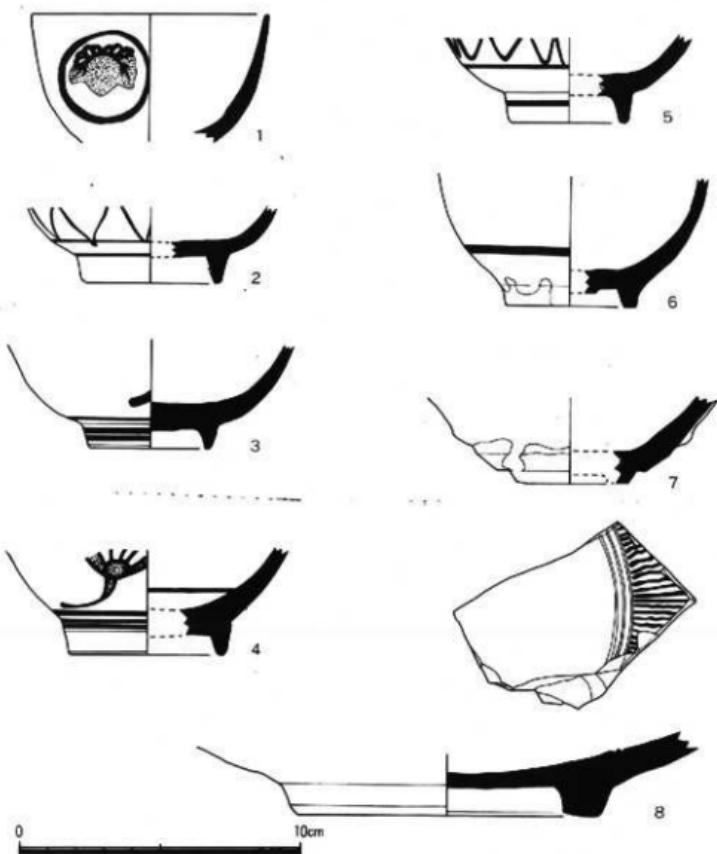


図13 国産陶磁器実測図

津焼の碗である。(6)も唐津焼の碗で白色の素地に光沢のある白緑色の釉を施す。外面には発色の良い異彌で直線文が染付けられ、内外面に粗い貢入がはいる。(7)は蛇ノ目高台をもつ天目茶碗と推定される。内外面ともに光沢のある茶色の釉を施す。(8)は唐津焼の大皿である。高台は幅広で、疊付外面には面取りを施す。内面は3条の圓線を陰刻施文し、そこから放射状に直線と波線を拂で陰刻した後、白泥を塗り込む。

### 7) 漆器 (図14-1~3)

漆器はすべて水溜状遺構下層からの出土で、図示し得たものは3点のみであるが、全体としては数個体分の出土が認められた。器種はすべて碗形で、3点とも原材を横木取りし、ロクロで挽きだす素地製作法が用いられている。漆は素地に淡を塗る等の下地加工をした後、重ね塗りしたものと推定される。

(1)は横方向に張り出した後斜上方へ立ち上がる深い体部をもつもので、口径15.0cm・器高7.9cm・高台底径8.5cmを測る。高台は高く重厚で「ハ」の字形に開き、内面は深く削り出されている。漆は剥離が著しく明瞭でないが、全体に朱漆を塗布した後、体部外面および高台部に黒漆を上塗りしている。口縁部外面には朱漆で絵を描いた部分を認めるが、詳細は不明である。(2)は高台のみが残存するもので、高台底径7.9cmを測る。高台内面の削り込みは浅く、外面には黒漆が塗布されている。見込み部には朱漆で絵が描かれていた痕跡が認められるが、文様の詳細は不明である。(3)はやや小型の椀で残存高6.0cm・高台底径6.8cmを測る。高台は横円形を呈し、裏面は深く水平に削り込まれている。全体に黒漆を塗布した後、外面に鳥(鶴?)、見込みにも鳥をモチーフとした絵が描かれている。

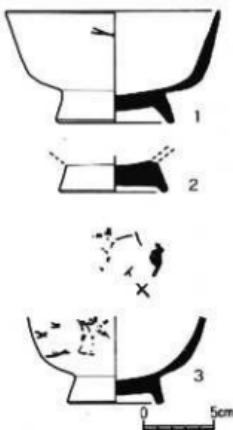


図14 漆器碗実測図

### 8) 仏事遺物

仏事に関連した遺物としては、人物像が墨書きされた小石と花瓶2点を検出している。これらはすべてAグリッドの水溜状遺構下層から他の日常雑器とともに出土したものである。

#### 人物像を墨書きした小石 (図15)

人物像が描かれた小石は、花崗岩質の河原石で、長さ7.1cm・幅2.8cmを測る。人物像は石の平端面を利用して描かれたもので、頭部は鮮明であるが首部以下はやや不鮮明で、脚部は墨痕をわずかにとどめる程度である。

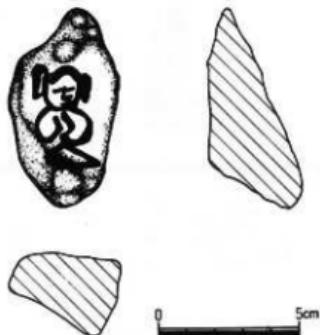
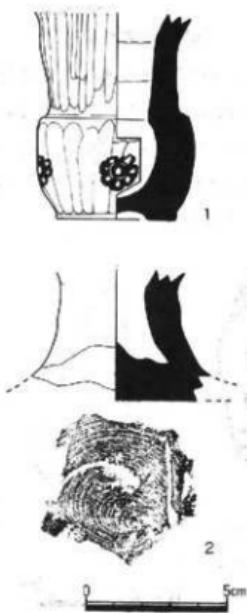


図15 人物像を墨書きした小石

玉子形を呈する顔には穏やかな幼顔が描かれている。耳は双方ともに比較的大きく、左耳がやや上方に描かれている。首の表現は行なわれず直接肩に接続されている。二の腕は丸く描かれ、肘を境に前轉は上方へのび、手はわずかに角度を変え胸の中央で合掌する形で終わっている。脚部は細長い三角形を一笔で描き、座像を表現したものと推定される。これらの図柄から、縱長の耳を垂髪と考えれば、合掌して両膝を着いて座る形で表現されている「太子七歳童形」に類似するものと考えられる。しかし、水に關係する遺構から出土したことから、石神信仰に見られるように流産や死産した嬰児の魂を水に返し、新たなる生命となって生まれてくることを願う民間信仰の一つであるとも考えられる。すなわち水とともに石の持つ生命力、呪力への信仰が、自然石に地蔵像を描くことにより新たなる再生を願ったものとも理解できる。

以上のことから、太子像あるいは地蔵像の双方が考えられるが、現時点では類似する資料がなく、今後の出土例に期待したい。



花瓶（図16-1～2）

(1)は上部を欠損する土師質の花瓶で、底径4.2cm・残存高7.2cmを測る。体部は底部より弯曲して立ち上がり、上端で段を有し、上方へラッパ状に拡がる頸部に統く。調整は体部外面・頸部ともに縱方向のヘラガキを施し、内面にはロクロ痕を頗著に残す。体部外面の印刷文様は八葉蓮華文と推定され、全体を6個で分割している。焼成は良好硬質で茶色を呈し、胎土には小砂粒を散見する。また、底部から体部にかけて煤の付着が部分的に認められる。

(2)は右回りのロクロ水挽き技法で成形された瀬戸焼の花瓶で、残存高4.6cm・残存底径5.2cmを測る。上部は欠損していて不明であるが、欠損部を境として外方向に一度拡がった後、内湾気味に立ち上がる器形を有したものと考えられる。裾部もゆるやかに拡がるものと推定され、中段まで淡黄緑色の釉が薄く施されている。底部は水平で、回転糸切の痕跡を残す。奈良県斑鳩町の仏塚古墳出土の花瓶<sup>⑫</sup>に類例を認める。

図16 花瓶実測図

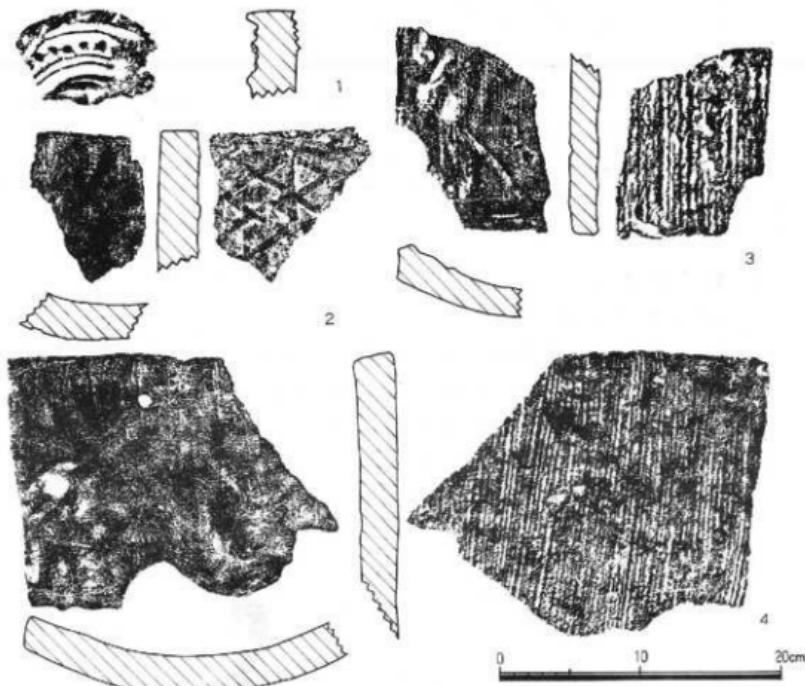


図17 瓦類実測図

### 9) 瓦類(図17-1~4)

瓦類は各グリッドから比較的多数出土した。その中でも特にBグリッドの瓦溜からは、他の中世雜器とともにコンテナ2箱分が出土している。出土した瓦類のうち、軒瓦は軒丸瓦(1)1点のみで、他は丸瓦・平瓦の破片である。

(1)は突出した内区に右巻きの三巴文を配する軒丸瓦である。圓線は細く内側に2本、外側に1本が回る。外区の内縁には小粒でやや不揃いの珠文を配している。胎土は石英粒を多量に含み粗い。焼成は良好堅緻で明灰色を呈している。また、同范瓦が近接する穴太神社から出土している。Bグリッド瓦溜出土。(2)は厚みのある平瓦片で凸面に格子状の押印、凹面には

ナデを施す。全体に砂粒が散見されるが胎土は比較的密である。焼成は良好堅緻で灰茶色を呈する。Aグリッド遺構面出土。(3)は凸面に粗いタタキ、凹面には粗い布目を残す。胎土は良好密である。焼成は良好非常に堅緻で、表面黒灰色・内部明灰色を呈する。Bグリッド瓦溜出土。(4)は凸面に細かく均整のとれたタタキ、凹面は磨滅していく不明瞭であるが、一部に粗い布目が認められる。胎土には小砂粒を多量に含む。焼成はやや不良で表面・内部ともに乳白色を呈する。AグリッドSD3出土。

#### 10) 瓢(図18-1~2)

瓢は常滑焼(1)と瓦質(2)の2点を示している。

(1)は口縁部が外折し、上下に拡張して幅広の縁帯を作っている。口縁部内外面および体部外面は丁寧なヨコナデ、体部内面中位は指頭圧痕を残す。焼成は良好堅緻で茶褐色を呈する。胎土には小砂粒が散見されるが密である。Bグリッド遺構面出土。

(2)は口縁部が外方へ折れ曲がり、端部は丸く終わる。口縁端部と口縁部内面はヨコナデ、体部外面は横方向のハケとヘラミガキが行なわれている。焼成は良好で明灰色を呈し、胎土には小砂粒を多く含む。Bグリッド瓦溜出土。

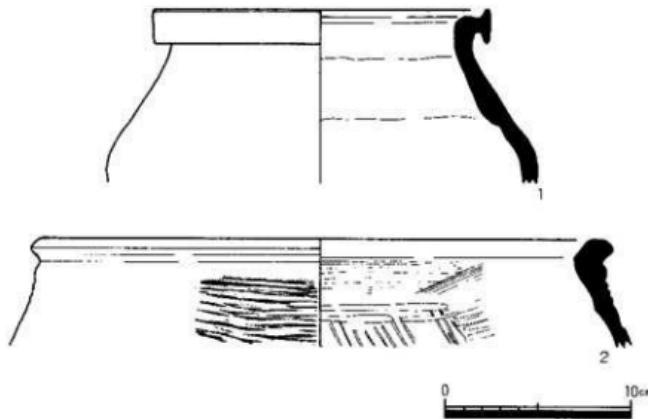


図18 瓢実測図

## V まとめ

今回の調査は限られた範囲にもかかわらず、比較的良好な資料の検出を見、中世末期における日常雑器の組み合わせを知る上で格好の資料を与えてくれた。

近年、本調査のように中・近世の時期に関する発掘例も増加する傾向で、各地でこの時期に該当する遺構や遺物に関する報告も、数多く出されるようになってきた。

しかし、中・近世における遺構・遺物のあり方は、社会的背景や社会構造に伴なう要素が多分に影響しているものが多く、その内容は遺跡間で一様ではない。

とにかく遺物においては、社会的な流通機能が確立してゆく中世にあっても、依然として本国単位、あるいは遺跡ごとに地域色および遺跡間の差を残している。したがって同器種であっても、技法や調整の相違や全般的な年代観に、本国単位ごとに若干の差が認められることは、今まで多くの人々が指摘されてきたことである。

それ故、全般的な指標となる年代の決定は、生産地の限定された一部の特定遺物によって推定しなければならないのが、今日の現状であると言えよう。

今回の調査では包含層を始めとして、水溜状遺構・溝道構・瓦溜から、多数の遺物が出土した。しかし、水溜状遺構以外には時期幅のある遺物が混在していて、層位的には把握し難い。したがって、比較的良好な資料を検出した水溜状遺構の出土遺物を中心に、15世紀末から16世紀前半の日常雑器のあり方について考えてみたい。

水溜状遺構から出土した日常雑器類の基本的構成は、他の一般的中世集落と同じく、煮沸・調理・貯蔵・供膳の4機能からなり、本資料に関しても形態別に区別できる。

煮沸形態では、羽釜(図11-5)がある。水溜状遺構以外の資料が口頭部を3段ないし4段に成形して、ほぼ一型式に捉えられるのに対して、この資料は凹線で段を形成するなど、技法的にも前者より新しい時期に位置づけられるものと考えられる。

また、播磨以西や平安京で盛行をきわめた上鍋は、他の遺構からも出土せず、和泉地方との共通性が認められる。

調理形態としては、擂鉢(瓦質・備前焼)がある。瓦質擂鉢は口縁部外側に面をもたず丸く終わるもので、口縁部の形態変化から3型式に編年されている大園編年(広瀬氏)のC型式に類する資料である。<sup>⑫</sup>一方、備前焼の擂鉢は口縁部の外面に凹線をもち、間壁編年のV期に比定されるもので、兵庫県伊丹城址の調査では、永正16年(1519)の落城に関連した焼土より、このタイプのものが大量に出土したことが報告されている。

また、水溜状遺構以外でも備前焼の擂鉢の出土があり、15世紀後半以降は在地産の土師質や

瓦質にかわって、技術的にも優良な陶器の流通が一般化したものと推定される。

貯蔵形態では常滑焼の大甕の破片を数点検出しただけで、他の流通品やこの時期特有の在地産瓦質・土師質の甕等の出土は見られず、同時期の中・南河内的一般的な遺物構成とはやや異にしている。

供膳形態としては、土師質皿・漆器碗・中国製磁器碗がある。

土師質皿には小・中の2種があり、中でも小皿には中央部が突出する「へそ皿」の存在が注目される。へそ皿は14世紀以降に、平安京を中心として広く分布するもので、中・南河内でも瓦器碗消滅期以降の指標の一つに考えられている。周辺の遺跡では、15世紀前半以降に比定される挾山福年の初期にへそ皿が認められる。また、東大阪市の若江遺跡のS D 1では、消滅期の瓦器碗に共存しており、中・南河内では15世紀前半以降にへそ皿の存在が認められる。しかし、当遺跡のへそ皿は挾山遺跡の資料とは形態的に異なり、高尾城址で2.5~3寸ものに分類されている資料に類似するものと考えられる。<sup>④</sup>

また、この時期に突発的にへそ皿が出現することは、従来の灯明皿から発展して、中央部を突出させることにより油溜まりを良くし、最後まで能率よく油を使い切ると言った、機能面での変化が考えられる。さらに、当時の社会経済面から考えれば「座」等の流通体制が整いつつあるこの時期にあっても、燈油(菜種・ゴマ)等の需要品は天候に左右されやすく、供給景も不安定であったものと推定される。このことから、油容量の少ないへそ皿は、当時の経済体制を反映したものの一つであった可能性も考えられよう。しかし、すべてのへそ皿に灯芯油痕が認められるわけではなく、実体についてはなお不明な点が多い。

漆器は6個体分を検出している。これらは瓦器碗消滅以降の日常雑器の変化の一端を示すもので、当遺跡出土の資料のように高い高台をもつタイプは、15世紀以前にはその存在が認められず、この時期の所産と推定される。

中国製磁器は、碗2点を検出している。その中でも染付碗には前章でも一部触れたように鉢款があり、15世紀後半の移入品と考えられる。これは、水溜状遺跡構出土の一括遺物を概ね15世紀末~16世紀前半に比定した根拠となり得る資料の一つである。

日常雑器以外では、瓦片を多数検出した。この瓦類はすべて、東方に近接する穴太神社境内に位置した千眼寺に関連するものと推定される。千眼寺址では、瓦以外でも水溜状遺跡と同時期に属する遺物を検出していることから、この時期に寺と集落が併存する関係にあったことが窺われる。

また、穴太神社南側の宮町1丁目でも、中国製磁器(水注・花瓶)の完形品を検出しているこ<sup>⑤</sup>

とから、穴太神社を中心とする集落は広範囲な拡がりをもっていたことが推定される。

以上、水溜状遺構出土の遺物を中心に、概略を記した。しかし、今回の調査では遺跡の一部を検出したにすぎず、多くの問題点を残したことは否めない。

今後これらの問題を解明することは、千眼寺の寺域の範囲や、関連する集落との関わりを考えるうえで、重要な事柄と言えよう。

(注 記)

- 1 吉岡哲「大阪府八尾市出土瓦について」『古代研究16』元興寺文化財研究所 1978年
- 2 間壁忠彦・間壁蔵子「備前焼研究ノート(1)-(2)-(3)」『倉敷考古館研究集報』1・2・5号倉敷考古館 1965・1966・1968年
- 3 稲垣晋也「法隆寺出土資料による土器の編年」『大和文化研究』第7巻第7号 大和文化研究会 1962年
- 4 伊丹市教育委員会「伊丹城跡発掘調査報告書III」 1978年
- 5 ①前掲書
- 6 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』 1978年
- 7 ⑥前掲書
- 8 ⑥前掲書
- 9 東京国立博物館「日本出土の中国陶磁」 1978年
- 10 大瀧八郎「石神信仰」木耳社 1977年
- 11 斑鳩町教育委員会「斑鳩・仏塚古墳」 1977年
- 12 大阪府教育委員会「大園遺跡発掘調査概要・V」 1981年
- 13 ②前掲書
- 14 ④前掲書
- 15 大阪府教育委員会「挟山遺跡・軒里遺跡発掘調査概要」 1974年
- 16 東大阪市教育委員会「若江道路3D U8 地区の調査」[『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要』 1980年]
- 17 大阪府教育委員会「高屋城址発掘調査概要VII」 1981年
- 18 八尾市教育委員会「宵町遺跡発掘調査概要I」 1982年

## V 出土遺物観察表

### 1) 土師質皿

実測図 番号	器種	出土位置	法量(単位:cm)			形態・製作技法	色調	胎上	焼成	備考
			口径 (底径)	器径	器高					
1	小皿	Aグリッド 水滴状 造構	7.1	-	1.8	底面中央から上方へ突き出る。口縁部が斜め方向に立ち上がる。内面は均等留めのヨコナギ。外底は指捺印成形を施す。	乳灰色	精良	良好	
2	小皿	#	7.2	-	2.0	底上円板手留印成形。内面時計回りのヨコナギ。外底は塊状ナナニ溝型。	乳灰色	良好 砂粒を散見する。	良好	完形
3	小皿	#	7.8	-	2.0	内面及び口縁部外面ナナニ成形。体部外から底部にかけては弱いナナニを施す。	乳灰色	精良 化粧土	良好	内面黒色に焼成した部分あり。完形
4	小皿	#	7.3	-	1.9	内面は時計回りのヨコナギ。外面は指捺印成形後、ナナニ溝型。	白灰色 (外面) 赤褐色 (内面)	精良	良好	内外両に灯芯油痕。完形
5	小皿	#	7.6	-	1.6	体部中段で角度を変え外反する。内面体部ヨコナギ。外面は指捺印成形後、弱いナナニを施す。	乳灰色	精良	良好	
6	小皿	#	7.5	-	1.9	外面底面中央から内面向かってわずかに突出する。内面時計回りのヨコナギ溝型。	乳灰色	精良	良好	完形
7	小皿	#	7.2	-	1.6	底面より内面気泡に立ち上がる。内面及び口縁部はヨコナギ。体部外から底部にかけては指捺印成形を施す。	乳灰色	精良	良好	完形
8	小皿	#	8.1	-	2.1	底面中央が若干上方へ突き上げられている。内面及び口縁部はヨコナギ。体部から底部にかけては指捺印成形を施す。	乳灰色	精良	良好	
9	小皿	#	7.6	-	1.5	全体に均等な作りである。内面は時計回りのヨコナギ。外面はねずみ口口縁部をナナニだけにして、以下はほとんど未溝化である。	乳白色	精良	良好	完形
10	小皿	#	8.2	-	1.4	口縁部が直角平行に伸びる。内面は時計回りのヨコナギ。外面は口縁部のみヨコナギ以下は弱いナナニを施す。	乳灰色	精良	良好	内面中央に灯芯痕あり。完形
11	小皿	#	8.1	-	1.5	口縁部やや厚く、直角平行に伸びる。内面時計回りのヨコナギ。外底体部には指捺印成形を施す。	乳白色	精良	良好	完形
12	小皿	#	8.2	-	1.5	口縁部は水平方向に強く外反し、口縁部は尖り弧形で伸びる。内面時計回りのナナ。外底は口縁部のみヨコナギ以下は弱いナナニを施す。	乳灰色	精良	良好	内面に灯芯痕あり。完形
13	小皿	Aグリッド 造構面	7.5	-	1.0	口縁部は底部から上方を巻びて立ち上がり、口縁部は丸くゆれる。内面及び口縁部はナナ以下は未溝化である。	乳白色	良好 砂粒を含む	良好	

実測図番号	器種	出土位置	法量(単位cm)			形態・製作技法	色調	胎土	焼成	備考
			口径 (底径)	器径	器高					
14	小皿	Aグリッド 造構面	7.5	-	1.1	口縁部は直角近くで外反し、底部は丸くれる。内面及び口縁部はナガ。以下は帯状压痕を残す。	乳褐色	精良	良好	
15	小皿	#	8.3	-	1.4	口縁部は直角より内反弧線に立ち上がり、口縁部は大きく斜る。内面及び口縁部はナガ。外側風景には指印や火の跡がある。	乳褐色	良好 砂粒を含む	良好	
16	小皿	#	8.0	-	-	底部より直角カーブを傾き立ち上り、口縁部は丸味を持つて斜らる。内面及び口縁部は丁寧なナガ。体部外側はヨコナガによる底部との境を作ること。	乳褐色	精良	良好	
17	小皿	Aグリッド SD 5	8.1	-	1.2	底部より斜方向に立ち上がり、口縁部は丸味を持つて斜らる。内面及び口縁部は丁寧なナガ。体部外側と底部は指印や火の跡がある。	乳褐色	良好 砂粒を散見する	良好	完形
18	中皿	Aグリッド SD 3	10.7	-	2.5	底面から立ちやすかにカーブを描き立ち上がるものの、跡には拘束を示す。している。内面及び口縁部はナガで外側は指印や火の跡。全体に深く仕上げられている。	乳褐色	良好 砂粒を散見する	良好	
19	中皿	#	10.9	-	2.3	全体に窓型のゆかみが認められる。内面はヨコグリッドアラを施す。外側は口縁部ではヨコナガ。以下は指印による後ナガ調整。	乳褐色	精良	良好	完形
20	中皿	#	10.9	-	-	わずかに底部が上凸面になっている。内面及び口縁部は丁寧なナガ。口縁部外側と体部の端にはナガによる接觸が走る。	乳褐色	精良	良好	
21	中皿	Aグリッド 造構面	12.0	-	-	斜方に立ち上がり、口縁部は丸味を持って斜る。内面及び口縁部はナガ。以下は弱いヨコナガによる接觸が認められる。	乳褐色	精良	良好	
22	中皿	Aグリッド SD 4	12.4	-	2.1	斜方より斜方間に立ち上がり、口縁部はやや立ち上げられ丸くなる。外側底部は弱いナガにより体部と底部の接觸を明瞭にしている。内面体部ハンドの接觸アラを施す。	乳褐色	良好 砂粒を含む	良好	
23	中皿	#	14.4	-	-	底部中央にはヨコナガによる凹窓型がある。内面側とともに細なナガ接觸が行なわれる。	乳褐色	良好 砂粒を含む	良好	

## 2) 瓦器輪

実測図番号	器種	出土位置	法量(単位cm)			形態・製作技法	色調	胎土	焼成	備考
			口径 (底径)	器径	器高					
1	瓦器輪	Aグリッド 造構面	12.9	-	-	直角より斜方間に立ち上がり、斜方側へ立ち上がる。口縁部は外側ヨコナガ。体部外側は指印压痕を残す。	灰黒色 ~灰色	良好 砂粒を散見する。	良好	
2	瓦器輪	#	13.7	-	-	口縁部は強いヨコナガにより直角を有する。内面体部ヨコナガ。見込み部は平行斜えを施す。	灰色	精良	良好	
3	瓦器輪	#	15.5	-	-	体部中央で角度を変えて立ち上がり、口縁部は内外方に立ち上がる。外側底部ヨコナガ以下指印压痕。内面体部水平方向のヨコナガ。見込み部平行斜え。	灰色	精良	良好	

実測回 番号	器種	法量(単位cm)			形態・製作技法	色調	胎土	焼成	備考	
		出土位置	口径 (底径)	器径						
4	瓦器柄	Aグリッド 遺構面	14.0	—	—	底面より斜方斜に立ち上がり、口 縁部に施されたヨコナギにより側面を 強調する。内部外縁部は斜方斜 のヨコナギ。体部外縁部は斜方斜 のヨコナギ。	灰黒色 ～灰色	精良	良好	
5	瓦器柄	Aグリッド SD 4	(4.8)	—	2.6 (底径高)	内面全部へヨコナギ。見込み部は 横に斜方斜に施されたヨコナギ から斜方斜を施したもので、 斜方斜に一部す。	墨灰色	精良	良好	
6	瓦器柄	Aグリッド 遺構面	(4.0)	—	1.1 (底径高)	胎内斜に一端する窓台で、断面二 角形を呈する。見込み部は平行複 文を施文している。	灰色	精良	良好	
7	瓦器柄	Aグリッド SD 5	(4.8)	—	2.1 (底径高)	窓台は内側から外に向かってナギが 進むため窓部は尖り気味に終わる。 見込み部は平行複文、外縁部は 斜方斜直面である。	灰色 ～微砂を 多量に 含む。	良好	良好	
8	瓦器柄	Aグリッド 遺構面	(3.6)	—	2.1 (底径高)	窓台は胎土柱をわずかに貼り付け たもので、窓部は厚く見え、口縁部 は外縁部で、見込み部は平行複文を施 文する。	灰色	精良	良好	
9	瓦器柄	Aグリッド 遺物包 含層	(5.2)	—	0.8 (底径高)	窓台に押しつけられた窓台で、断 面二角形を呈する。見込み部の複文 は細く1mm程度の細文である。	墨灰色	精良	良好	

### 3) 摺鉢・ねり鉢

実測回 番号	器種	出土位置	法量(単位cm)			形態・製作技法	色調	胎土	焼成	備考	
			口径 (底径)	器径	器高						
1	擂 鉢	Aグリッド 水槽状 遺構	26.5	—	7.5 (底径高)	口縁部は体部上半からゆるやかに 外反する。底部は厚く見え、口縁部 は外縁部及び内縁部丁寧なヨコナギ。 外縁複文が成形。器身は7本 筋の網目状を施す(幅約3cm)。	黑色 ～砂粒を 多量に 含む。	砂粒を 多量に 含む。	良好	瓦質	
2	擂 体	Cグリッド 遺物包 含層	29.4	—	6.5 (底径高)	体部は斜上方へ伸び、口縁部はぐく の半球を形成する。口縁部内外縁部ナギ のヨコナギ。器身は成形で、器身は底 で一組の筋部で通す。	淡灰色	砂粒を 多量に 含む。	良	瓦質	
3	ねり鉢	Bグリッド 瓦 潟	31.6	—	6.2 (底径高)	底面は上下で腰を有し、「く」字形 を呈する口縁部に統じて、体部内面は ヨコナギ。器身は成形で、器身は底 で斜めの筋部で通す。	乳灰色	砂粒を 多量に 含む。	不良	土師質	
4	擂 鉢	Bグリッド	28.8	—	9.5 (底径高)	口縁部は内側突出して立ち上がり、 口縁部下端には外方向に弧がれた 丸下りがつく。内面ヨコナギ成形の ヨコナギ。器身は成形で、器身は底 で斜めの筋部で通す。	茶褐色	良好 砂粒を 含む。	好 堅	備前焼	
5	擂 鉢	Aグリッド 水槽状 遺構	28.5 (15.0)	—	12.0	口縁部は七方に内側に立ち上がり、 外方向に3本の配筋窓がある。 窓は斜め上へ成形で内側にはヨ コナギを残す。器身は12条を単位 としていて2段階で作成。	赤茶色	精良	好 堅	備前焼	
6	擂 鉢	Bグリッド 遺構面	28.2	—	5.0 (底径高)	口縁部は斜上方へ伸び、口縁部 は外反して弧がる。内外縁部ヨコナ ギ。器身はハラ筋による施用である。	黄褐色	器身に 多量の 砂粒を 含む。	良 堅	好 堅	信楽焼
7	擂 鉢	Aグリッド SD-3	22.5	—	4.7 (底径高)	口縁部は「く」字形を呈し、内面 に深んだ面をもつ。口縁部内外縁 部ヨコナギ。体部内外縁部はヨコナ ギを残す。	暗紫色	精良	良 堅	好 堅	備前焼

実測回 サ 器種	出上位置	法量(単位cm)		形態・製作技法	色調	胎土	焼成備考
		口括 (底径)	器深 (高さ)				
8 ねり鉢	Aグリッド SD 3	25.3	—	5.1 (底面高)	茶褐色	精良	良好
9 擂鉢	Bグリッド 瓦溜	(16.6)	—	3.3 (底面高)	淡茶色	精良	坚硬 好鐵
10 擂鉢	Aグリッド 水溜状 造模	(10.8)	—	5.5 (底面高)	淡茶灰褐色 外面部は底面正形成でチリ方向のヘラを擦り付ける。端部は下から上 方向の施拂で6条を一单位としている。	微砂を 多量に 含む。	良 七師質
11 ねり鉢	Aグリッド 造物包 含層	(7.7)	—	2.5 (底面高)	灰色	精良 砂粒を 散見す。	好鐵 頃惠質

#### 4) 羽絆

実湖器 番号	器 種	出土位置	法 量 (単位cm)		形態・製作技法	色 調	胎 土	焼 成	備 考
			口 径 (底径)	器 深					
1	足 釜	Aグリッド SD 3	22.6	25.5 (底高)	5.8 コナテ。内面底部は四角切。	口部はやがて内側へ立ちあがり、底部は水平で終わる。脚は細かく六方に付く。口部裏及び脚部ヨコナテ。内面底部は四角切。	黒灰色	好 砂鉄を 多量含む。	良 好 瓦質
2	羽 釜	Bグリッド 瓦 潤	21.4	27.0 (底高)	6.6 内面の口部は3段に成形されている。口部底内面及び脚部は直線的なヨコナテ焼結。体部内面ハケ網目。外側表面は左から右へラグ仕上。	内面の口部は3段に成形されている。口部底内面及び脚部は直線的なヨコナテ焼結。体部内面ハケ網目。外側表面は左から右へラグ仕上。	灰色	好 砂鉄を 多量に 含む。	良 好 瓦質
3	羽 釜	#	22.3	28.1 (底高)	7.5 内底する口部は4段に成形されている。口部底内面及び脚部は直線的なヨコナテ焼結。内面は焼結部ではハケ網目、以下ヨコナテ焼結。内面に有機物の付着を認めめる。	内底する口部は4段に成形されている。口部底内面及び脚部は直線的なヨコナテ焼結。内面は焼結部ではハケ網目、以下ヨコナテ焼結。内面に有機物の付着を認めめる。	焼成灰 内面 黒色 に焼化。	砂粒、 砂礫を 含む。	軟 質 土師質 ローリング を受ける。
4	羽 釜	#	27.2	33.3 (底高)	7.3 内底する口部はヨコナテにより3段に成形されている。口部底内面はハケ。口部底内面及び脚部はヨコナテ。外側表面は左から右へのハラグ仕上。	内底する口部はヨコナテにより3段に成形されている。口部底内面はハケ。口部底内面及び脚部はヨコナテ。外側表面は左から右へのハラグ仕上。	火色 脚部 以下黑色 に焼化。	良 好 砂鉄を 含む。	や や 軟 質 半瓦質
5	羽 釜	Aグリッド 水潤状 造構面	28.6	31.0 (底高)	5.7 (底高)	内底する口部に直角の断面により4段に成形される。肩やや上向て入り足部ヨコナテ焼結されている。口部底内面は方向に向かうハケのヨコナテ。内面底部はラグ仕上。	焼成灰 脚部 以下黑色 に焼化。	砂粒、 砂鉄を 多量に 含む。	良 好 土師質
6	羽 釜	Aグリッド 造構面	27.8	33.2 (底高)	6.4 (底高)	内底する口部はヨコナテにより2段に成形される。口部底内面はハケ。口部底内面及び脚部はヨコナテ。内面は直角のハラグ仕上。脚部ヨコナテに有機物の付着している。	乳白色 脚部下部 以下黑色 に焼化。	1mm大 の長石 を多量に 含む。	良 好 土師質
7	羽 釜	Bグリッド 造構面	31.6	38.2 (底高)	7.2 (底高)	内底する口部はヨコナテにより2段に成形されている。内面焼合 ハケ。体部ナサ。外側体部ハラ グ仕上。	灰色	良 好 砂鉄含 む。	良 好 瓦質

### 5) 中国製猫糞

実測器 番号	器種	出土位置	法量(単位cm)			形態・製作技法	色調	胎土	焼成備考
			口径 (底径)	器径	器高				
1	青磁碗	Aゾウド 水槽状 遺構	11.9 (4.2)	-	6.4	本丸さき口成形、体部は別方向に立ち上がり、口縁部は直角となる。体部内面に簡單な文を刻出し、内面底上半部にはヘラケツリ、内面底上半部にはヘラカズリ。	淡灰緑色 (光沢)	精良	堅緻

実測圖 番号	器種	出土位置	法量 (単位cm)			形態・製作技法	色調	胎土	焼成	備考
			口径 (底径)	器深	器高					
2	青磁碗	Aグリッド 水溜状 遺構	(6.8)	-	2.6 (底径)	全体に細かい質入がある。 輪郭は一部混合部周囲に濃い色 及び内部内面は露光である。	淡緑白色	精良	堅緻	高台部 完存
3	青磁碗	Aグリッド S D 3	(5.0)	-	3.4 (底径)	本器もクロロ成形。外側は底部へラ ケズの後擦磨加工。内側は弧 状の凹凸と点突起。底被は底部下 半で、高台部は内側面と底被 がある。	淡灰緑色	精良	堅緻	
4	白磁碗	Cグリッド 遺構面	13.7	-	-	内側は外側に折り返されて壁 狀の縁を作ること。内側及び体部前面 上まで成化色の跡を残す。	灰白色 (光沢)	精良	堅緻	
5	青磁碗	Bグリッド 遺構面	16.6	-	-	体部上部で外折し、口部肥らや 内刃し、縁部は丸く熱る。青磁の 物がばかりに施されている 全体に細かい質入がある。	青灰色	精良	堅緻	
6	染付碗	Aグリッド 水溜状 遺構	(4.9)	-	1.5 (底径)	内側は二重の凹をもつて斜 面に底被で大きな粒が付いている。 外側表面には「文部造」の跡が 2つの個體の中に黄色の食い焼附 で施付されている。	白色 (光沢) 黒い斑 ガラス質(点入)	精良	堅緻	高台部 完存

### 6) 国産陶磁器

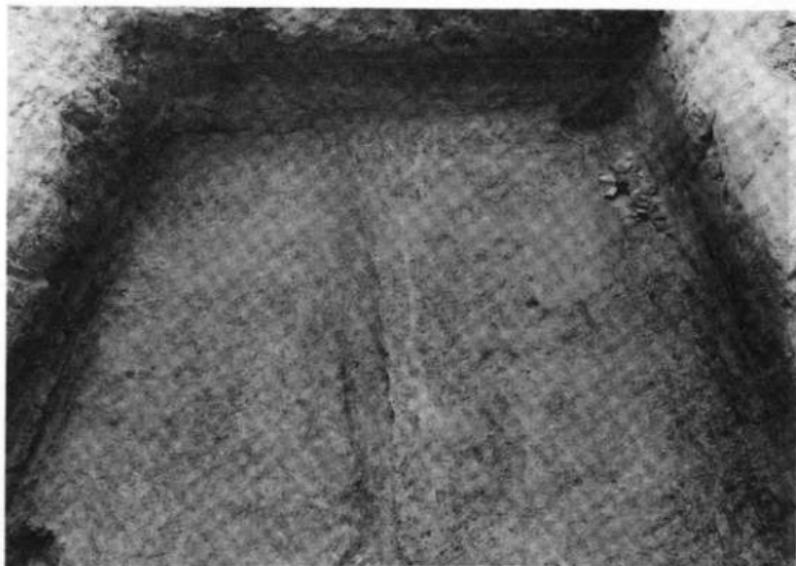
実測圖 番号	器種	出土位置	法量 (単位cm)			形態・製作技法	色調	胎土	焼成	備考
			口径 (底径)	器深	器高					
1	碗	Bグリッド 遺構面	8.4	-	-	ゆるやかなカーブを描いて立ち上 がり口縁部は直口となる。白底 に白灰色の斑を施す。外側には直 径3.2mmの丸穴中に斜向の支援が施 かれている。	白灰色	精良	堅緻	
2	#	Bグリッド 遺構面	(4.3)	-	3.6 (底径)	前方方に切られた縦、ゆるやかに カーブを描いて立ち上がる。縁部 は直口に2重、体部に1重を施付 する。内側面に輪状の裏ね模様を 施す。	白灰色 (光沢)	精良	堅緻	
3	#	Bグリッド 遺構面	(4.8)	-	2.7 (底径)	白色の表面に紅色の斑が走る。 外側は白い品と体部の内には黑色の 赤い斑と1条の黄褐色の斑が付ける。 体部外側には日本目文を施す。	白灰色	精良	堅緻	
4	#	Aグリッド 第4層	(5.5)	-	3.6 (底径)	白色の表面に丸い斑のある白灰色の 斑を施す。芦舟部分で2重にかけ て深い凹みで2条の内側が施付さ れる。体部文様は不明。	白灰色 (光沢)	精良	堅緻	
5	#	Bグリッド 遺構面	(4.0)	-	3.2 (底径)	淡灰色の表面に褐色の斑を施す。 外側の凸起及び体部の内には赤色の 斑が走る。内側には1条の黄褐色の斑 が付ける。全体に粗い目入がある。	灰色 (光沢)	精良	堅緻	
6	#	Aグリッド 第4層	(5.6)	-	3.9 (底径)	前部から西側して立ち上がる。内 外めどとの色の差異に白色の斑 を施す。外側には1条の黄褐色の斑 が付ける。全体に粗い目入がある。	白灰色 (光沢)	精良	堅緻	
7	天目碗	Aグリッド 第4層	(4.0)	-	-	輪郭を立てて輪郭を施す。昔に明 治時代青白釉と呼ぶ。表面は青 紫色で、輪郭部やねじり部は露 出である。	明茶色 (一部黒 色)	精良	堅緻	
8	唐津 大皿	Aグリッド 水溜状 遺構	(10.6)	-	4.0 (底径)	青白釉で、表面は翠青色の釉 を施す。外側は青白釉で、内側は 青白釉を中心にして内側には直口と 輪郭を付けて、内へ凹凸を付けて いる。	青茶色 (内面) 翠青色 (外側)	精良 砂粒を 散見する。	堅緻	



調査地近景（東より）



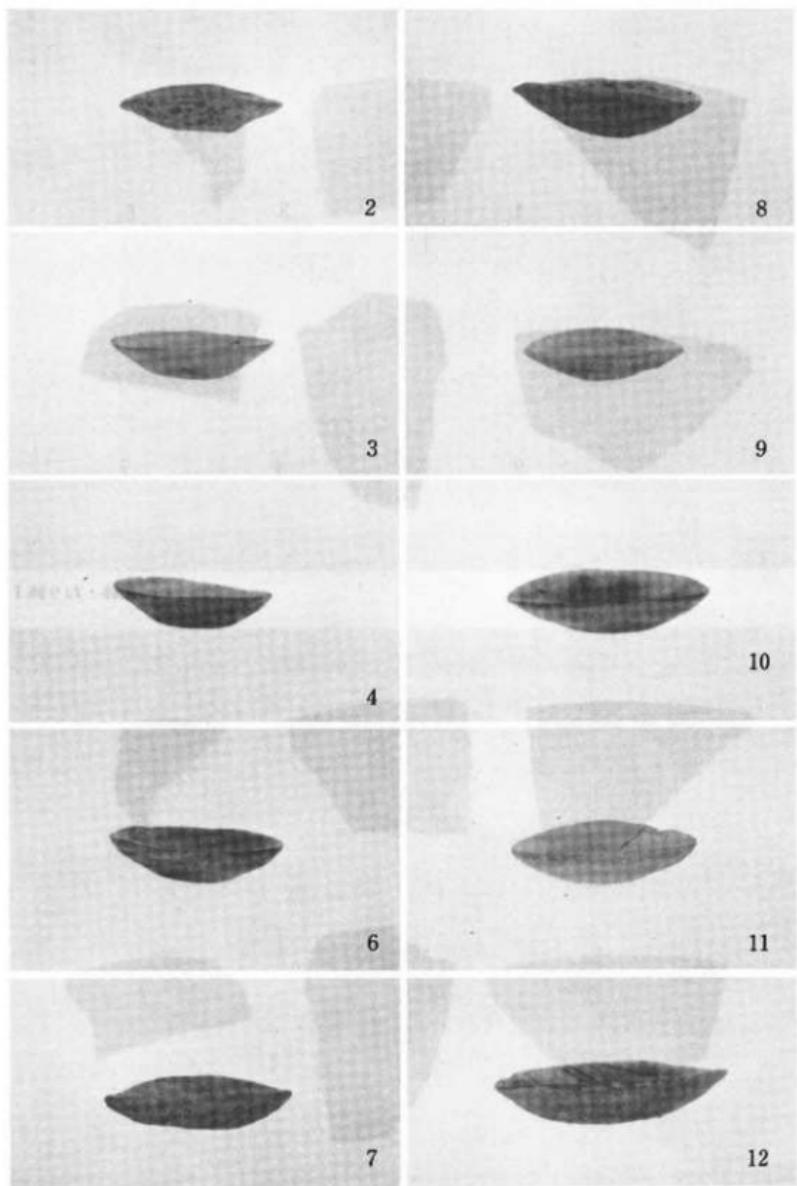
Aグリッド 遺構検出状況



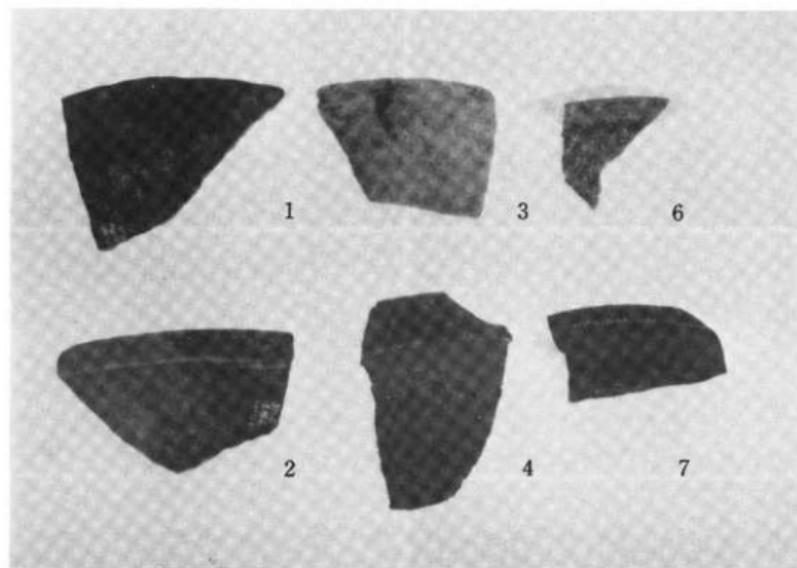
Bグリッド 造構検出状況（北より）



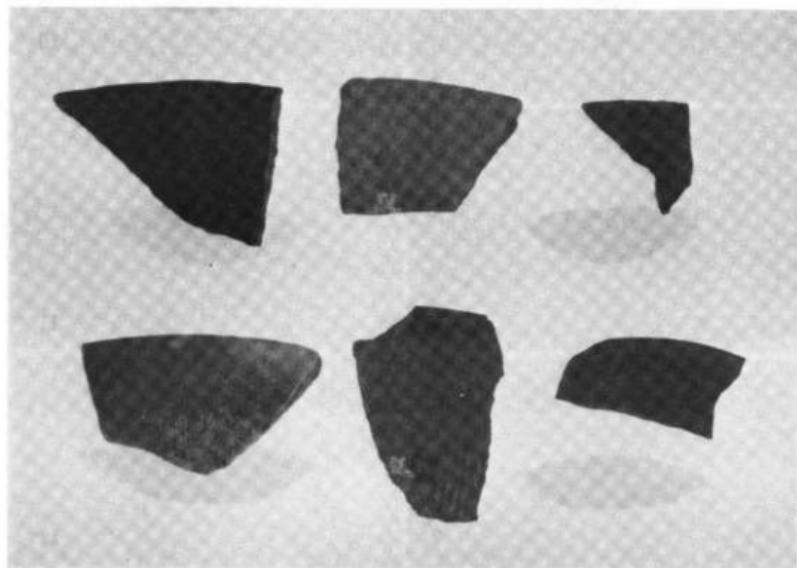
同上 瓦溜（東より）



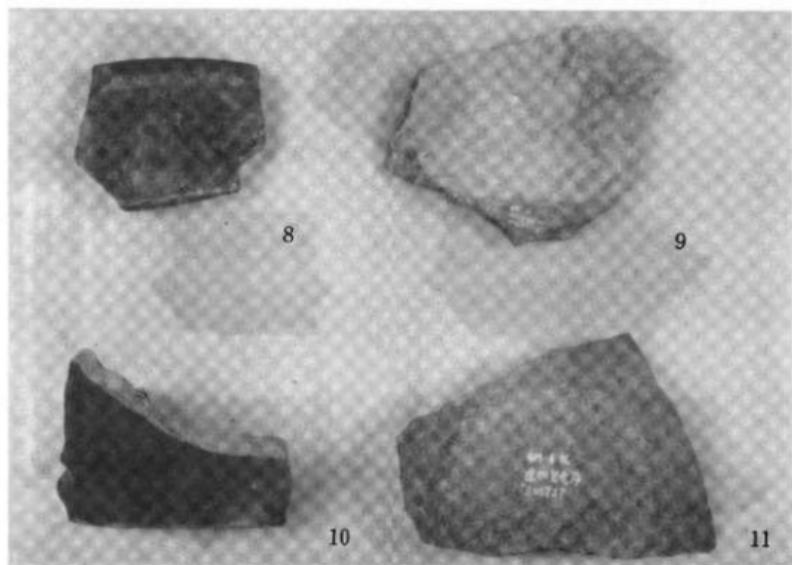
土師質小皿



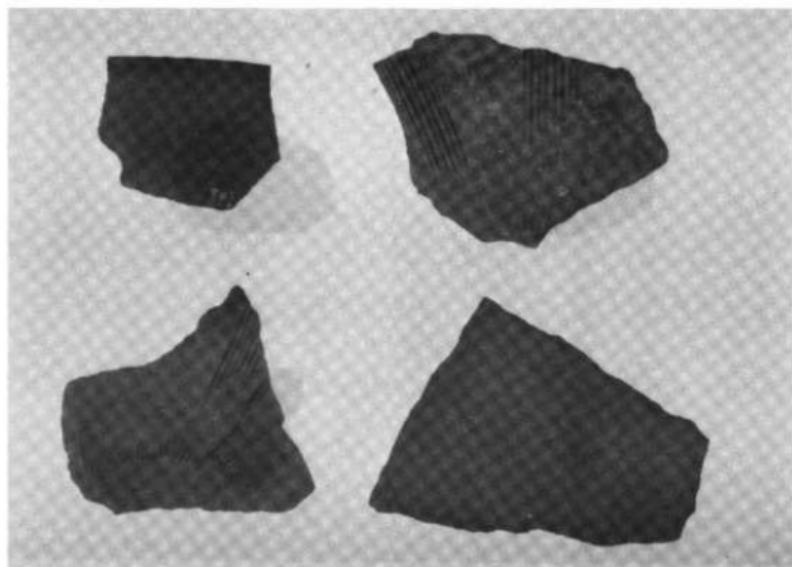
擂鉢・ねり鉢 I



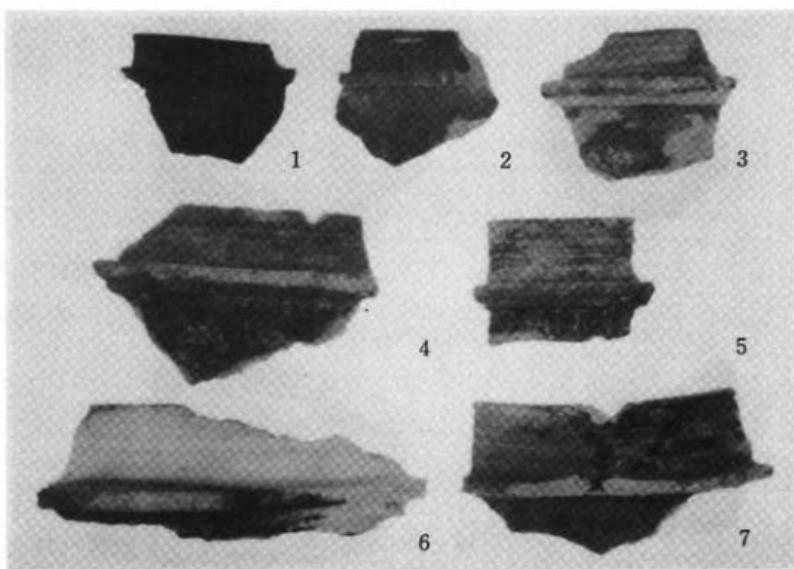
同上 (内面)



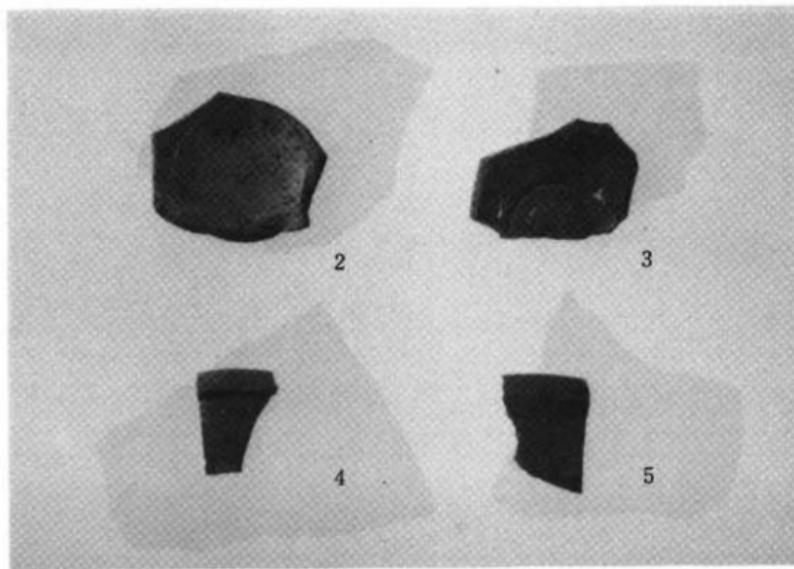
擂鉢・ねり鉢II



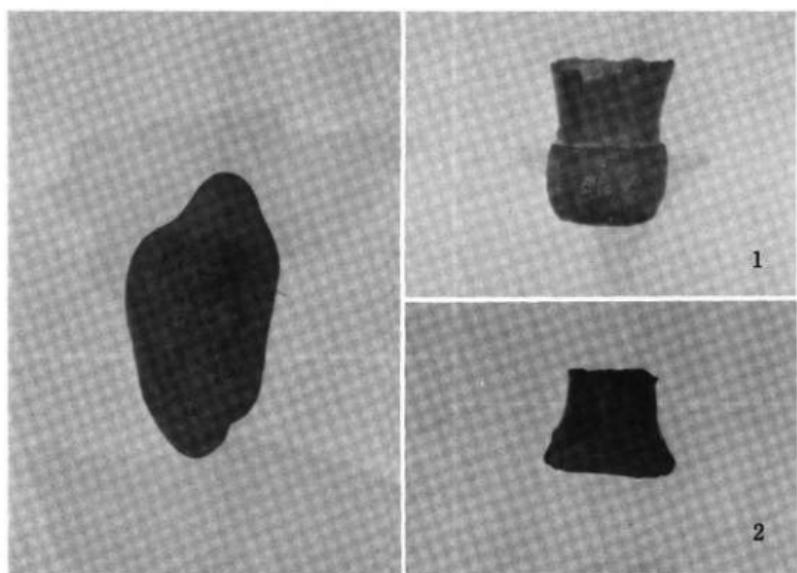
同上 (内面)



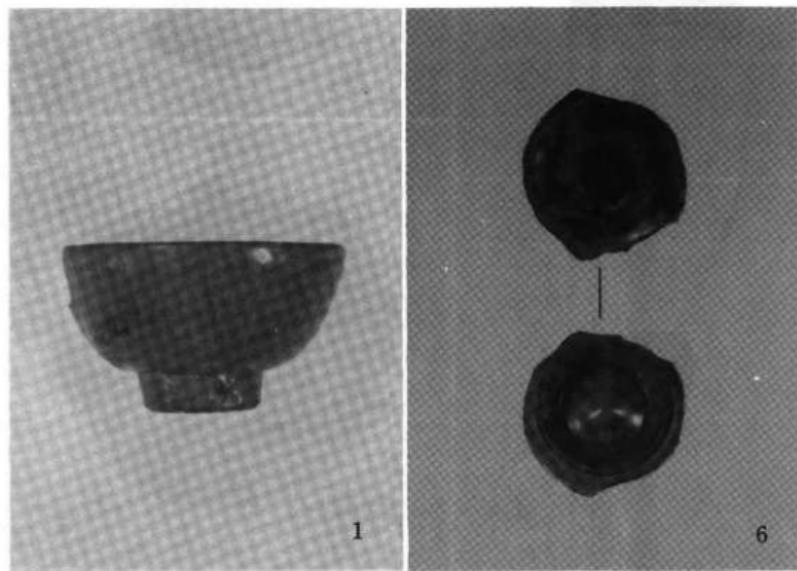
羽釜



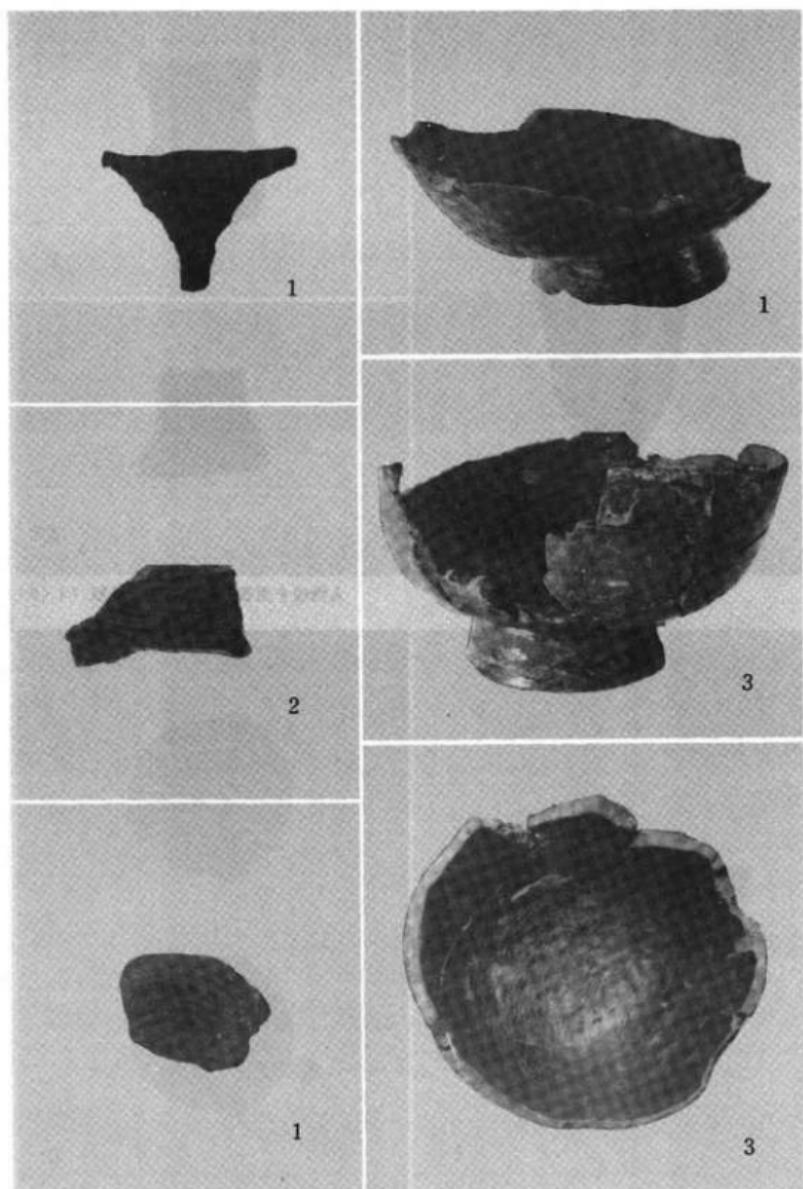
中国製磁器



人物像を墨書きした小石岱 花瓶 (1・2)



中国製陶磁器 (1・6)



鐵 (1・2)・瓦 (1)・漆器 (1・3)

## 第2章 植松南遺跡発掘調査概要報告

## 例　　言

1. 本書は、八尾市永畠町2丁目2番地において実施した、建  
設工事に伴なう発掘調査の概要報告である。
1. 発掘調査は、昭和56年2月23日から3月10日にかけて実施した。
1. 発掘調査は、八尾市教育委員会文化財室が行ない、高木真光が現地を担当した。なお、調査にあたっては、野田雅彦・西村公助・(社)花田建設の協力があつた。
1. 本書作成にあたっては、上記担当者のほか野田雅彦・中野慶太(遺物実測)、成海佳子・中谷聖子(トレース)があたり、執筆はI・II・III・IV・VIが高木真光、V・VIIは成海佳子が担当した。

## 本　文　目　次

I	調査の目的と経過	41
II	調査の概要	42
III	層序	42
IV	検出遺構	43
V	出土遺物	47
VI	まとめ	51
VII	遺物観察表	58

## 挿図目次

図1	調査地周辺図	41
図2	グリッド設定図	42
図3	各ピット出土遺物実測図	43
図4	Aグリッド平断面図・Bグリッド断面図	45
図5	Cグリッド平断面図	46
図6	出土遺物実測図	49
図7	瓦実測図	50
図8	土錐実測図	51

## 図版目次

図版1	Aグリッド 造構検出状況	図版3 SD2 出土遺物・土錐
	Aグリッド 碓集積検出状況	各ピット出土遺物
図版2	Aグリッド SD2 遺物出土状況	
	Cグリッド 造構検出状況	

## 第2章 植松南遺跡(永畠町2丁目)

### I 調査の目的と経過

植松南遺跡は八尾市中南部に位置する、古墳時代から鎌倉時代にかけての複合遺跡である。今回の調査地である永畠町2丁目は、この遺跡推定範囲の北方約100mに位置し、八尾市が指定した埋蔵文化財包蔵地に含まれている。このことから、この地域一帯の埋蔵文化財の有無を確認する目的で試掘調査を行なった結果、土師器等を含む包含層が認められたため、昭和56年2月23日から3月10日にかけて、発堀調査を実施するに至った。

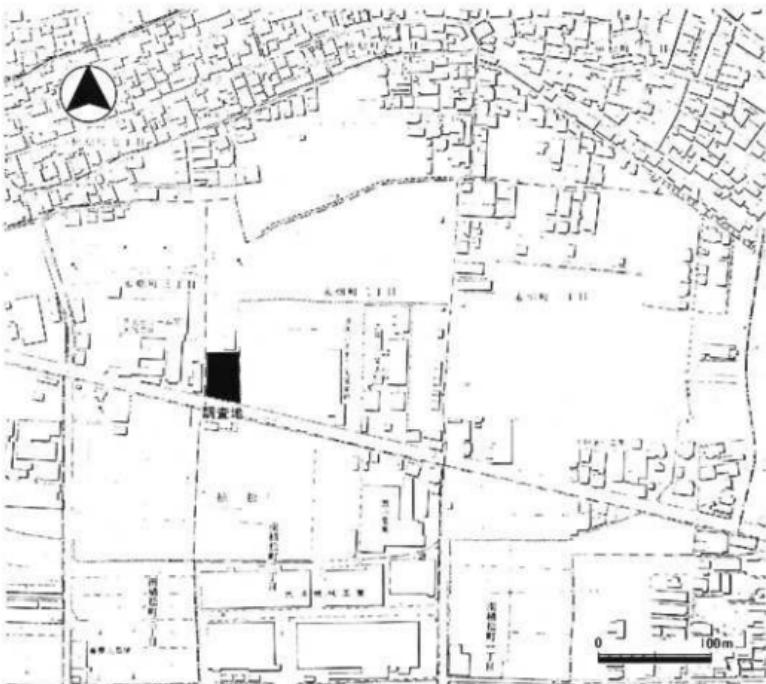


図1 調査地周辺図

遺跡は地形的には、旧大和川の支流の一つである長瀬川の自然堤防下を占地する。また、歴史的環境については、南東に老原遺跡(鎌倉時代)、南に木の本遺跡(弥生～古墳時代)、北東に龍華寺址(奈良～鎌倉時代)、北西に洪川廃寺(飛鳥時代)が近接する。  
① ②  
③ ④

## II 調査の概要

調査対象地に3ヶ所のグリッドを設定した。グリッドはAグリッド(7m×7m)・Bグリッド(6m×6m)・Cグリッド(5m×11m)と付称し、A～Cグリッドへ順次調査を行なった。調査総面積は140m<sup>2</sup>を測る。

## III 層序

Aグリッド東壁・Cグリッド西壁では、第1層盛土、第2層旧耕土、第3層暗褐色粘質土、第4層褐灰色粘質土I、第5層褐灰色粘質土II、第6層褐灰色粘質土III、第7層暗灰色粘質土(遺物包含層)、第8層淡灰色シルト(遺構ベース)が堆積し、これが調査地全体の基本層序と考えられる。一方、A・B両グリッドの南側では河川の氾濫のためか、若干の相違が観察された。

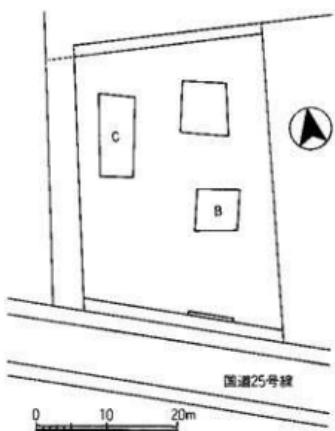


図2 グリッド設定図

Aグリッド南壁の東側は基本的な堆積であるが、西側では第5層・第6層および第7層の上面は、河川の氾濫により削平を受けている。その後は、ほぼ6層に分類できる土層が水平に堆積していることから、河川は機能を停止したものと考えられる。

Bグリッドの南壁も、第4層までは基本層序とはほぼ同様であるが、以下の土層はより複雑な堆積状況を示している。またここでは、遺物包含層である第7層暗灰色粘質土や、遺構のベースである第8層淡灰色シルトが認められなかつたことから、これらは河川の氾濫によって削平を受けたものであろうと推定される。

Cグリッドの南壁では、A・B両グリッド南壁で認められた河川の氾濫によると考えられる堆積の変化はみられなかった。

#### IV 検出遺構

Aグリッドで掘立柱建物・ピット・穀糞積・溝・落ち込み、Cグリッドで溝・ピットを検出した。これらの遺構は第8層淡灰色シルトをベースにし、上層には厚さ約30cmの遺物包含層が被覆する。

両グリッドで検出した溝は東西方向のもの12条、南北方向のもの9条で相互に切り合うが、その前後関係については明確にできなかった。溝はその延びる方向によって、東西方向のものをS D a～S D Iとし、南北方向のものをS D 1～S D 9とした。

##### 1) Aグリッド

###### 掘立柱建物(S P 1～S P 5)

グリッド内および西壁で5個の柱穴を検出した。検出部の建物規模は東西2間(4m)、南北1間(1.3m)を測る。柱穴の掘形は径35～55cm・深さ30～40cmを測り、柱の径は18cm程度であろう。

S P 4から黒色土器碗(1・2)、須恵器の高台(3)、土師器碗(4・5)等の平安時代の遺物が出土した。

###### ピット(S P 6～S P 8)

掘立柱建物を構成する柱穴の他、3個のピットを検出した。S P 6・S P 7は径30cm前後の小型のもので、S P 2・S P 4の中間に並んでいる。S P 8はグリッドの北壁ぎわで検出したもので、径約40cmを測る。

S P 6からは土師器碗(6)・皿(8)、S P 7からは土師器碗(7)が出土した。

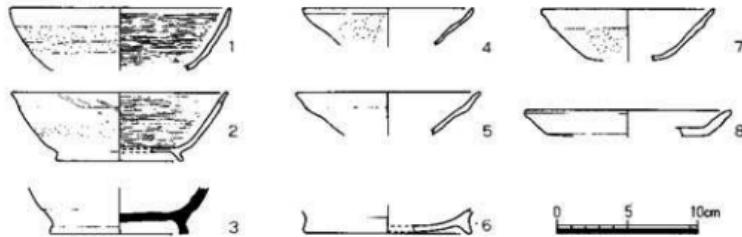


図3 各ピット出土遺物実測図

### 礫集積

グリッド北東隅で、東西約1m・南北約0.8mの範囲で、礫の集積する部分を検出した。礫は径約2~10cm程度のもので、当初は全体的に集積していたものと考えられるが、東壁ぎわを除いては、まばらに認められる程度である。礫に混ざった状態で、平瓦(図7-1)や土師器瓶(27)等の小片が少量出土した。

### 溝

東西方向のもの4条(SD a~SD d)、南北方向のもの3条(SD 1~SD 3)、あわせて7条の溝を検出した。

SD aはグリッドの北西隅でわずかに検出したのみで、詳細は不明である。SD b・SD c・SD dは幅30~60cm・深さ10~15cmを測り、グリッド中央部を平行に延びる溝である。遺物はSD b・SD dから土師器瓶(13・19)、平瓦(図4-2)等の縦片が出土した。

SD 1は幅60~120cm・深さ20cmを測り、両側では2段の掘形をもつ。SD 2は幅40~80cm・深さ15cmを測り、内部より土師器瓶(15)、同甕(30)等が出土している。ともに平行して、SD b~SD dと切り合う。SD 3はグリッド西側で肩を検出したのみである。

### 落ち込み

グリッド東側約1.5mの範囲に落ち込み状の造構が認められた。グリッド北東隅で深くなり、調査区外へ至っている。内部から土師器瓶(11・20)が出土した。

## 2) Cグリッド

### ピット(SP 9・SP 10)

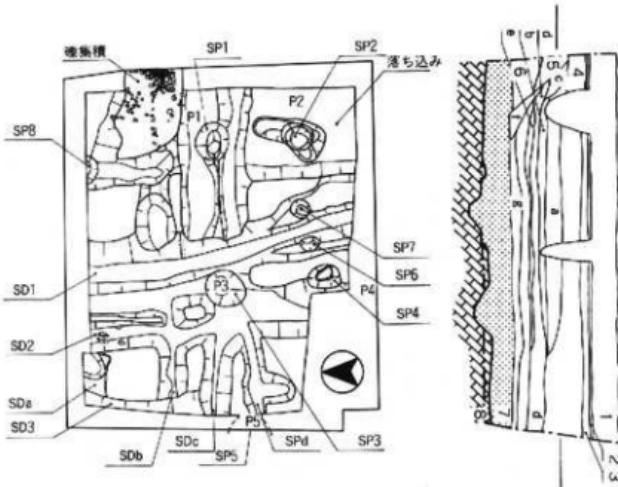
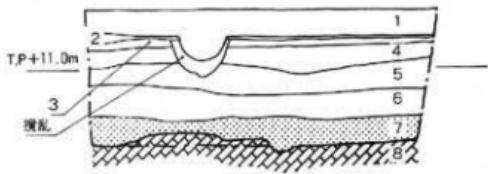
ともにグリッドの両側で検出し、約1mの間隔で位置する。径30~35cm・深さ20cmを測り、SP 10の底部には根石が認められたため、獨立柱建物の柱穴の可能性が考えられる。

### 溝

東西方向のもの8条(SD e~SD l)、南北方向のもの6条(SD 4~SD 9)、あわせて14条の溝を検出した。

SD e~SD lは幅30~60cm・深さ10cmを測る。SD e~SD iとSD j~SD lがまとまりをもって平行している。

SD 4・SD 5・SD 6・SD 8は幅30~80cm・深さ15~20cmを測るが、SD 7・SD 9はともにグリッドの西壁近くで東肩を認めたのみである。SD 4からは土師器瓶(10)が出土した他、少量の土師器片を認めた。



1. 砂 土	a. 淡褐色シルト	i. 灰青色粘質シルト	q. 灰青色粘土
2. 耕 土	b. 淡褐色粘質土 I	j. 純灰色粘質シルト	r. 純灰色シルト
3. 暗褐色粘質土	c. 淡褐色粘質土 II	k. 灰青褐色粘土	s. 棕灰色粘土
4. 暗灰色粘質土 I	d. 淡灰褐色粘土	l. 茶褐色粘質シルト	t. 灰青色粘質シルト
5. //	e. 棕色砂	m. 棕色粘質シルト	u. 青灰色粘土
6. //	f. 灰色粘土	n. 深色粘土	v. 灰色粘質シルト
7. 暗灰色粘質土 III	g. 灰色粘質土	o. 灰褐色粘土	w. 灰青色粘土
8. 淡灰色シルト	h. 灰褐色粘質土	p. 嘉陵江色粘質シルト	

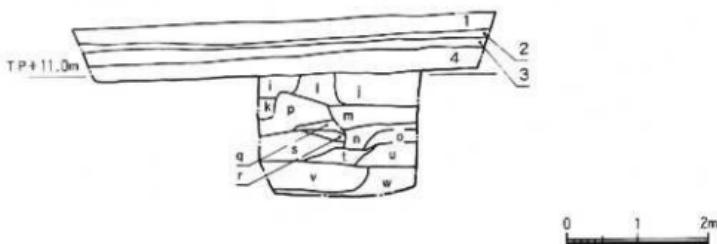


図4 A グリッド平衡面図・B グリッド断面図

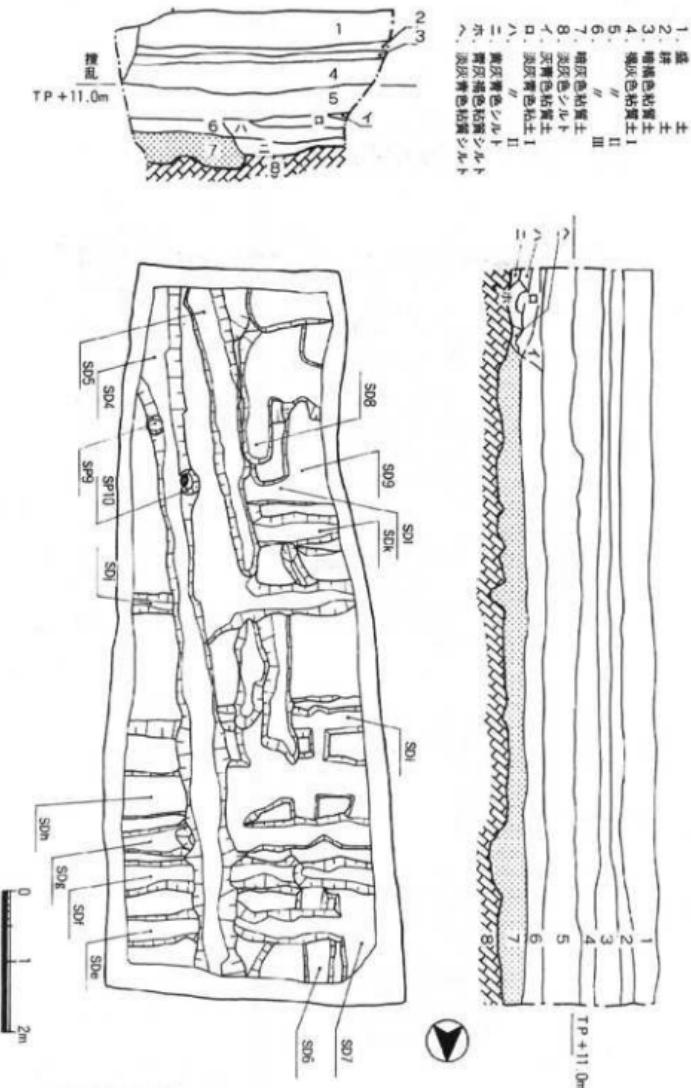


図5 Cグリッド平面図

A・C両グリッドで検出した溝のうち、AグリッドのSDa～SDdとCグリッドのSDe～SDfは、位置的にみて同一の溝の可能性が考えられる。また、南北方向に延びるAグリッドSD1、CグリッドSD4・SD5は比較的規模が大きいため、他の溝とは別な機能を果たしていたものと考えられる。

## V 出土遺物

土師器椀・皿・碟、黒色土器椀・皿、瓦、土鉢等がコンテナに1箱出土したが、ほとんどが細片で良好な資料ではない。ここでは遺物の概観を述べ、個々の特徴や出土位置等は、巻末の観察表に記す。

### 1) 土師器

#### 椀(4～7・9～22)

図上で完形品近くにまで復元し得たものが3点のみで、他は口縁部や高台付近のみの小破片である。

体部の形態は、丸いカーブで口縁部まで連続して伸びるのは(9)1点のみで、他はすべて体部と口縁部の境に棱を持つ。それらはさらに体部に若干丸みをもつもの(10・11)と、直線的な体部をもつ(4・5・7・12～16)の2種類に分かれる。

口縁部をみると(4・9～12)は丸く、あるいはつまみ上げぎみに終わるが、体部と口縁部の境に棱をもつものはほとんどは強いヨコナデによって外反する口縁部を作り出している。なかでも(15・16)はともに口径約20cmを測る大型のもので、体部と口縁部の境の棱は鋭く、口縁部は外反ぎみに直立している。とくに(16)は深い体部をもち、「鉢」と呼ぶべき器形であろう。

調整はほとんどが指頭圧成形の後体部にナデ、口縁部にはヨコナデが行なわれ、粘土継接合痕や指頭圧痕の明瞭なものが多く、全体的に粗雑なつくりである。

高台のみの資料は7点を示したが、形態・大きさともにバラエティーに富む。(6)は口径11.7cm・高台高1.1cmを測る大型の椀の高台で、大きさに比して器内は薄い。(17)は粗雑な作りで、端部には押しつけられたようにみ出す部分もあり、不揃いに終わっている。(18・19)は器内も厚くしっかりした作りで、重厚な高台が垂直に貼り付けられている。(20)は薄手のもので、精良な粘土を用い、丁寧な作りである。(21・22)は1cm以上の高い高台をもち、外反して「ハ」の字形に長く伸びる。

### 甕(25~32)

口径から、10cm前後の小型甕(25・26)と、15~20cm程度のもの(27・32)に分かれる。

2点の小型甕は肩曲部の棱が鋭く、体部の張りは少ないようである。口縁部は(25)が内弯ぎみで短かいが、(26)は外反している。

他の甕のうち肩曲部の棱が鋭いものは(29)のみである。(27・28)の口縁端部は外傾する平坦面を有し、体部は直線的に強く張り、(27)の器肉は厚めである。(29)も直線的な体部をもつが張りは少ない。(30・31)は丸みをもって大きく開く体部をもち、口縁端部は水平に近い面を有して外へつまみ出すような形になる。外面体部には指頭圧痕を顕著に残す。(32)は口径21.7cmを測り、大型で厚手の甕である。口縁端部は内に巻き込むように肥厚しており、他の甕とは様相が異なっている。

### 皿(8・33・34)

口径約15cm、器高2cm前後と比較的大きさが揃っている。3点とも半たい底部から肩曲して口縁部に至る。(33・34)の底部には指頭圧痕が顕著にみられ、強いヨコナデによって体部との境に棱を作り凹みのある口縁部となるが、(8)には棱が認められず、口縁端部のみがヨコナデによって外反ぎみとなる程度である。器肉は(8)が厚く、(33・34)は薄い。

### 小型高杯(35)

柄部に指頭圧痕の凹凸を残したままの粗雑な作りである。杯部を欠損し、口径6.2cm・残存高4.2cmを測る。

### 羽釜(36)

復元口径30cm前後を測る。鉢は若干下がりぎみに伸び、下面に煤が厚く付着するが、細片のために詳細は不明である。

## 2) 黒色土器

### 椀(1・2・24)

すべて内黒のAタイプである。高台が残存するものは(2)のみである。(1・2)は獨立柱建築物を構成する柱穴から、(24)はAグリッド包含層からの出土である。

(1)はやや直線的な体部から外へつまむ口縁部に至り、(2)はゆるやかなカーブで口縁部まで連続して伸びる点など形態に若干の差はあるものの、体部の傾きや体部内面に単位幅の細いヘラミカキを密に施し、口縁部内面に沈線を持つところなどは近似している。

それに対して(24)の形態は、体部が直線的に大きく開き、ヨコナデによる棱を作った後外反

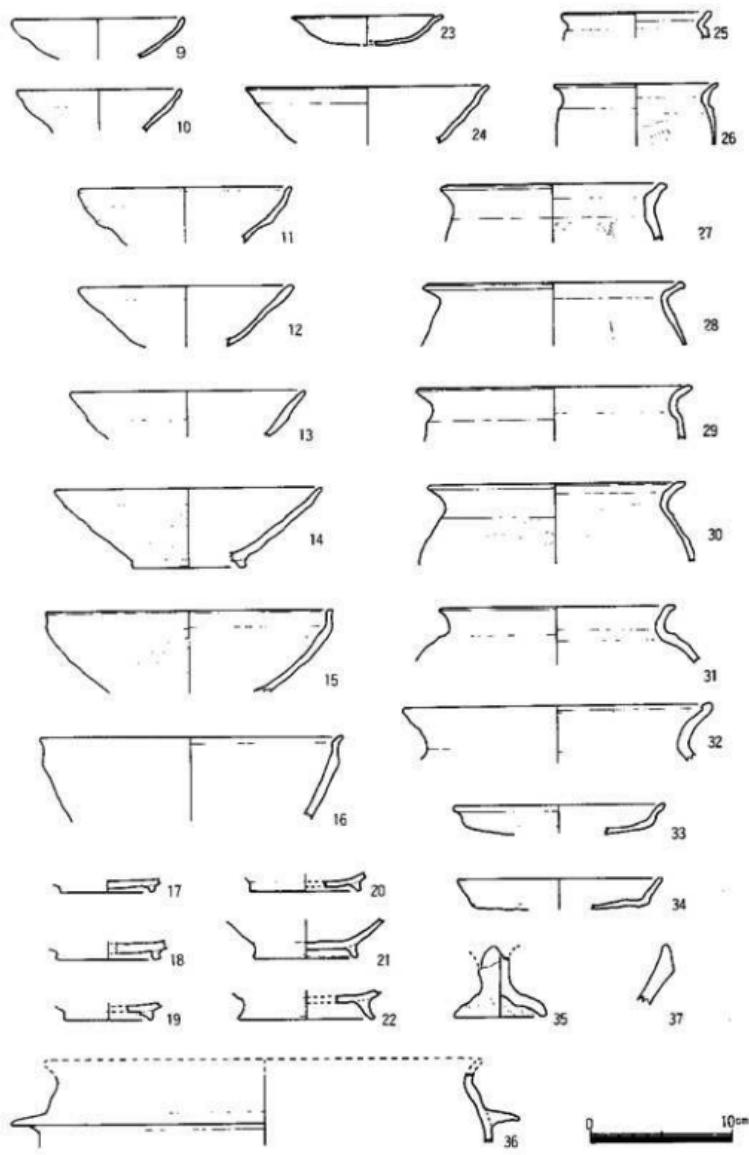


图6 出土遗物实测图

する口縁部に至り、口縁端部は外傾する面を作り出している。また調整をみると、体部内面のヘラミガキや、口縁部内面の沈線は行なわれていない。

このような形態・調整上の特徴の差から、(24)は(1・2)より新しい時期に比定できるものと考えられる。

#### 小皿 (23)

両黒のBタイプである。口径10.4cmを測り外反する口縁部をもつが、器表が著しく磨耗しており、調整は不明である。

### 3) 須恵器

#### 壺(3)

高台付近のみの資料である。急角度で立ち上がる体部をわずかに残しているため、肩部まで直線的にのびる壺の底部であろうと考えられる。

#### 4) 瓦質土器

##### こね鉢(37)

口縁部で厚みを増し、端部は断面三角形を呈する。小破片のため口径や傾きは不明であるが、体部外面にヘラケズリの痕跡がわずかに認められる。

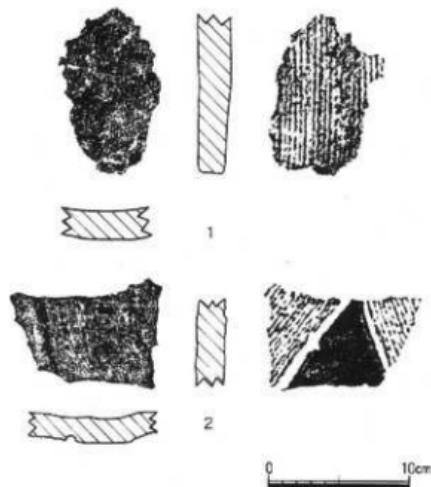


図7 瓦実測図

#### 5) その他の遺物

##### 瓦(1・2)

図示し得たものは平瓦2点のみであるが、他に細片が礫集積からも若干出土している。

(1)は四面に布目を残し、凸面にはタタキを施す。灰白色を呈し、2~5mmの長石や石英をきわめて大量に含む。焼成は甘く軟質で磨耗が進

む。稲葉積からの出土である。

(2)は四面に布目を残し、凸面は沈線によって斜方に向の区画をし、その外側にタタキ、中央にはナデを施す。青灰色を呈し、小砂粒を含む。焼成は良好堅緻である。S D b 出土。

#### 土鍾(3・4)

小型の土鍾が完形で2点出土した。

(3)はAグリッド包含層出土のもので、長さ4.6cm・径1.5cmを測る。(4)はCグリッド包含層から出土したもので、長さ5.0cm・径1.7cmを測る。ともに径0.3cm前後の紐孔をもち、縦ずれの痕跡を顕著に残す。2点とも灰褐色～淡赤褐色の色調を呈し、胎土には2mm以下の長石・石英粒を多く含んでいる。

#### VI まとめ

今回の調査では平安時代前期の掘立柱建物・溝群等の遺構や、土師器椀・甕等の遺物を検出した。溝は時期的な前後関係が明らかでないものの、ほぼ東西方向に延びるものと南北方向に延びるもののが交差する状態で検出した。また、掘立柱建物を構成する柱穴のいくつかは、落ち込みや溝の中から検出したもので、落ち込みおよび溝と掘立柱建物との間に時期差が考えられる。しかし、各遺構の時期については、遺物から見てもほとんど差を見い出せず、短期間のうちに遺構が順次形成され、廃絶していくものと考えられる。

また、多数検出した溝は東西・南北方向に延びていることから、条里に規制された遺構としての可能性が強く、おそらく農耕に関する機能を果たしたものと推定される。大阪市長原遺跡の調査例では約30本の南北方向の小溝を検出しておらず、当遺構と時期的にも近似している。長原遺跡では生産区と居住区の土地利用が条里によって規制を受けながらなされており、近接する当遺跡においても同様の土地利用形態を示すものかと考えられる。<sup>⑦</sup>

出土遺物については各遺構および土層より出土し、時期は平安時代前期に限定される。これらの遺物によって遺構の時期を推定する手かりを得たといえるが、良好な資料が少なく、磨耗を受けた小片が多くを占めている。

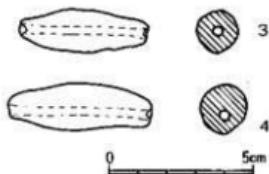


図8 土鐘実測図

〔注 記〕

- 1 本誌所収 第7章
- 2 本誌所収 第3章
- 3 八尾市役所『八尾市史』1958年
- 4 前掲書③
- 5 田中琢「古代中世における手工業の発達(窯業)一畿内」『日本の考古学VI』河出書房新社  
1976年
- 6 ⑤前掲書
- 7 (財)大阪市文化財協会『大阪市立第8養護学校建設に伴なう長原遺跡発掘調査の現地説明  
会』1982年

## VII 出土遺物観察表

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・構造
1	土師器碗 Aグリッド 底立柱建物 SP 4	口 径 12.0	直線的に伸び、内窓が立ち上かる口縁部に至る。口縁端部は上方に丸く終わる。	外面 手彫圧成形の後体部のみコナデ。 内面 不明。	色調 乳白色 胎土 良 焼成 1mm前後の長石・石英を多く含む。 器表の磨耗が著しい。
2	土師器碗 Aグリッド 底立柱建物 SP 4	口 径 13.1	直線的に伸び、口縁部との境に棱を作った後外反する。口縁端部は丸く終わる。	外面 手彫圧成形の後体部ナデ。口縁部ココナデ 内面	色調 乳白色 胎土 良好 焼成 良。角閃石・長石を細粒で含む。
3	土師器碗 Aグリッド SP 7	口 径 12.2	比較的平緩な底部からゆるやかに内折して伸びる口縁部に平ら。口縁部とその境に棱を作って外反する。口縁端部は僅く尖りぎみに終わる。	外面 手彫圧成形の後体部ナデ。口縁部ココナデ 内面	色調 乳白色 胎土 良 焼成 良好
4	土師器皿 Aグリッド SP 6	口 径 14.5	平坦な底部からゆるやかに外折して伸びる口縁部に平ら。口縁端部は外反へつまみぎみに終わる。	外面 口縁部ココナデ。他は不明。 内面	色調 乳白色(外面) 淡赤褐色(内面) 胎土 良 焼成 0.5mm前後の長石・石英等を含む。 良好
5	土師器碗 Aグリッド SP 6	高台径 11.7 高台高 1.1	深く窪む底部から「ハ」の字形に開く高台で、縁部は丸く終わる。	外面 不明。 内面	色調 乳白色 胎土 1mm前後の長石・石英等を多く含む。 焼成 良 器表に磨耗が著しい。
6	单足器皿 Aグリッド 底立柱建物 SP 4	高台径 9.7 高台高 1.0	平たい底部から急角度で立ち上がり、底部に窪む。高台は「ハ」の字形に開き、端部は水平な凹面を作る。	外面 回転ナデ。底部と高台の境にはヘラケズリの後縁が認められる。底部は静止ナデ。 内面 回転ナデ。底部は不定方向の静止ナデ。	色調 淡灰色 胎土 良 焼成 外面部に煤付着か 無
7	黑色土器碗 Aグリッド 底立柱建物 SP 4	口 径 15.2 高台径 8.9 高台高 0.7 脚 高 4.8	平坦な底部から弯曲して窪いた後、直線的に伸びる。口縁部は先細となり、縁部は外側へつまみぎみに終わる。高台は「ハ」の字形に外反して開き、端部は外側へ丸く終わる。	外面 手彫圧成形の後体部ナデ。口縁部ココナデ。高台の縁合は押打ナデによる。上半に部分的にヘラミガキが見られる。 内面 手彫圧成形の後体部横方向に単位輪の無い(約2mm)密なペラミガキ。口縁部に沈線、見込み部には「ハ」による痕跡が見られる。	色調 淡赤褐色(外面) 黒褐色(内面・外側口縁部) 胎土 1mm前後の長石・石英を含む。 焼成 良 器表の磨耗が著しい。
8	黑色土器碗 Aグリッド 底立柱建物 SP 4	口 径 16.5	ゆるやかなカーブを描いて開き、口縁部に至る。口縁部は尖りぎみに丸く終わる。	外面 手彫圧成形の後体部ナデ。口縁部ココナデ。 内面 手彫圧成形の後横方向に単位輪の無い(約2mm)密なペラミガキ。口縁部に沈線が見られる。	色調 淡赤褐色(外面) 黒褐色(内面・外側口縁部) 胎土 良 焼成 石英・角閃石・雲母を細粒で含む。 器表に煤付着か 無

番号	器種 出上位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調、胎土、焼成、備考
9	土師器瓶 Aグリッド 追構面	口 径 12.0	ゆるやかなカーブを描いて伸びた後、内窓込みに立ち上がる口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。	外面 指圧成形の後体部ナデ、II 縫合ヨコナデ。 内面	色調 淡赤褐色 胎土 黒母の細粒を多く含む。 焼成 良好。
10	土師器瓶 Cグリッド SD 4	口 径 11.6	直線的に伸びた後内寄し、口縁部に至る。口縁端部はつまみ上げぎみに丸く終わる。	外面 指圧成形の後体部ナデ、II 縫合ヨコナデ。 内面	色調 淡褐色 胎土 黑母、径3mmの花崗岩、0.1~1mmの長石含む。 焼成 良好。
11	土師器瓶 Aグリッド 落ち込み	口 径 14.8	直線的に伸び、口縁部との境に棱を引いた後内寄して立つ。口縁端部はわずかに外へつまんで終る。	外面 指圧成形の後口縁部ヨコナデ。 内面	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好。
12	土師器瓶 Aグリッド SD 2	口 径 15.0	底部から弧曲して開いた後まっすぐ伸び、先丸となって丸く終わる縁部に至る。	外面 指圧成形の後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。 内面	色調 淡褐色(外側) 淡赤褐色(内面) 胎土 良好。 焼成 良好。 口縁部内外面に焼付着。
13	土師器瓶 Cグリッド SD 6	口 径 16.5	体部との境に棱を持ち、外反する口縁部。口縁端部は先細となり丸く終わる。	外面 指圧成形の後体部ナデ、II 縫合ヨコナデ。 内面	色調 淡褐色 胎土 1mm前後の長石を多く含む。 焼成 良好。
14	土師器瓶 Aグリッド 包含層	口 径 18.8 高さ径 1.8 高さ高 0.6 基面 5.6	底部から直線的に伸び、口縁部との境にゆるい棱を作った後外反する。口縁端部は丸く終わる。窓内の断面は底面部で空虚に下る。	外面 指圧成形、ヘラケズリの後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。 窓内の接合はヒビナデによる。 内面	色調 淡褐色 胎土 石英をわずかに含む。 焼成 良好。 内面口縁端部以下約3mmのところまで窓が厚く付着する。
15	土師器瓶 SD 2	口 径 20.2	ゆるやかなカーブを描いて伸び、口縁部との境に棱を作って直立する。口縁端部は水平な四面となる。	外面 指圧成形、ヘラケズリの後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。 内面	色調 淡赤褐色(外面) 淡褐色(内面) 胎土 0.5~2mmの花崗岩、2mm前後の長石、角閃石、雲母含む。 焼成 良好。 外表面全体に焼付着。
16	土師器瓶 Aグリッド 包含層	口 径 20.2	急角度で直線的に伸び、口縁部との境に棱を作って直立する。口縁端部は外反して丸く終わる。	外面 口縁部のヨコナデ以外不明瞭。体部には粘土の接合痕が見られる。 内面 体部ナデ、II 縫合ヨコナデ。	色調 淡赤褐色(外面) 淡褐色(内面) 胎土 良好。 焼成 良好。 外表面の崩れが多い。

番号	器種 出土状況	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
17	土師器柄 Aグリッド 包含層	高台径 高台高 6.5 0.4	高台は直面に貼り付けられ、断面はU字形。端部は丸く折れり不揃いである。体部の厚壁は厚い。	外側 高台の接合はユビナデによる 内側	色調 淡黄色 胎土 良 焼成 良 表面磨耗する。
18	土師器柄 Cグリッド 包含層	高台径 高台高 7.2 0.7	高台は直面に貼り付けられ、断面は直角形。端部は水平な平面を成すが不揃いである。体部の厚壁は厚い。	外側 高台の接合はユビナデによる 内側 ナデか	色調 暗茶褐色(外側) 淡黄色(内側) 胎土 良 焼成 良好
19	土師器柄 Aグリッド S.d	高台径 高台高 6.6 0.6	直面に貼り付けられ、断面三角形を呈する高台。端部は外へわずかにつまむ。	外側 ナデ。高台の接合はユビナデによる。高台内側には接合痕が明瞭に見られる。 内側	色調 暗茶褐色 胎土 良 焼成 良好
20	土師器柄 Aグリッド 落ち込み	高台径 高台高 8.7 0.7	わずかに窪む底部から、「ハ」の字形に開く断面直角形の高台。端部は外傾する扱い半圓頂となる。	外側 ナデ。高台の接合はユビナデによる。高台内側には接合痕が明瞭に見られる。 内側	色調 淡褐色 胎土 稼良 焼成 良好
21	土師器柄 Cグリッド 包含層	高台径 高台高 7.3 1.0	平坦な底面から弧曲して伸びる体部。高台は直面に下った後外反し、端部は外側へ突き出る。	外側 ナデ。高台の接合はユビナデによる。 内側	色調 淡茶褐色 胎土 良好、角閃石を細粒で含む。 焼成 良好 高台 体部の一部に焦がわざかに付着する。
22	土師器柄 Aグリッド 包含層	高台径 高台高 9.4 1.2	平坦な底面から直面に下った後、外反して伸びる高台。端部は外側へ丸くつまんで終わる。	外側 ナデ。高台の接合はユビナデによる。 内側	色調 黄褐色 胎土 稼良、角閃石を細粒で含む。 焼成 良
23	黑色土器柄 Aグリッド 包含層	口径 10.4	比較的平たい底盤からややかなアーブを描いて伸びた後、外反する口縁部に至る。口縁部は丸く終わる。	外側 不明。 内側	色調 黑灰色 胎土 0.5~2mmの石英を多く含む。 焼成 良 器表の滑耗が進む。
24	黑色土器柄 Aグリッド 包含層	口径 17.0	底盤を欠損するが、一旦聞いた後底盤的に伸び、口縁部との間にゆるい接を作った後外反する。口縁部は外傾する扱い頭を成す。	外側 底盤直彫形の接合部ナデ、口縁部ヨコナナ。 内側	色調 墓褐色(外側) 黑灰色(内側) 胎土 1~2mmの長石・石英等含む。 焼成 良

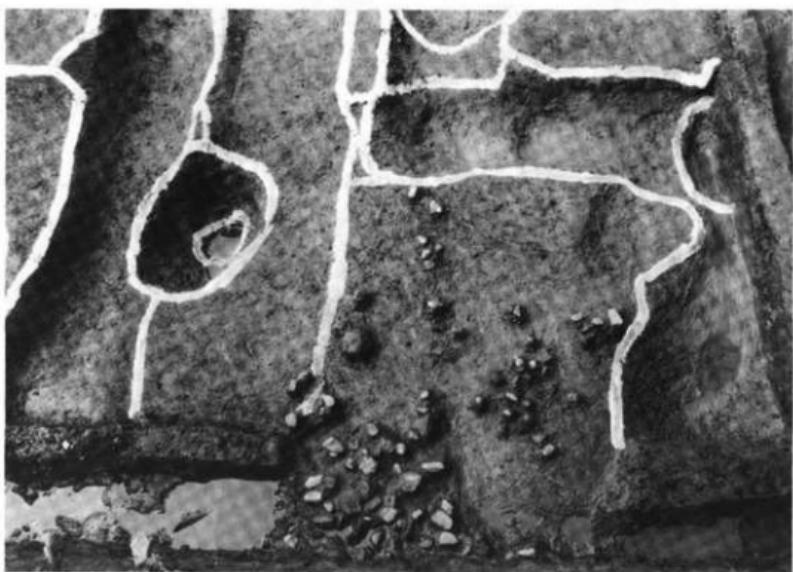
番号	器種 出土位置	法尺(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粘土・焼成・備考
25	土師器底 Aグリッド 包含層	口 伝 10.0	彫りの少ない体部から口縁部との境に深い棱を作り、内窓ぎみに伸びる。口縁端部は外側する面を成す。	外側 口縁部のヨコナギ以外不明。 内面	色調 淡赤褐色 粘土 良、1mm以下の長石、石英を含む。 焼成 真 器表の擦耗が進む。
26	土師器底 Aグリッド 包含層	口 伝 11.7	彫りの少ない体部から口縁部との境に棱を作った後丸く屈曲して伸びる。口縁端部は水平な面を成し、外側へつまんで終わる。器壁は極めて薄い。	外側 口縁部ヨコナギ。体部には指印压痕が見られる。 内面 口縁部ヨコナギ。底部ナデ。	色調 淡黄褐色(外面) 粘土 赤褐色(内面) 粘土 1~2mmの長石、長石、石英を含む。 焼成 真 外側の器表擦耗する。内側の一部に擦付有。
27	土師器底 Aグリッド 包含層	口 伝 15.2	彫りの少ない体部から「く」の字ちかくに屈曲する口縁部。口縁端部は外側する面を成し、下方にわずかに肥厚して終わる。器型は厚めである。	外側 口縁部、底部ヨコナギ。体部には指印压痕が見られる。 内面 口縁部ヨコナギ。体部横方向ハケ。口縁部、底部はヨコナギにより凹凸となる。	色調 晴赤褐色 粘土 1~3mmの花崗岩、長石、石英多く含む。 焼成 良好。
28	土師器底 Cグリッド 包含層	口 伝 18.0	彫りの少ない体部から「く」の字ちかくに屈曲して外反する口縁部。口縁端部は外側する面を成す。器壁は薄い。	外側 口縁部ヨコナギ。体部に指印压痕が見られる。 内面 口縁部ヨコナギ。体部ヘラケズリの後ナデ。	色調 茶褐色 粘土 中褐色(中核) 粘土 1~3mmの長石、石英を含む。 焼成 真 表皮焼耗する。
29	土師器底 Aグリッド 包含層	口 伝 19.0	体部から伸びる棱をつくり、丸く外反する口縁部。口縁端部は薄く尖って終わる。器壁は薄い。	外側 口縁部のヨコナギ以外不明。 内面	色調 暗赤褐色 粘土 1~2mmの石英を多く含む。 焼成 真 口縁部内面上方に擦付有。
30	土師器底 Aグリッド SD 2	口 伝 18.6	内窓して聞く体部から丸く屈曲し、外反する口縁部。口縁端部は丸く終わる。	外側 口縁部ヨコナギ。体部に指印压痕が見られる。 内面 体部ヘラケズリ(左下→右上)の後ナデ。口縁部ヨコナギ。	色調 赤褐色 粘土 1mm前後の長石、石英多く含む。 焼成 真 器の付着がわずかに認められる。
31	土師器底 Cグリッド 包含層	口 伝 16.5	彫りの強い体部から丸く屈曲し、上方へ外反する口縁部。口縁端部は水平な面を成し、外側へつまんで終わる。	外側 指印に成形の後体部ナデ。口縁部ヨコナギ。 内面 口縁部ヨコナギ。体部ヘラケズリ。	色調 淡赤褐色(外面) 粘土 淡黄色(内面) 粘土 2mm前後の石英、1mm前後の長石を多く含む。 焼成 良
32	土師器底 Aグリッド 包含層	口 伝 21.7	体部から丸く屈曲する口縁部。口縁端部は水平な面を成し、内側に肥厚する。	外側 ヨコナギ。 内面	色調 赤褐色 粘土 2mm以下の長石、石英等多く含む。 焼成 真

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形勢の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
33	上脚器皿 Cグリッド 包含層	口 径 14.8	わ平かに深みを作る底部からゆるい 壁を作つて外反し、口縁部に至る。 口縁部は外側へわずかに肥厚し丸 く終わる。	外面 指圧成形の後体部ナゲ、口 縁部ヨコナギ。口縁部外面は 強いナギにより凹面を擧する。  内面	色調 赤褐色 胎土 黑、石英・長石を含む。 焼成 良好。
34	土脚器皿 Aグリッド 包含層	口 径 14.5	平たい体部から弧曲して一旦直かく 直立した後、斜めに開く口縁部。口 縁部は丸く終わる。	外面 指圧成形の後体部ナゲ、口 縁部ヨコナギ。底面部外面は 強いナギにより棱をもつ。  内面	色調 淡赤褐色 胎土 黑、石英・長石を含む。 焼成 良好。
35	土脚器 小型高杯 Aグリッド 包含層	底脚径 8.2	直立する中央の柱状部から弯曲して 開く脚部に軽く。端部は内寄して丸 く終わる。	外面 手づくねによって作られ、指 壓成形が明顯に見られる。  内面	色調 淡黄色～明褐色 胎土 3～4mmの石英を多量 に含む。 焼成 良好。
36	上脚羽脚器 Cグリッド 包含層		内寄して伸びる脚部近のみの破片。 わずかに屈曲する口縁基部を残す。 脚は先端となる。	外面 ナゲと思われる。  内面	色調 赤褐色 胎土 3～4mmの石英を多量 に含む。 焼成 良 脚下面に焼付着。
37	瓦質ごけ跡 Aグリッド 包含層		斜めに開く口縁部で、外側には棱を つくった傾底をする。口縁部は丸 く終わる。	外側 体部ヘラケズリ、口縁部ヨコ ナギ。  内面 ヨコナギ。	色調 黒灰色 胎土 銀灰色(中核) 石英・長石をわずかに 含む。 焼成 良

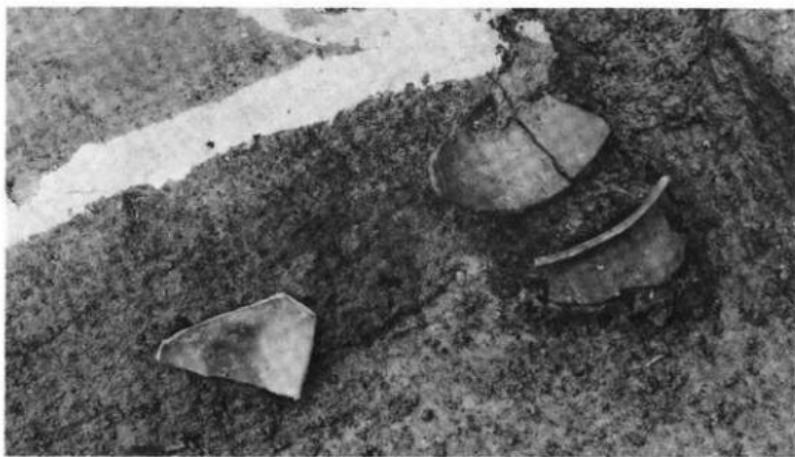




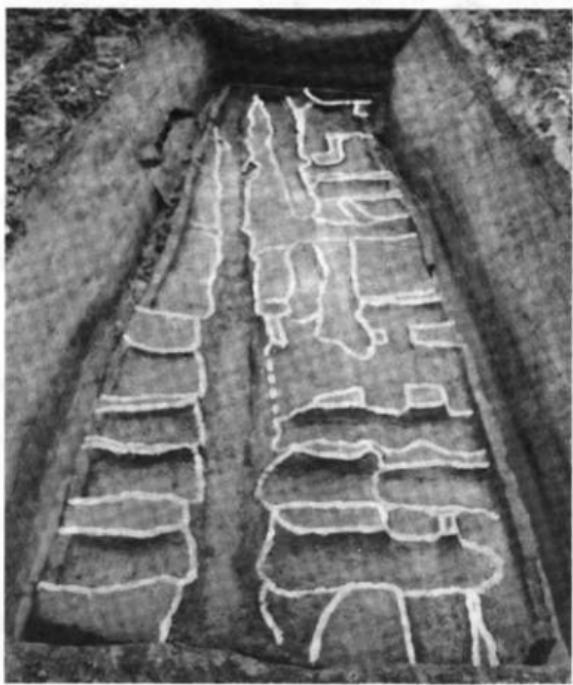
Aグリッド 造構検出状況



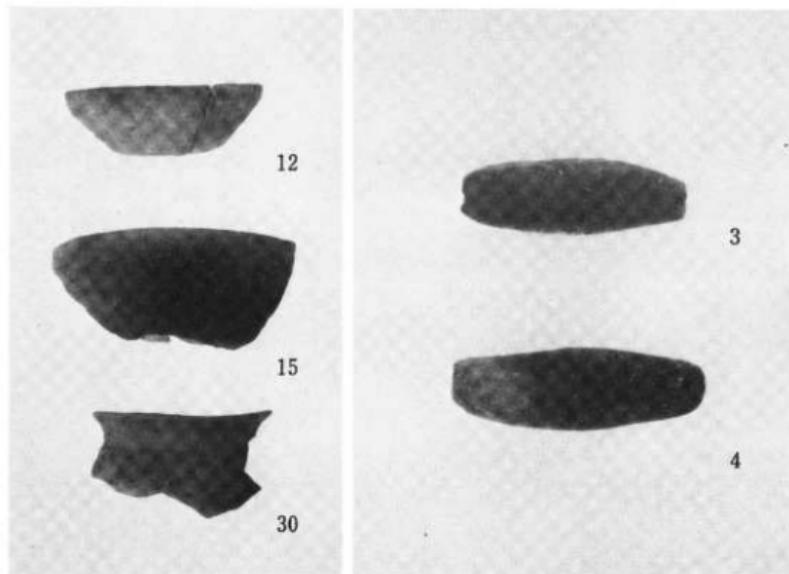
Aグリッド 碓集積検出状況



Aグリッド SD 2遺物出土状況

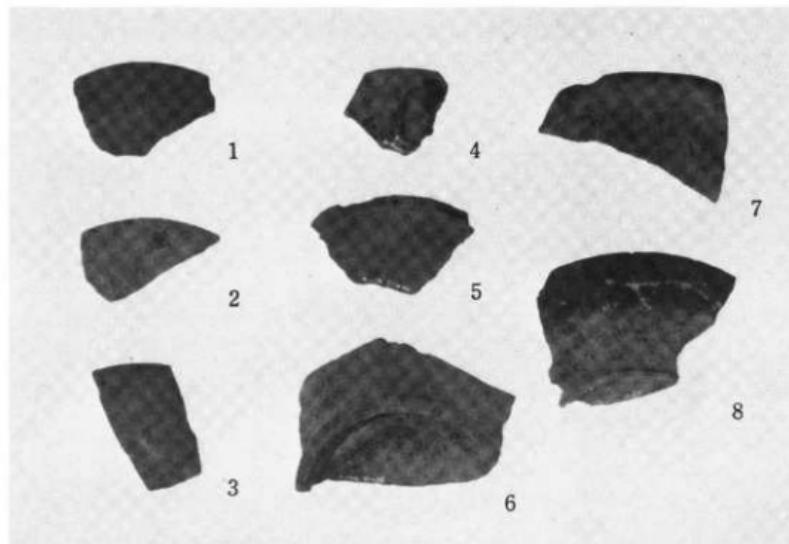


Cグリッド 遺構検出状況

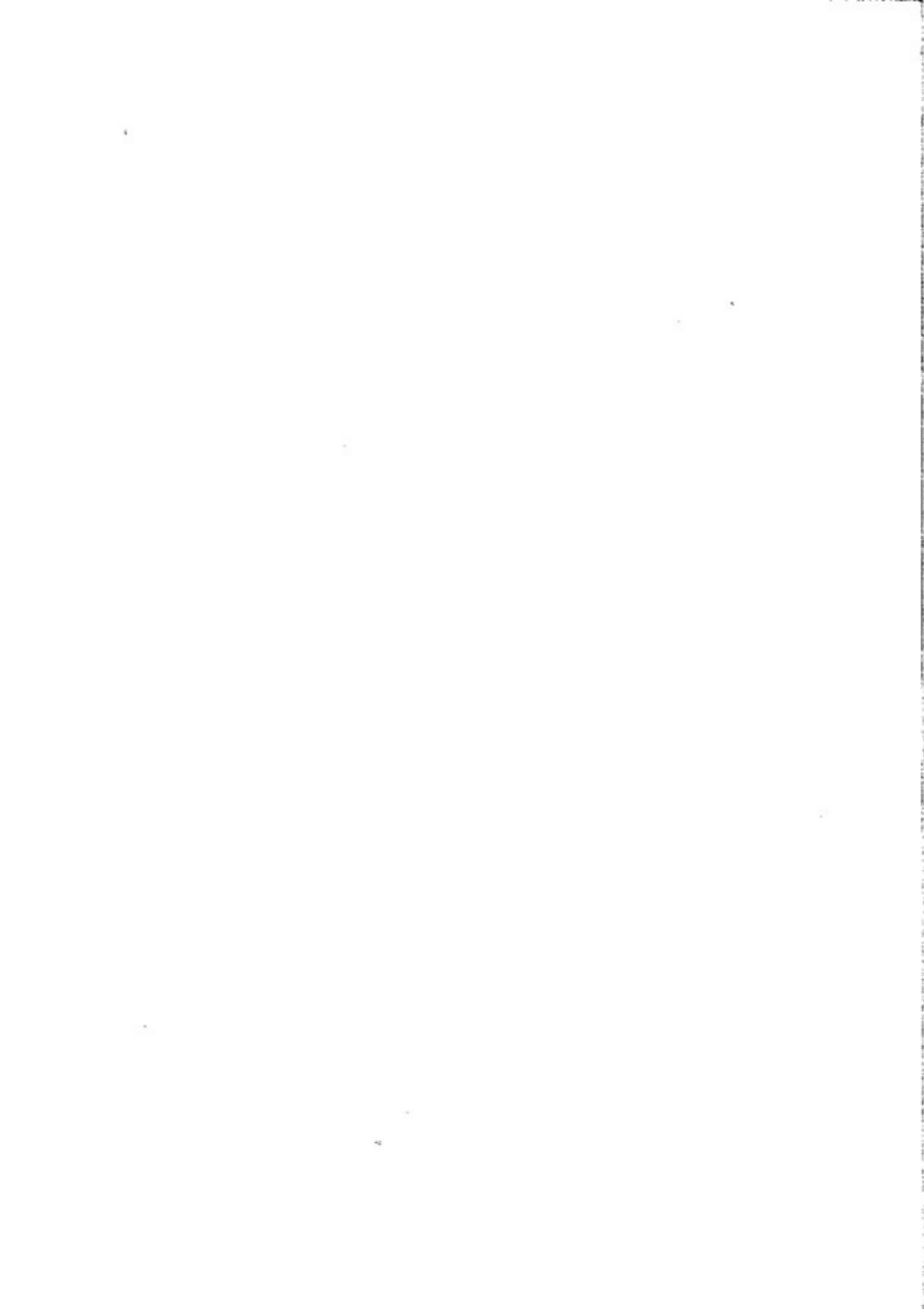


SD 2 出土遺物

土錐



各ピット出土遺物



### 第3章 木の本遺跡発掘調査概要報告

## 例　　言

1. 本書は、八尾市南木の本4丁目5~9番地において実施した、  
店舗建設工事に伴なう発掘調査の概要報告である。
1. 発掘調査は、昭和56年3月26日から4月11日にかけて実施した。
1. 発掘調査は、八尾市教育委員会文化財室が行ない、原田昌則が現地を担当した。なお、調査にあたっては、西村公助・野田雅彦・駒沢敦・林三雄・(有)花田建設の協力があった。
1. 本書作成にあたっては、上記担当者のほか成海佳子(遺物実測・トレース)が行なった。執筆は主に原田昌則があたり、IV(弥生式土器)・VIIについては成海佳子が担当した。なお、V(製塙土器の胎土観察)は、奥田尚(八尾市刑部小学校教諭)に執筆を依頼した。

## 本　文　目　次

I 調査の目的と経過 .....	65
II 層序 .....	67
III 検出遺構 .....	67
IV 出土遺物 .....	70
V 製塙土器の胎土観察 .....	88
VI まとめ .....	89
VII 出土遺物観察表 .....	91

## 挿 図 目 次

図1 調査地周辺図	65
図2 トレンチ設定図	66
図3 土層模式図	67
図4 平面図	68
図5 S E 1 平断面図	69
図6 S D 3・S E 2 出土上師器実測図	70
図7 壺文様模式図	71
図8 S D 2・S E 1 出土弥生式土器実測図	72
図9 包含層出土弥生式土器実測図	73
図10 土師器実測図1	75
図11 上師器実測図2	77
図12 須恵器実測図1	79
図13 須恵器実測図2	80
図14 ヘラ描き記号文拓影	81
図15 破石実測図	82
図16 製塙土器実測図	83

## 挿 表 目 次

表1 製塙土器の胎土觀察表	88
---------------	----

## 図 版 目 次

図版1 調査地全景	図版5 土師器
S P 6 柱根検出状況	
図版2 S K 1 検出状況	図版6 須恵器
S B 1・S D 3 検出状況	
図版3 弥生式土器	図版7 須恵器
図版4 上師器	図版8 製塙土器

## 第3章 木の本遺跡(南木の本4丁目5~9番地)

### I 調査の目的と経過

八尾市の南西部に位置する木の本地域一帯は、鉄道等の交通機関と遊離されている関係や、八尾飛行場によって南北に切断されているといった諸条件から、比較的開発の遅れた地域であった。しかし、昭和55年11月に地下鉄谷町線が八尾南駅まで延長されたことを境に、交通網が整備され、地域一帯は急速に開発のテンポを速めつつある。このような情勢下、地域の一画である南木の本4丁目5~9番地に、<sup>④</sup>出店計画が八尾市教育委員会文化財室に提出された。当教育委員会文化財室は、南木の本地區は遺跡としては未周知であるが、八尾南遺跡の北東に位置することや、計画予定地が式内社の樟本神社に近接することから、試掘調査の必要性があるものと判断した。

試掘調査は昭和56年3月9日から予定地内6ヶ所で実施した結果、GL-3.0m地点を中心<sup>①</sup>に弥生時代中期前半から古墳時代後期の遺物包含層が認められ、付近一帯が遺跡であることが確認された。当教育委員会文化財室はただちに文化庁へ遺跡発見届を提出するとともに、発掘



図1 調査地周辺図

調査が必要である旨をニチイ㈱へ伝え、「文化財保護法」に基づく適切な措置を講ずる必要性を明らかにした。その結果、基礎杭の構築が予定されている地点3ヶ所にA～Cの各トレンチを設定し、発掘調査を実施することが両者間で合意された。

調査は昭和56年3月26日よりオープンカットの方法で開始したが、調査が進行するにつれ、遺構ベースが軟質なシルト層で、しかも湧水層に一致することから、壁面の保持にも支障をきたすことが指摘された。そこで、急速壁面を補強するとともに、以後の調査方法についての協議が行なわれた。その結果、現状のまでの調査継続は危険であると考えられたため、大阪府教育委員会を含めた三者で以後の調査方法や工法の再検討についての協議が重ねられた。協議では、計画されている基礎杭が遺構面に達するため、設定したトレントすべてを調査したとしても、未調査部分の遺構が破壊されることが指摘された。そのため、改めて全域に鋼板を打って調査を継続するか、設計変更をして遺構を保存するかの2点を選択することが余儀なくされた。このことから当初計画された建物構造を変更し、基礎杭の深度もG.L. - 3.0m以内に抑え、遺構を保存する処置が三者間で合意された。

以上から北側に設定したAトレント(5m×50m)は東側40mを調査記録し、西側10mについては埋め戻して遺構の保存を行なった。

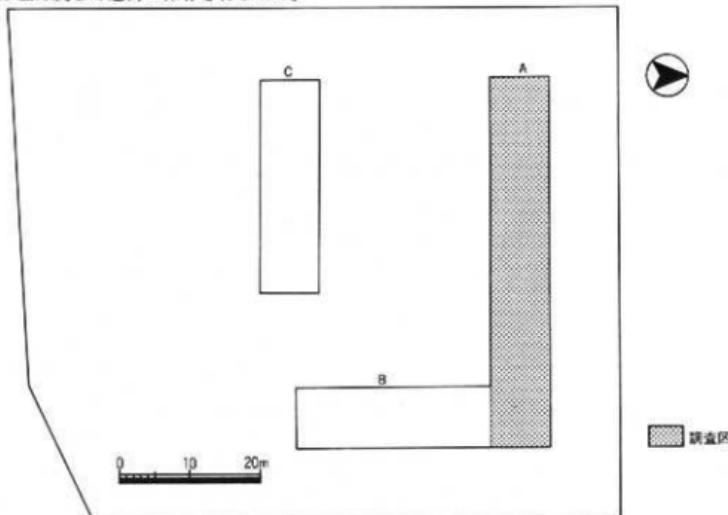


図2 トレント設定図

## II 層序

東西40m、南北5mの範囲内ではあるが、比較的安定した土層の状況を知ることができた。基本的には上層から第1層盛土(90~110cm)、第2層耕土(14~20cm)、第3層灰青色砂混じり粘質土(30~34cm)、第4層灰褐色粘土(42~52cm)、第5層灰色粘土(27~38cm)、第6層暗灰色粘土(40~60cm)、第7層灰青色シルトと続いている。遺物は第4層以下で確認している。

第4層からは土師質土器・瓦器等の中世遺物が細片で出土している。

第5層からは古墳時代後期に属する土師器・須恵器等が出土するが、すべて細片で量も少ない。

第6層は主な包含層で、弥生時代中期前半から古墳時代中期後半に至る遺物が混在して出土しているが、量的には古墳時代中期に属するものが大半を占めている。また、この層は植物遺体を多量に含むことから、古墳時代中期後半以後は全域が帶水し、漸移的な土層の堆積があったものと考えられる。

第7層は弥生時代中期前半と古墳時代中期後半の遺構面のベースになる土層で、少なくとも1m以上の堆積が認められる。

なお、第7層上面(遺構面)は現地表から約-3m地点で、OP+8m前後に位置している。

## III 検出遺構

検出した遺構は、弥生時代中期前半と古墳時代前期・中期に属する溝・井戸・土塁・掘立柱建物・柱穴群である。これら2時期にわたる遺構は同一面で検出している。しかし、上層の第6層には製塙土器を含む灰層が散在していることから、古墳時代中期の遺構はやや上層から切り込んでいたとも考えられるが、対応する土層は認められず、流出した可能性が推定される。

以下、検出遺構については、Aトレントの東側から西へ10mごとに設定したA-1区～A-5区の地区別に概観する。

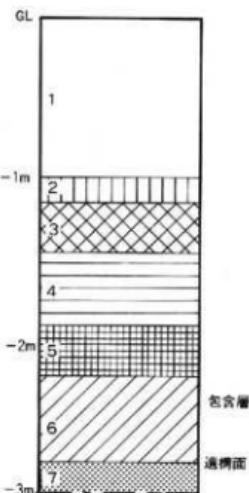


図3 土層模式図

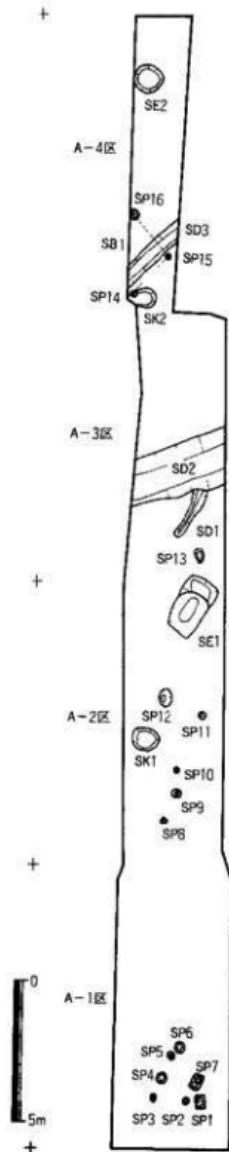


図4 平面図

### 1) A-1区

7個の柱穴群(S P 1～S P 7)を検出している。

#### S P 1～S P 7

A-1区の東側に位置する柱穴群である。S P 1は48×36cmの長方形で深さ31cmを測り、内部には長方形の柱根を残す。S P 2～S P 7は円形ないし梢円形を呈し、径26～30cm・深さ6～29cmを測る。

S P 1・S P 6に柱根が遺存することや、S P 3

の底部に基礎板が認められることから掘立柱建物の柱穴群であろうと推定されるが、北側への拡がりが確認できず、建物の方向や規模等は不明である。

柱穴中より土師器片が少量出土しており、いずれも古墳時代中期後半に比定できるものと考えられる。

### 2) A-2区

井戸(S E 1)、柱穴(S P 8～S P 12)、土塙(S K

1)を検出した。

#### S E 1

上面で152×114cmの長方形を呈し、深さ40～55cmを測り、北西部で土塙を切り込んでいる。内部には上方から黒灰色粘土、淡灰色粗砂が堆積し、最下層は湧水層に達している。

遺物は上層から、畿内第II様式の土器(6～11)および少量の植物遺体が認められた。

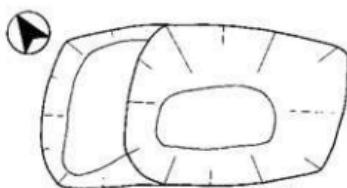
#### S P 8～S P 12

いずれも径22～30cm・深さ10～14cmを測るもので、S P 12はやや大型で梢円形を呈する。

柱穴中の遺物は、S P 9から須恵器底の小破片が出土したほか、土師器の細片が少量出土した程度である。

### S K 1

南北に長い楕円形を呈し、長径92cm・短径80cm、深さ30cmを測る。遺物は上層の黒灰色粘土層から、土師器の細片および種子等が少量出土している。また、最下層は湧水層の淡灰色粗砂層に達していることから、井戸状遺構であった可能性も考えられる。



### 3) A-3区

溝(S D 1・S D 2)、柱穴(S P 13)を検出している。

#### S D 1

北西方向に延びS D 2に流れ込む小規模な溝で、幅18~50cm・深さ7~10cmを測る。

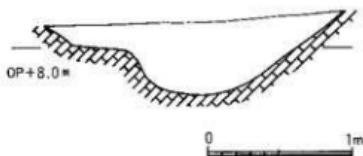


図5 SE 1平断面図

#### S D 2

北西方向に流れ、上幅190cmを測る。底部からは湧水が多くて、底幅・深さ等の詳細は不明であるが、上層は黒灰色粘土で充填され、下層は淡灰色細砂がレンズ状に堆積している。

遺物は上層より弥生式土器・土師器・須恵器・製塩土器・石製品・種子等が出上しているが、体部に穿孔のある畿内第II様式(5)の皿を除き、大半は細片である。

### 4) A-4区

掘立柱建物(S B 1)基礎(S K 2)、井戸(SE 2)、溝(S D 3)を検出している。

#### S B 1

S P 14~S P 16で構成される掘立柱建物である。柱穴はいずれも円形を呈し、径30cm前後・深さ35cmを測り、S P 14には柱根が残る。建物規模はさらに拡がると推定されるが、調査区外へ至るために不明である。遺物は土師器の細片が少量出土した程度で、時期も不明である。

#### S K 2

A-3区からA-4区にまたがる土塹で、南側は調査区外へ至るが、ほぼ楕円形を呈するものと考えられ、径80cm・深さ10cmを測る。また、南西隅にS D 14が構築されているが、切り合ひ関係からSK 2が新しい時期に比定できる。遺物は土師器の細片が少量出土している。

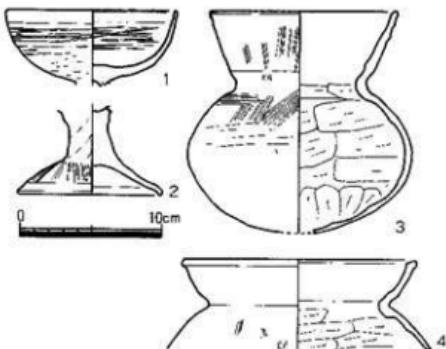


図6 SD3-SE2出土遺物実測図

### SD3

南東から北西方向に延びる溝で、幅60cm・深さ10cmを測る。遺物は庄内式に属する土師器高杯(1・2)、甕等の細片が少量出土している。

## IV 出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は、コンテナに10箱程度で、SE1・SE2等の一部の遺構を除き、ほとんどが第6層暗灰色粘土層から出土している。種別は弥生式土器、土師器、須恵器、製塩土器・石製品・植物種子等で、時代別には弥生時代中期前半～後期と古墳時代前期～中期の2時期に分けられる。

以下、器種別に概観し、個々の土器の技法ならびに調整は、文末の一覧表に明示する。

### 1) 弥生式土器

弥生式土器はSD2・SE1、および包含層から出土している。SD2からは口縁部付近を欠損する甕1点、SE1からはほぼ完形の鉢・甕を含む6点が出土し、いずれも畿内第II様式(以下II様式と記す)に位置づけられる。包含層からはII～V様式の壺・鉢・甕等の破片が出土したが、量的にはII・V様式のものが多く、III・IV様式と考えられるものはごくわずかである。壺(5・10・16～18)

(5)は球形に近い体部と長い頸部をもつII様式の壺である。体部外面は縱方向のナデで調整した後、下半を横方向のヘラミガキで丁寧に仕上げている。底部側面および周縁には指頭圧

### SE2

円形を呈する素掘りの井戸で、上面径106cm・底部径78cm・深さ80cmを測る。内部は上方に黒灰粘土層、下方に灰色シルト層の2層の堆積が認められ、湧水層に達している。

遺物は、黒灰色粘土層より上部器の壺(3)・甕(4)等の破片が出土している。出土遺物から井戸の構築時期は、布留式の新しい時期に比定されるものと考えられる。

痕がみられ、上げ底状となる。体部内面の調整は下半に横方向のヘラミガキを行なうが、頸部にユビナデ、底部に指頭圧痕を残している。

頸部には2帯1組とする複帶構成の直線文を4帯施す。また、頸部下には單帶構成の左開き円弧文を主に施すが、逆向きの円弧文1個、円弧文間に波状文を施す部分が2ヶ所にある。胎土には石英・長石・角閃石を多く含み、淡褐色を呈する。

この壺は穿孔をもつだけでなく、口縁部は欠損している。瓜生堂遺跡や恩智遺跡出土の供献土器には口縁部を故意に打ち欠くものがあることから、この資料も同様の性格をもつものと推定される。

(10・16)はII様式の壺の底部で、形態・調整・胎土・色調も(5)と同様である。

(17)は直立する頸部から水平近くに屈曲する口縁部をもつ壺である。口縁端部は下方に肥厚し上方へ拡張するが、上端を欠損する。復元口径は約18cmを測る。外面の調整は縱方向の粗いハケ、色調は白色系を呈するため、搬入品ではないかと考えられる。

(18)は「く」の字形に外反する短かい口縁部をもつ。口縁端部は上下に肥厚し、内傾する面となり、凹線文が2条めぐる。体部の張りは強く、内面にはヘラケズリによる稜線がみられる。形態・調整の特徴は岡山県の上東・鬼川市II様式の壺に近似するが、胎土には角閃石を多く含み、暗褐色の色調を呈する。

鉢(6・19・20)

(6)は大きな底部から内窪ぎみに開くII様式の直口の鉢である。外面下半を粗く削りとった後、ハケ・ヘラ等で粗雑に調整する。底部には(5)の壺と同様の指頭圧痕がみられ、上げ底状である。胎土には大粒の角閃石・長石を含み、茶褐色の色調を呈する。

(19・20)はともにV様式の小型鉢である。(19)は浅い橢形を呈する直口の鉢である。右上がりのタクキで簡略につくり、外面上半および内面をナデで仕上げる。チャート・石英をわずかに含むやや精選された粘土を使用し、明褐色～乳黄色を呈する。(20)は深い体部から屈曲し、上方にのびる短かい口縁部をもつ。体部外面は水平なタクキ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデで調整されている。(19)同様精選された粘土を用い、角閃石・長石をわずかに含み、茶褐色を呈する。



図7 壺(5)文様模式図 1:4

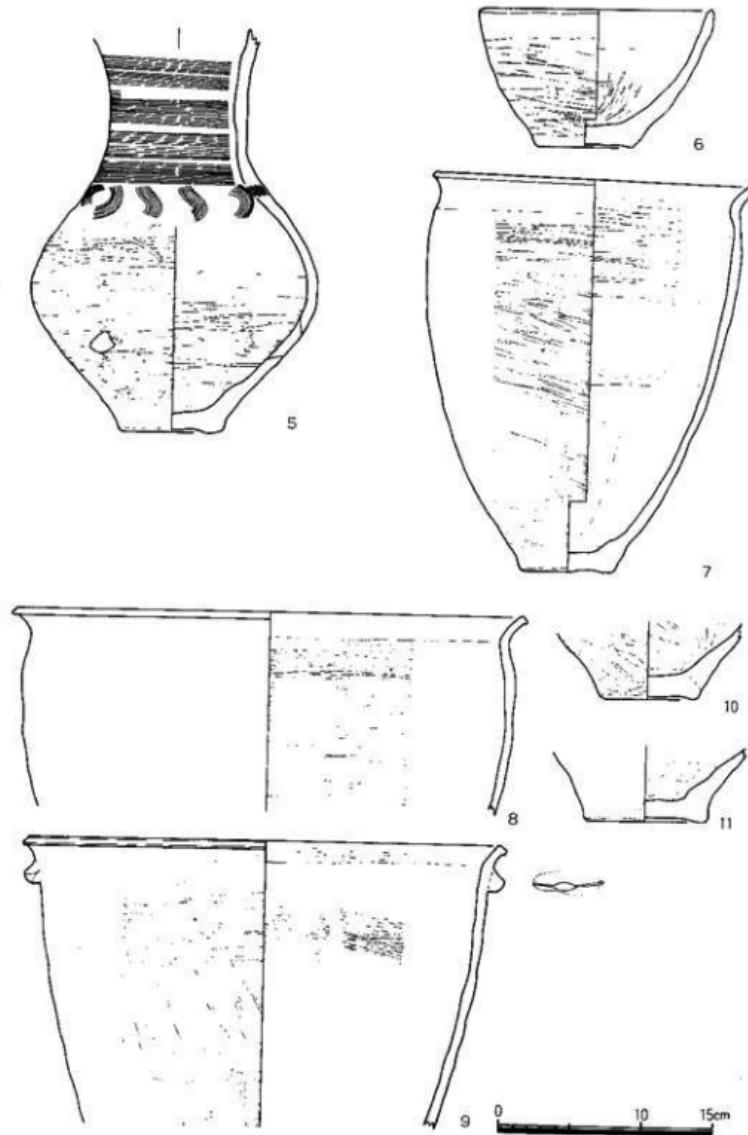


図8 SD2·SE1出土弥生式土器実測図

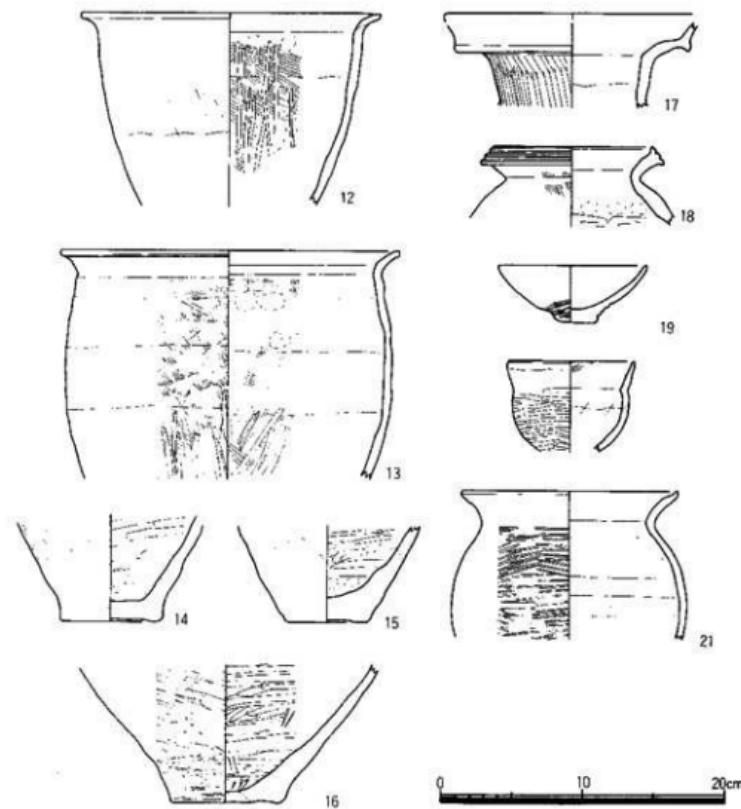


図9 包含層出土弥生式土器実測図

甕 (7-9・11-15・21)

II様式の甕には、口径20cm前後の中型のもの(7・12・13)と、30cmを超える大型のもの(8・9)がある。

(7)は倒錐形の体部に丸く屈曲する口縁部をもつ。体部外面は縦方向ハケの後斜方向ヘラミガキ、底部側面・周縁部に指頭圧痕がみられ、比較的薄い底部である。内面は縦方向ユビナデの後、上半に『河内型甕』の特徴である横方向のヘラミガキを施す。口縁部内外面にはヨコナデ

を施す。全体に器表の磨耗が著しく、胎土には長石・石英・角閃石が多く含み、暗茶褐色を呈する(12)は体部の張りが弱く、短かい口縁部をもつ。体部内外面はハケの後へラミガキで調整しているが、焼成不良のため遺存状態がきわめて悪い。胎上には石英を多く含み、赤褐色を呈する。(13)の体部は若干丸みをおびるため、胴部最大径は口径にちかづく。また、口縁端部は若干下方へ肥厚ぎみとなる。外面ともに口縁部ヨコナデ、体部は斜方向ハケの後下方に概方向へラミガキを行なう。長石・石英・角閃石等を細粒で多く含み、暗茶褐色の色調で、硬く焼き上げられている。

大型の甕(8)も(13)と同様の形態で、屈曲部内面にゆるい棱をもつ。体部外面斜方向ハケ、内面は縱方向ハケの後横方向へラミガキ、口縁部内外面をヨコナデで調整する。外面下位には煤が付着する。(9)は体部の張らない器形で、短かい口縁部をもち、扁平な把手を貼り付ける。外面は口縁部ヨコナデ、体部縱方向の粗いハケの後斜方向の細かいハケで調整する。内面の調整は、口縁部に横方向の、体部上位には斜方向のハケを行なう。(8)とともに、内面の接合部には指圧ナデの凹みを残す。

底部(11・14・15)のうち、(11)は大型の甕のもので、調整はナデと粗いハケによる。胎土には石英を多く含み、チャートもみられ、乳黄色を呈する。(14・15)は中型の甕の底部で、内外面とも接合部を指圧ナデの後へラミガキする。(14)は底面にもへラミガキを施している。また、(15)の外面は器表がすべて剥離し、へラミガキの痕跡をとどめるだけである。とともに大粒の長石・石英・角閃石を多量に含み、茶褐色を呈する。

(21)は球形の体部から「く」の字形に外反する口縁部をもち、端部はつまみ上げぎみに終わる。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面は横ないし左上がりリタキで調整し、下位をユビナデする。体部内面をナデで仕上げるが、粘土縫接合痕を明瞭に残す。胎土には長石・石英・チャートを含み、明橙色~乳黄色の色調を呈する。弥生式土器に含めたが、形態・調整は飛鳥地域出土の庄内甕に類似する。  
⑤

## 2) 古墳時代の遺物

### 1. 土器

前期の出土遺物は包含層を含めてごくわずかであり、遺構に伴なうものはS D 3出土の高杯2点のみである。中期の遺物はS E 2で並・甕が出土した以外は、すべて包含層より出土している。包含層からは比較的多量の出土をみたが、S E 2に伴なう時期のものはわずかで、大半が須恵器出現以後の所産である。

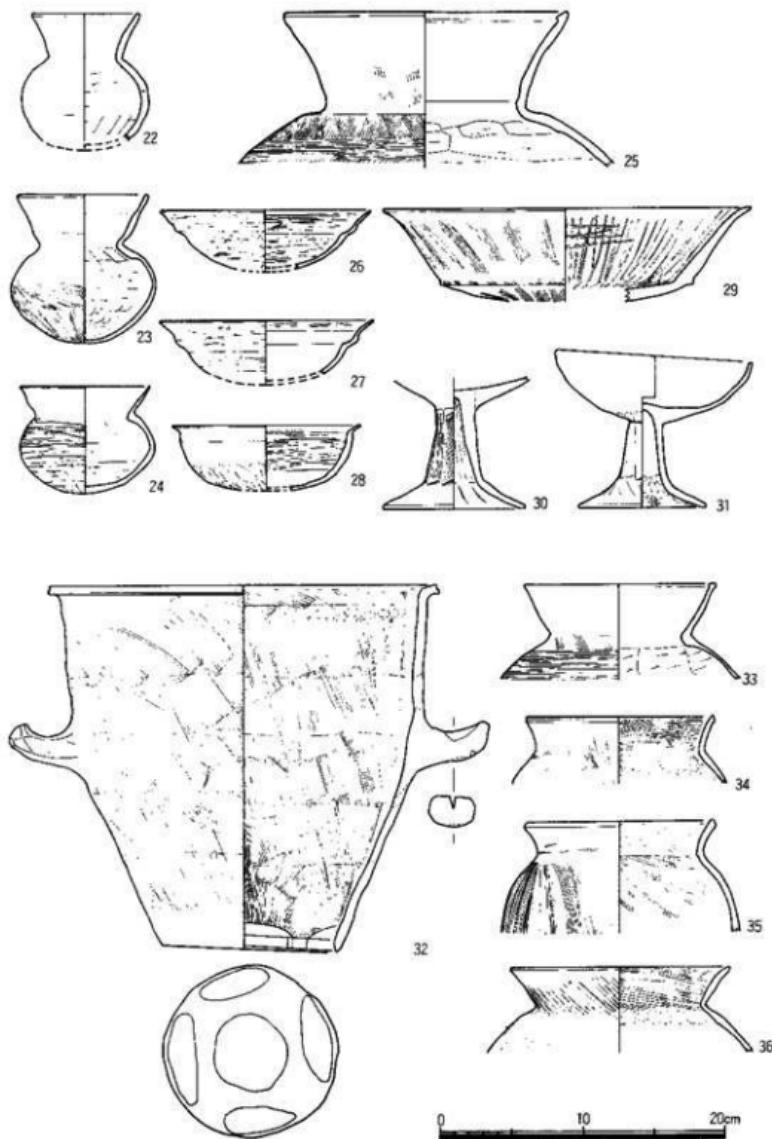


図10 土器実測図 1

### 壺(図6-3、22~25)

(3)はやや扁平な球形を呈する体部から屈曲し、上外方へ伸びる直口縁である。口縁部外面は縱方向のハケの後ヨコナデ、体部は斜方向のハケの後ナデを施す。口縁部内面ヨコナデ、体部内面は上位では横方向、下位では縱方向のヘラケズリを施す(S E 2出土)。

包含層出土のものでは小型壺(22~24)、大型壺(25)の4点を図示している。(22)は底部を欠損するが、口縁部は球形の体部から屈曲して上外方へ外反する。全体に器壁が厚く、調整も粗雑である。(23)は頸部より屈曲し、斜上方へ内弯ぎみに伸びた後外反して口縁部を作っている。体部はやや扁平な球形を呈し、底部を除いた外面には煤の付着が認められる。(24)は「く」の字形に鋭く屈曲し、斜上方へ伸びる口縁部をもつもので、(22・23)とは形態および外面調整を異にし、時期的にも先行するものである。

(25)は大型壺で、頸部より丸く屈曲し、上外方へ外反して高く立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部の一部に煤の付着が認められる。

### 鉢(26~28)

(26・27)はともに浅い丸底の体部に、2段に屈曲して斜上方に開く口縁部がつく小型の鉢である。双方ともに内外面を細かい横方向のヘラミガキにより、丁寧に仕上げている。

(28)は平坦な底部よりゆるやかに内弯して立ち上がった後、斜上方に折れる口縁部をもつものである。比較的丁寧な作りで、外面には黒斑が一面に認められる。

### 高杯(図6-1・2、29~31)

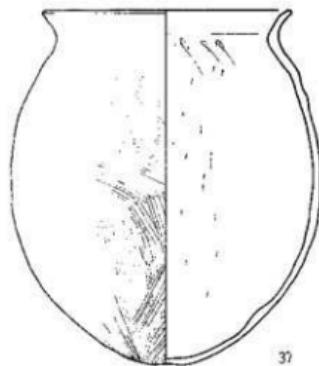
(1)は楕円形の杯部を残す。外面は下位ヘラケズリの後横方向の細かいヘラミガキ、内面はナデの後上位を横方向の細かいヘラミガキを施す。胎土は良好で、淡茶褐色の色調を呈し、外面下位に煤の付着が認められる。(2)は脚部以下が残存する。柱状部外面はナデ、縦部は縦方向のヘラミガキの後、裾端部ヨコナデ。内面はナデの後裾端部をヨコナデする。胎土は良好で、淡茶褐色の色調である。ともにSD 3からの出土である。

包含層出土のものには、平坦な杯底部から段を作り斜上方へ外反ぎみに伸びる口縁部を持つ(29)と、杯部が楕円形を呈する(30・31)が出土している。(29)は全体にシャープで丁寧な作りである。調整は外面ハケ、内面には放射状ヘラミガキ暗文を施している。(30・31)は柱状部が長めで、縦方向のハケの後ナデを行なうもので、ハケ原体のあたりが屈曲部に顕著に認められる。

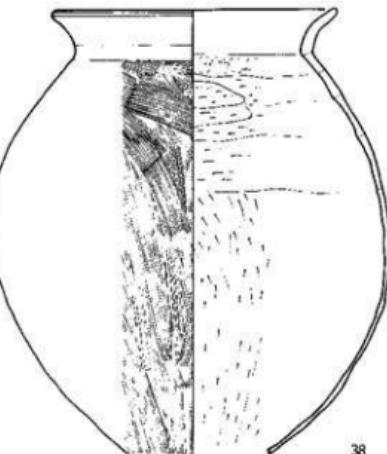
### 甌(32)

図示した完形品以外に、底部の細片および把手などが数点出土している。

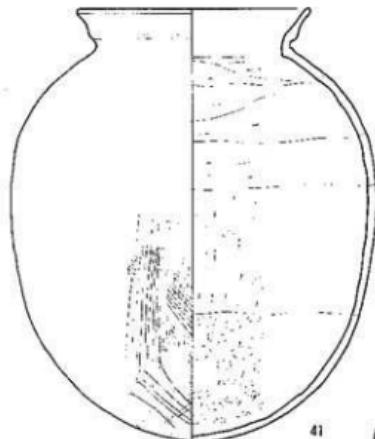
(32)の口縁部は筒状の胴部から外反し、内傾する面を作る。底部は平坦で、中央に円孔を、



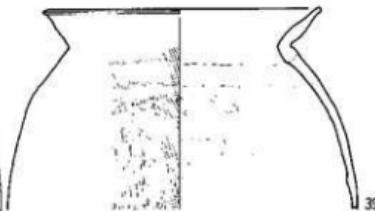
37



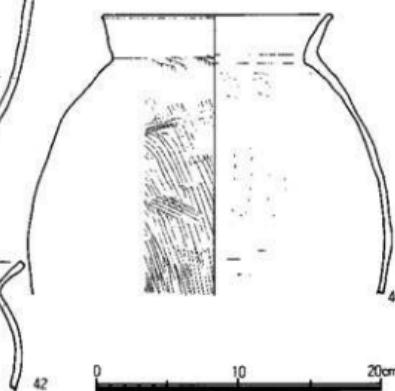
38



41



39



40



42

0 10 20cm

図11 土器実測図2

その周囲に4個の梢円孔を廻らせてている。把手は牛角形で上面中央部にヘラによる切り込みが認められる。

#### 甕(33~41)

布留式の特徴を示す(33)以外はすべて口縁部が「く」の字形に外反するもので、完形品の3点を含め、比較的良好な資料を検出している。

(37~40)は甕(32)とともに、A・3区の包含層より一括で出土した。(37)以外はやや大型で、体部は長卵形を呈し、最大径を体部中位に持つ。体部外面は全体にハケ調整が行なわれ、小型甕では頸部以下の体部を上位・中位・下位の順に3分割し、大型甕では体部中位が2段で4分割の調整を行なっている。また部分別のハケ調整は、体部上位には右傾のものが多いのに比べ、中位では垂直ないし斜方向に一定し、中位以下は単位の長いハケを底部まで一気に施す特徴を呈している。このように体部外面を一定方向のハケで調整する甕は、船橋遺跡の④0~Ⅳ・0~Vに共通して認められ、布留式の新段階の甕とは技法が異なり、6~7世紀の長胴甕の系譜に移行するものと考えられる。

(41)は口縁部が2段に屈曲し、体部上位から強く張り出るもので、底部はやや扁平な丸底を呈する。このような甕は近接する八尾南遺跡に類例があり、古式の須恵器と共伴するもので、前記の遺物群よりは古相に位置づけられる。

(42)は比較的大きな口縁径を持つもので、甕と考えるよりは船橋遺跡④0~Ⅳ・0~V等に見られる鉢、あるいは把手の付く鍋の器形に近いものと考えられる。

## 2. 須恵器

須恵器はS D 2等の一部の遺構を除いては大半が包含層からの出土で、蓋杯・高杯(有蓋・無蓋)・甕・壺等が出土している。包含層出土の遺物は、まとまりを有したものではないが、時期的には比較的限定されたものと考えられる。

#### 蓋杯(43~60)

全地区より普遍的な出土が認められたが、蓋と身が別々に出土していくセット関係の明らかなものはない。

杯蓋(43~46)は器高が低く天井部が平らなもので、口縁部が内傾するもの(43・45)、平面をなすもの(44)、丸くおさめるもの(46)がある。(47~57)は器高が高く天井部が丸みをもち、口縁端部が内傾するものである。調整は丁寧で、天井部のヘラケズリは棱近くまで施している。クロ回転は左回りが大半を占める。

杯身は底部が平らなもの(52~57・60)と丸いもの(58・59)があり、口縁端部の形態は内傾し

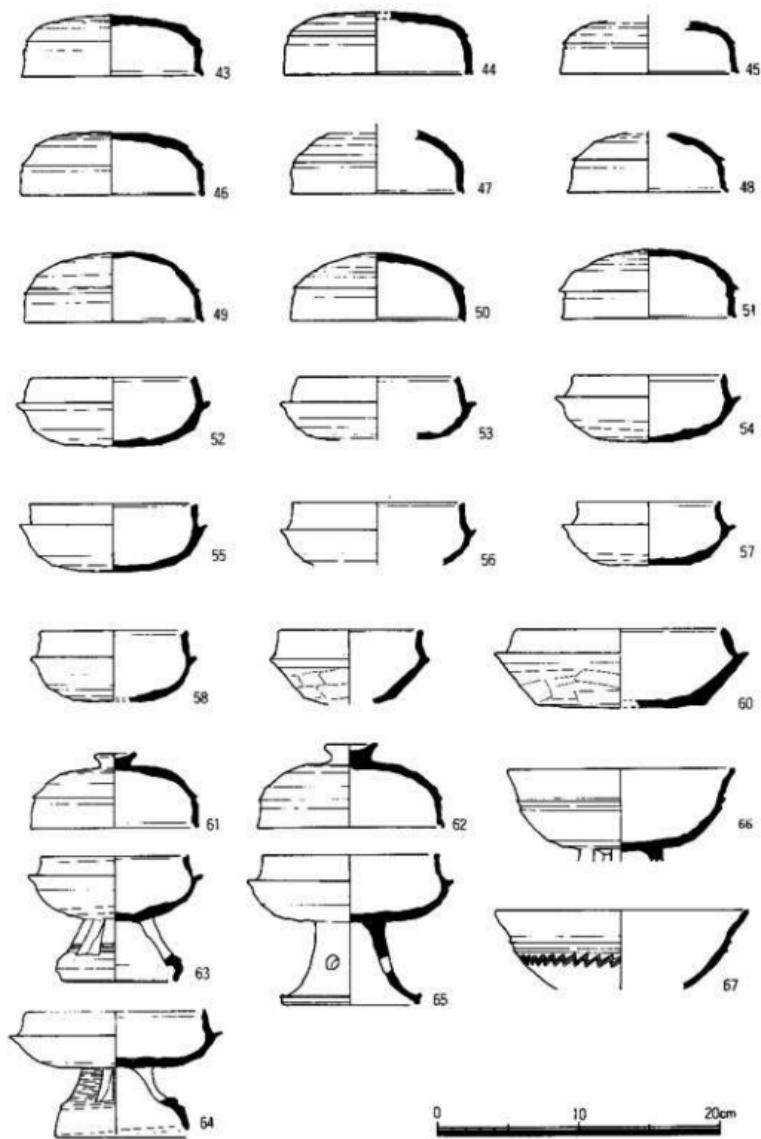


図12 須恵器実測図1

て平面をなすものと段を有するものに二分される。(59)は小型で受部が短かく、底部に静止ヘラケズリが行なわれているもので、陶邑TK 103号窯の出土例に近似する。(60)は口径縁14.6cm・受部径17.7cmを測る大型品で、底部は水平で体部外面には不整方向のヘラケズリが行なわれている。このように体部外面に不整方向のヘラケズリを施す例は、最古式に位置づけられているTK 85号窯・TK 73号窯・TK 305号窯で認められるが、ヘラケズリが体部上位にまでおよぶ例や、体部が丸みをもたず斜上方に伸びるものは陶邑内では類例を見ない。

#### 高杯蓋(61・62)

大小の二種が出土している。双方ともに天井部は丸みがあり高く、中央に窪みを有するつまみが付く。口縁部の形態は、(61)は内弯ぎみで垂直に下り、(62)は外反して端部に至るが、口縁端部はともに内傾する面を有する。

#### 有蓋高杯(63~65)

脚部の三方に台形の透しを穿孔する(63・64)が出土している。(63)は丸くて深い杯底部をもち、脚部は下方へなだらかに拡がり、端部付近でわずかに外傾した後外反して端部に至るものである。(64)は平らな杯底部をもち、脚部下方へ外反して開き、台形状の棱を作った後内弯ぎみに開くもので、脚部には回転カキ目を施している。また、(63)と比較すれば新相を呈するものと考えられる。(65)は大型のもので、平らで深い杯底部をもち、脚部は太く外反して下り、斜上方に屈曲した後再び外反して端部に至る。ON 18-II号窯の出土例に類似するものがある。<sup>◎</sup>

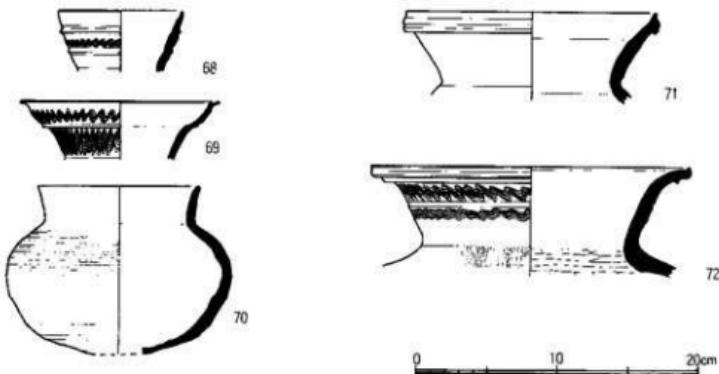


図13 須恵器実測図2

### 無蓋高杯(66・67)

口縁部の形態は(66)は丸みを持って立ち上がり、(67)は外傾して立ち上がる。(66)は灰かぶりのため明瞭ではないが、双方ともに2条の凸線帯の下方に波状文を施文する。口縁部の形状から、(67)が新相と考えられ、陶邑I型式5段階に位置づけられる。<sup>⑩</sup>

### 甕(68・69)

口縁部のみの破片であるが、斜上方に立ち上がるものの(68)とラッパ状に拡がるもの(69)が出土している。(68)は2本の凸線帯の間に4本1条の波状文を施している。(69)は頭部上半に15本1条とする密な波状文、口縁部には5本1条の波状文を施文している。前者は陶邑KM239号窯に類例があり、後者は陶邑I型式の3段階あるいは4段階に比定される。<sup>⑪</sup>

### 壺(70)

口縁部がゆるやかに外反して拡がる短頸壺である。胴部は口頸基部より内窵しながら外下方に張り出るもので、外面上半に回転カギ目、以下は回転ヘラケズリを行なう。

### 甕(71・72)

全地区より普遍的な出土を見たが、全体に細片が多く、図示し得たものは小型・大型の2点のみである。

小型の甕(71)は口頸基部より外傾しながら立ち上がり、頸部端で外下方に屈曲して口縁部に至る。頭部は回転カギ目の後、全体に回転ナデを施している。

大型の甕(72)は口頸基部より外傾し、頸部の凸線帯を境として上下に6本1条の波状文を施した後、断面三角形の凸線帯を作る。調整は

外面胴部に縱方向のタタキを施し、他は回転ナデを行なう。外面には自然釉が認められるが、全体に丁寧な作りである。陶邑I型式3段階ないし4段階に比定される。<sup>⑫</sup>

### その他

他にヘラ描き記号文をもつものを2点検出している。

(A)は脚部の三方に台形の透しをもつ有蓋高杯の破片で、杯底部に「—」印を施文している。また(B)は杯身(54)で、底部に「—」印の記号をもつ。

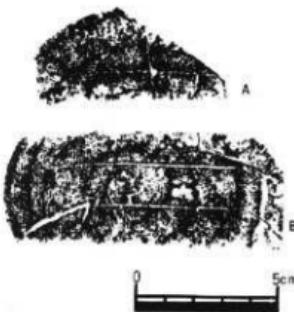


図14 ヘラ描き記号文拓影

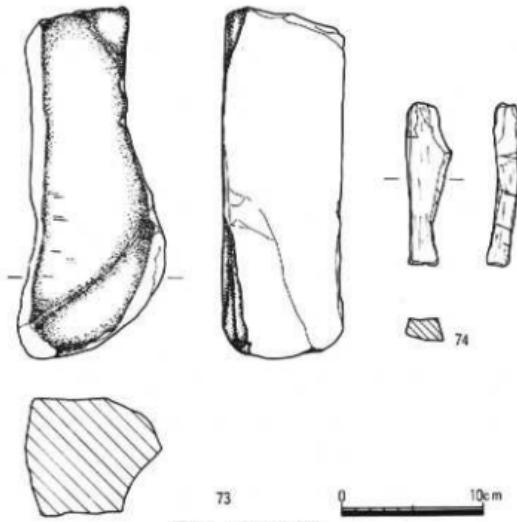


図15 磨石実測図

### 3) 石製品

砥石(73・74)

2点ともA-2区の包含層より出土した。

(73)は大型で、他の石製品を転用したと考えられるものである。3ヶ所に使用痕が認められ、石材は緑灰色を呈する砂岩である。

(74)は小型のもので、長期間の使用により中央部が窪み、4面に使用痕をもつ。石材は灰青色を呈する泥岩である。

### 4) 製塙土器

製塙土器は包含層を中心に178片が出土し、そのうち大型の破片13点を図示している。包含層から出土したものはその大半が、包含層中にブロック状に堆積している灰層に集中した状態であったため、地表面で直接わら等の植物を燃やすことにより、煎熬を行なっていたと推定される。このような場所は、A-1区・A-2区の各1ヶ所で確認している。

形態は、楕円形を呈する(1)以外すべて薄手丸底式である。丸底式のものは口縁部の特徴から直立するもの(2・3・5・6・11)、わずかに外反するもの(9)、内傾するもの(4・12)の3種に大別できる。

外面の調整技法には、指頭圧痕や粗雑なナデを残すもの(1~8)、平行ないし斜方向のタタキを施すもの(9~13)がある。内面では、口縁部付近および底部は指頭圧痕とナデ調整、体部は大半が貝殻によるケズリで、他にシボリ目を残すもの(6)や底部と体部に貝殻の条痕を残す(8)がある。

色調は火熱を受けて灰白色や淡黄色を呈するものが大半であるが、(8)のように茶褐色を呈するものも認められる。

## V 製塙土器の胎土観察

製塙土器の胎土について、奥田尚氏（八尾市立刑部小学校教諭）の観察結果を以下に掲載する。

### 1) 胎土の観察方法

胎土は礫・砂等の肉眼や実体鏡で観察できる構成粒子と、微粒の粘土粒子で構成されている。観察では、肉眼と実体鏡30倍で区別・同定できる粒子を構成粒子とし、粒子の判断ができない微粒を基質とした。肉眼においても、実体鏡下においても、岩石種として花崗岩・チャート・片岩類・蛇紋岩、鉱物種として石英・長石・雲母・角閃石を同定の対象とした。肉眼での実測は、1mm単位のものさしを利用し、実体鏡下では、粗粒・中粒・細粒・微粒の4段階に区分した。量的には、非常に多い・多い・わずか・ごくわずかの4段階に区分した。粒子のまるさについては、角・亜角・亜円・円の4段階に区分した。

以上の区分基準をもとにして、構成粒子の観察を行なった。

### 2) 胎土の観察結果

(1~13)の13資料の観察結果について述べる。

#### (1)

肉眼観察によると胎土中の構成粒子には、チャートと石英の鉱物が見られる。チャートは淡褐色を呈し、3個認められる。粒形は亜角で、粒径は1.5mmから1.0mmである。石英は灰色透明を呈し、1個のみ認められる。粒形は角で、粒径は1.5mmである。基質は淡黄土灰色を呈し、赤色酸化鉄を多く含む。粒径は1.0mmに及ぶ。

実体鏡30倍での観察によると、石英片岩・石英・角閃石の鉱物が見られる。石英片岩は無色透明を呈し、ごくわずかである。片状構造が認められ、粒形は亜円、粒径は中粒に及ぶ。石英は無色透明を呈し、わずかである。粒形は角で、粒径は中粒に及ぶ。角閃石は黒色を呈し、ごくわずかである。粒形は角で、粒径は細粒である。

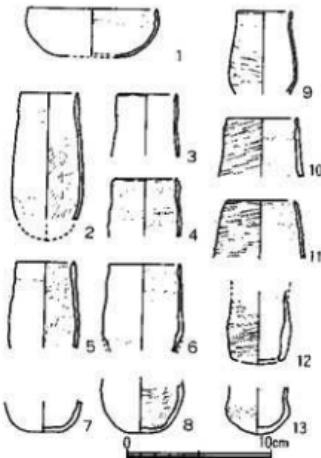


図16 製塙土器実測図

(2)

肉眼観察によると胎土中の構成粒子には、石英が見られる。石英は無色透明を呈し、ごくわずかである。粒形は角で、粒径は1.0mmに及ぶ。基質の色は淡灰黄色を呈し、茶褐色の酸化粒を多く含む。粒径は0.2mmに及ぶ。

実体鏡30倍での観察によると、石英の鉱物が見られる。石英は無色透明を呈し、わずかである。粒形は亜角で、粒径は中粒に及ぶ。

(3)

肉眼観察によると胎土中の構成粒子は細粒であり、同定しがたい。基質は乳白色を呈し、緻密である。

実体鏡30倍での観察によると、石英片岩・蛇文岩の岩石、石英・白雲母の鉱物が見られる。石英片岩は淡乳白色を呈し、わずかに1個のみ認められる。片状構造が認められ、粒形は亜円で、粒径は中粒である。蛇文岩は淡緑色半透明を呈し、わずか1個のみである。粒形は角で、粒径は中粒である。石英は無色透明を呈し、わずかである。粒形は角で、粒径は細粒である。白雲母は無色透明を呈し、ごくわずかである。粒形は角で、粒径は微粒である。

(4)

肉眼観察によると胎土の構成粒子には、石英と白雲母の鉱物が見られる。石英は無色と白色透明で、いずれもわずかである。粒形は亜角で、粒径は1mmに及ぶ。白雲母は無色透明で金属光沢を呈する。粒形は角、粒径は微粒で、わずかである。基質は灰白色を呈し、赤色酸化粒が見られる。

実体鏡30倍での観察によると、チャート・石英・白雲母の鉱物が見られる。チャートは黒色透明を呈し、わずか1個のみ認められる。粒形は角がまるみをおびた亜円で、粒径は中粒である。石英は白色と無色透明を呈し、いずれもわずかである。前者の粒形は亜角で、粒径は細粒である。後者の粒形は亜円から円で、粒径は中粒から細粒である。白雲母は無色透明で金属光沢を呈し、わずかである。粒形は角で、粒径は微粒である。基質中には黒色粒が多く見られる。粒径は細粒に及ぶ。

(5)

肉眼観察によると胎土中の構成粒子は、チャートと石英の鉱物である。チャートは茶褐色を呈し、わずかに1個のみ認められる。粒形は亜角で、粒径は1.0mmである。石英は無色透明を呈し、ごくわずかである。粒形は角で、粒径は1.5mmに及ぶ。基質は淡黄土灰色を呈し、赤色酸化粒の微粒が認められる。

実体鏡30倍での観察によると、石英・白雲母・角閃石の鉱物が見られる。石英は無色透明を呈し、ごくわずかである。粒形は角で、粒径は中粒である。白雲母は無色透明で金属光沢を呈し、わずかである。粒形は角で、粒径は細粒から微粒である。角閃石は黒色を呈し、ごくわずかである。粒形は角で、粒径は細粒である。

(6)

肉眼観察によると胎土中の構成粒子には、石英と長石の鉱物が見られる。石英は白色透明を呈し、わずかである。粒形は亜角で、粒径は1.0mmに及ぶ。長石は白色を呈し、中程度である。粒形は亜角で、粒径は2.0mmに及ぶ。基質の色は灰褐色を呈する。

実体鏡30倍での観察によると、石英片岩・石英・長石・白雲母・角閃石の鉱物が見られる。石英片岩は無色透明を呈し、わずかに1個認められる。片状構造が認められ、粒形は角で、粒径は中粒から細粒である。長石は白色を呈し、中程度である。粒形は角で、粒径は中粒から細粒である。白雲母は無色透明で金属光沢を呈し、わずかである。粒形は角で粒径は微粒である。角閃石は黒色を呈し、ごくわずかである。粒形は角で、粒径は細粒である。

(7)

肉眼観察によると胎土中の構成粒子には、石英・長石・黒雲母が見られる。石英は無色または乳白色透明を呈し、非常に多い。粒形は亜角で、粒径は4.0mmから0.5mmである。長石は無色透明を呈し、わずかである。粒形は角で、粒径は1.0mmに及ぶ。黒雲母はバーミキュライト化し、金色を呈する。周囲は丸みをおび、板状でわずかである。粒径は1.0mmに及ぶ。基質の色は灰色である。

実体鏡30倍での観察によると、花崗岩？片・石英・長石・黒雲母・角閃石の鉱物が見られる。花崗岩？片は長石と石英からなり、1個認められる。粒形は角で、粒径は中粒である。石英は無色または乳白色透明を呈し、非常に多い。粒形は亜角で、粒径は粗粒から細粒のものまである。長石は乳黄色を呈し、わずかである。粒形は亜角から亜円をなし、粒径は細粒である。黒雲母はバーミキュライト化して金色の金属光沢を呈し、わずかである。周囲は丸みをおび、板状である。粒径は細粒である。角閃石は黒色を呈し、多い。粒形は角で、粒径は微粒である。

(8)

肉眼観察によると胎土中の構成粒子には、石英の鉱物が見られる。石英は無色透明を呈し、多い。粒形は角で、粒径は3.0mmに及ぶ。基質の色は黄土褐色である。

実体鏡30倍での観察によると、石英・長石・雲母・角閃石の鉱物が見られる。石英は無色透明を呈し、ごくわずかである。粒形は角で、粒径は細粒である。雲母には無色透明で金属光沢

を呈する白雲母と、黒雲母がバーミキュライト化し金色を呈するものとがある。前者は多く、粒形は角で、粒径は細粒から微粒であり、微粒のものが多い。後者はごくわずかであり、粒形は角がまるくなり板状を呈する。粒径は微粒である。角閃石は黒色を呈し、粒形は角で、粒径は細粒におよぶ。

(9)

肉眼観察によると胎土中の構成粒子には、長石が見られる。長石は白色を呈し、わずかである。粒形は亜角で、粒径は2.5mmに及ぶ。基質の色は乳白色であり、緻密である。

実体鏡30倍での観察によると、石英・長石・黒雲母の鉱物が見られる。石英は白色か無色透明で、いずれもわずかである。粒形は亜角で、粒径は中粒から細粒である。長石は白色を呈し、中程度である。粒形は亜角で、粒径は細粒である。黒雲母は黒色で金属光沢を呈し、多い。粒形は角のわずかにとれた亜角で板状である。粒径は細粒である。

(10)

肉眼観察によると胎土中の構成粒子は、細粒であるため、同定しがたい。基質の色は淡黄土灰色を呈する。赤色酸化粒がわずかに見られる。

実体鏡30倍での観察によると、絹雲母片岩、石英片岩、石英・角閃石の鉱物が見られる。絹雲母片岩は、網糸状光沢の絹雲母が片状構造の方向に並んでいる。粒形は亜円で、粒径は中粒であり、ごくわずかである。石英片岩は無色透明を呈し、片状構造が認められる。粒形は亜角で、粒径は中粒で、ごくわずかである。石英は無色透明を呈し、わずかである。粒形は角で、粒径は細粒である。角閃石は黒色を呈し、ごくわずかである。粒形は角で、粒径は細粒である。

(11)

肉眼観察によると胎土中の構成粒子には、石英・長石・黒雲母の鉱物が見られる。石英は無色、あるいは白色透明を呈し、非常に多い。粒形は亜角から亜円で、3.0mmに及び、2.0mm以下のものが多い。長石は乳黄色を呈し、多い。粒形は角で、粒径は1.0mmに及ぶ。黒雲母はバーミキュライト化し、金色を呈し、少ない。粒形は角がとれてまるく、板状を呈し、粒径は0.5mmに及ぶ。基質は黃土色を呈する。

実体鏡30倍での観察によると、チャート、石英・長石・角閃石の鉱物が見られる。チャートは茶褐色を呈し、わずか1個見られる。粒形は亜角で、粒径は中粒である。石英は無色透明を呈し、多い。粒形は角で、粒径は粗粒に及ぶ。長石は乳白色を呈し、多い。粒形は角で、粒径は細粒である。角閃石は黒色を呈し、多い。粒形は角で、粒径は細粒である。

(12)

肉眼観察によると胎土中の構成粒子には、花崗岩？片と長石の鉱物が見られる。花崗岩？片は長石と石英からなり、わずかである。粒形は角のわずかにとれた亜角、粒径は2.0mmに及ぶ。長石は乳白色を呈し、わずかである。粒形は角で、粒径は1.0mmに及ぶ。基質は灰黒色を呈し、細粒の粒子が見られる。

実体鏡30倍での観察によると、石英・長石の鉱物が見られる。石英は無色透明を呈し、ごくわずかである。粒形は角で、粒径は粗粒である。長石は白色透明を呈し、多い。粒形は角で、粒径は中粒に及ぶ。

(13)

肉眼観察によると胎土中の構成粒子には、絹雲母片岩と石英の鉱物が見られる。絹雲母片岩は2個認められ、いずれも片状構造が見られ、片状構造の方向に絹雲母が配列する。1個は粒形が円で、粒径が3.5mmである。もう1個は粒形が角で、粒径が2.0mmである。石英は無色透明を呈し、わずかである。粒形は角で、粒径は1.5mmに及ぶ。基質は淡灰褐色を呈し、孔が多い。孔径は0.5mmに及ぶ。

実体鏡30倍での観察によると、絹雲母片岩・石英片岩、石英・黒雲母・角閃石の鉱物が見られる。絹雲母片岩は絹糸状光沢を呈し、片状構造が認められ、わずかである。粒形は円で、粒径は粗粒である。石英片岩は無色透明を呈し、片状構造が見られ、ごくわずかである。粒径は中粒である。黒雲母は黒色塊状を呈し、わずかである。粒形は亜角で、粒径は粗である。黒雲母片岩の岩片である可能性もある。角閃石は黒色を呈し、ごくわずかである。粒形は角で、粒径は中粒である。

### 3) 胎土の特徴と推定される産地

(1)から(13)までの13試料の胎土中の構成粒子の岩石種・鉱物種別にまとめたのが表1である。岩石的な特徴からみれば、石英片岩・絹雲母片岩等の片岩類を含む試料は、(1)・(3)・(6)・(10)・(13)で、(3)を除いて他はすべて角閃石を含む。上記以外でチャートを含む試料は(5)・(11)であり、いずれも角閃石は認められない。鉱物的な特徴から見れば、(7)・(8)の試料は石英が多く、長石・雲母・角閃石を含む。

以上のことから

1類：片岩類・石英を含み、長石・雲母・角閃石は認められる場合と認められない場合がある……………(1)・(3)・(6)・(10)・(13)

II類：チャート・石英・長石・雲母が含まれ、角閃石は認められない………(5)・(11)

III類：石英・長石・雲母・角閃石を含む……………(7)・(8)

の3種に類別できる。チャートが認められないが、II類に類似するものは(9)の試料である。

(4)の試料は長石・角閃石が認められず、チャートを含むことから、II類に類似する。(2)と(12)の資料はI・II・III類のいずれにも属さない。

片岩類を含むI類は、片岩類の岩片を産する地域で製作されたと推定される。片岩類は河内一帯の砂層には認められず、紀ノ川流域の三波川帯の結晶片岩類の分布する地域に多く見られる。いずれの片岩類の粒子もまるみをおびていることから、角が磨滅した岩片の産する地域のものである。この条件を満たすような場所としては、紀ノ川の下流域が推定される。よって、I類の製作された地域は、紀ノ川の下流域であると推定される。

チャート・石英・長石・雲母が含まれ、角閃石の認められないII類は、花崗岩類の産する地域であるが、角閃石を含まない花崗岩粒が認められることから、少なくとも八尾近辺、すなわち出土地近辺で製作されたものではないと推定される。

III類は石英が多く、角閃石を含むものと含まないものがある。出土地近辺の砂層には石英が多く角閃石がわずかに認められることから、試料(7)・(8)の胎土の構成粒子から見れば、出土地近辺で製作されたものと推定される。

他の試料については、推定しがたい。

表1 製塙土器の胎土分析表

試料番号	名前	判別による類別						実体化による類別						△ごくわずか ○わずか ◎多い ■非常に多い		
		花崗岩チャート	石英	長石	雲母	角閃石	チャート	花崗岩	石英	長石	雲母	角閃石	炭灰	内凹	はく離	泥質の色、その他の特徴
I	1	△	△	△				△		○			△	△	△	淡黄土灰色、褐色化が多い
-	2		△						○							淡褐色土色、褐色化が多い
I	3						△	△	○	△		△				乳白色、透明
II	4		○	○			△				○					淡白色、褐色化が多い
II	5	△	△						○	△	△					淡黄土灰色、褐色化が多い
I	6		○	○				△	○	○	△	△	△	△	△	淡褐色
II	7	*	●	○	○	△			●	○	○	●				淡褐色、褐色化が多い
II	8	*							●	△	●	○				土黄色
II	9		○						○	●	●					乳白色
I	10							△	△	○	○	△				淡黄土灰色、褐色化が多い
II	11	*	●	○					●	●	●					黄土色、褐色化が多い
-	12	○		○				△	●							褐色
I	13		△	○				△	○	○	○	△	△	△	△	淡褐色土色、石が多い

## VII まとめ

概述したように、調査途中で遺構を保存する処置を講じたことから、調査地の全様を知り得るまでは至らなかった。しかし試掘結果が示すように、調査地全域に包含層の拡がりが確認され、本附知であった木の木遺跡の一端が部分的ではあるが明らかにされた。

調査の結果、弥生時代中期前半と古墳時代前期・中期の遺構が検出され、複合遺跡であることが判明した。その中でも特に弥生時代中期前半の遺構の存在は、八尾市南西部に新資料を加えたばかりでなく、近接する八尾南遺跡や北西約2kmに位置する龜井遺跡との同時期の有機的な関連を考える上でも、重要な位置を占めるといえよう。

今回、2時期の遺構を検出した青灰色シルト層は、調査区全域に拡がる土層で、おそらく調査地の北方に位置する旧大和川に開削した小河川の氾濫による堆積土と推定される。また、当遺跡の北方に位置する跡部遺跡(春日町1丁目)でも、同質の土層で弥生時代前期と庄内式の時期の遺構を検出していることから、青灰色シルト層は長期間安定した土層で、同水系一帯に拡がっていたと推定される。

一方、SD2から出土した畿内第II様式の壺には体部下半に穿孔があり、供獻土器であると推定される。これらの弥生時代中期前半の資料は、単に墳墓の存在を示唆するだけでなく、この時期に当遺跡一帯が水稻耕作に適した低湿地であったために開発され、墓域をも備えた大集落を形成していたものとも理解できる。また、近接する八尾南遺跡では弥生時代中期の資料を欠如することから、これらの事柄がそれを埋めるものと推測されよう。

5世紀後半の遺構としては掘立柱建物を検出している。この時期は、八尾南遺跡や長原遺跡と併存するもので、地域的にも近接する関係にある。このように、この時期の集落の急激な増加は河内平野に一般的に認められる現象で、今回の調査でも検出したように、薄手丸底式の製塩土器の出現と一致している。これは一部で指摘されているように、社会情勢の変化が多量の塩の消費を促したものではないかとする事柄を裏付ける資料と考えられる。一方、製塩土器の产地については胎土の観察でも明らかにされたように、他地産のものが圧倒的多数を占めることが判明した。このことは単に製塩土器を搬入品として捉えるだけでなく、社会情勢の一端と考えられる古墳造営等の大工事に伴う多数の人の移動に関連して、持ち込まれた可能性も今後考えなければならない問題であろう。

以上、調査結果から概略を記したが、今回の調査は遺跡の一部を発掘したに過ぎず、多くの問題点を残したことは否定し難い。今後これらの諸問題を解明することは、八尾市南西部の一部のみにとどまらず、中南河内の歴史を知るうえでも重要であると考えられる。

(注記)

- 1 八尾南遺跡調査会「八尾南遺跡」 1981年
- 2 瓜生堂遺跡調査会「瓜生堂遺跡III」 1981年
- 3 瓜生堂遺跡調査会「恩智遺跡」 1980年
- 4 岡山県教育委員会「川入・上東」 1973年
- 5 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌60・2』1969年
- 6 平安学園考古学クラブ『船橋II』 1962年
- 7 ①前掲書
- 8 ⑥前掲書
- 9 大阪府教育委員会「陶邑III」 1978年
- 10 ⑨前掲書
- 11 ⑩前掲書
- 12 ⑪前掲書
- 13 大阪府教育委員会「陶邑I」 1976年
- 15 ⑬前掲書
- 15 ⑭前掲書
- 16 ⑮前掲書
- 17 ⑯前掲書
- 18 大阪府教育委員会「小島東遺跡」「岬町遺跡群発掘調査概要」 1978年
- 19 ⑰前掲書
- 20 (財)大阪文化財センター「龜井・城山」 1980年
- 21 本誌所収第6章
- 22 ⑱前掲書
- 23 (財)大阪文化財センター「長原」 1978年

## VII 出土遺物観察表

### I) 弥生式土器

番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
5 爪	鍬形	鍬底径 20.1 底 高 6.8	底面に近い体部から、あまり縮まらず底部に続く。底部はほく突出する。体部下位に収成後外から打ち欠く孔(深2.1×1.6cm)をもつ。 模様引き文を施す。頭部には2重1組の両面文を4番。頭部には円周文を14番すが、間に模状文を施すので逆三角のものもあり。不規則である。	外面 縦方向ハケの後ヨコナデ。文様帯以下は丁寧な微方向ヘラミガキ。底部側面には指痕圧痕の跡みが認める。 内面 ユビナナの後端部上位ヨコナデ、体部中段以下下側面ヘラミガキ。頭部・肩部にはユビナナの四みが残る。	色調 胎土 径1mm前後の反石・右 更多く含む。角閃石は 細粒で含む。 焼成 良好
	S E 2				
6 爪	口 釜	口 径 16.1 底 高 9.8	突出する厚めの底部から、斜上方へ内側ぎみに開く底口の形。口較端部は人に終わる。外底面中央にはわずかに凹む。	外面 口縁端部ヨコナデ・体部斜方 向ハケの後横方向ヘラミガキ。 底部側面および尾端部ユビナ ナデ。 内面 口縁端部ヨコナデ。体部下位 横方向ハケの後放射状ヘラナ デ。上位イタナデ。	色調 胎土 根くほ7mmにも達する 角閃石・長石含む。 焼成 良好 斜七面合板が明顯である。
	S E 1				
7 爪	口 釜	口 径 22.0 底 高 6.2 器 高 28.1	奥の少ない体部から若干下くびれた 後、斜上方へ外反する口縁部。口縁 端部は丸みのある頭をもつ。底部は わずかに突出し、厚い。	外面 口縁部ヨコナデ。体部上位横 方向ヘラミガキ。中・下位縱方 向ハケの後斜方ヘラミガキ。 或部捺压ナデの後、圓面のみ ナデ。 内面 口縁部ヨコナデ。体部上位横 方向ヘラミガキ。以下底部まで ユビナナの凹み。	色調 胎土 暗茶褐色 0.5~5mmの長石・石英、 角閃石を多く含む。 焼成 良 二次加熱をうけたため感 有り。
	S E 1				
8 大型鉢	口 釜	35.6	石下張りをもつ体部からくびれ、内 にやるい腰を作り、斜上方に外反す る口縁部。口縁部はごくわずか下 に肥厚し、内傾する狭い頭をもつ。	外面 口縁部ヨコナデ・くびれ部指 压ナデ。体部斜方向ハケ。 内面 口縁部および体部上位にユビ ナナデ、その後口縁部ヨコナデ、 体部縱方向ハケの後横方向ヘ ラミガキ。	色調 胎土 暗茶褐色(外面) 淡茶褐色(内面) 黒釉かい角閃石を含む。 焼成 良 二次加熱のため外向表面感耗 し、内外に堆積有。
	S E 1				
9 焼付大型鉢	口 釜	33.2	輪に沿うる体部から、斜上方へ折 れ突きいい縁部。口縁部はごく わずか下へ肥厚し、内傾する頭とな る。(くびれ部直下につまみ(深1.6×幅5.0 cm)を貼り付ける。	外面 口縁部のヨコナデ。体部 下位縦方向軽いハケ、中位以 上横方向ハケ。その後上位に 横方向ヘラミガキ。把手の周 囲は指圧ナデ。 内面 ユビナナの後横方向ナデ。体 部に斜方向ヘケも認められる。	色調 胎土 暗茶褐色(外面) 体部内面は黒釉 長石・石英・母貝・角 閃石多く、径7mmにお よぶ花崗岩・チャート を含む。 焼成 良好
	S E 1				
10 爪	底 釜	6.1	どっしりした厚い底部、内窓してゆ るやかに開く。外底面中央はわずかに 凹む。	外面 底側面指圧ナデの後斜方向ヘ ラミガキ。 内面 複合指圧ナデの横ハケ。そ の横斜方向ヘラミガキ。	色調 胎土 暗灰褐色 長石・石英・母貝・角 閃石多く、径7mmにお よぶ花崗岩・チャート を含む。 焼成 良
	S E 1				
11 爪	底 釜	8.2	突出した後急角度で立ち上がる大型 鉢の底部。底面の厚さは薄く、外底 面は凹内が多く不安定である。	外面 縦方向軽いハケの後ナデ。底 側面のみユビナナ。 内面 複合指圧ナデの後ナデ。	色調 胎土 乳白色 石英多く、チャートを 含む。 焼成 良好 縁の付着がわずかにみられる。
	S E 1				

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
12	瓶 A-2区 包含層	口 径 20.9	径々に開く体部から、外上方へ九く外反する口縁部。口縁端部は丸く終わる。	外面 口縁部ヨコナダ。体部斜方向 ハケ。ヘラミガキ等が認められるが不明瞭。 内面 口縁部ヨコナダと思われるが不明瞭。体部ユビナナの後斜方向ハケ。その後継方向ヘラミガキ。	色調 暗赤褐色 胎土 石英多く、チャートを含む。 焼成 やや不良 二次加熱のため、表皮剥離が多い。
13	瓶 A-2区 包含層	口 径 23.8	体部からわずかにくびれ、斜上方へ丸く外反するU縁部。口縁端部は下へわずかに肥厚し、孔のある面をもつ。	外面 口縁部ヨコナダ。体部斜方向 ハケの模様に縦方向ヘラミガキ。 内面 口縁部ヨコナダ。接合部指圧ナダの後斜方向ヘラミガキが認められる。	色調 暗茶褐色 胎土 石英、石英、角閃石多く含む。 焼成 良好 内外面に焦付有。
14	瓶 A-2区 包含層	底 径 7.0	直立した後急角度で立ち上がる瓶の底部で、外底面はわずかに凹む。器壁は厚めである。	外面 接合部指圧ナダの後斜方向ヘラミガキ。底面もヘラミガキ。 内面 接合部指圧ナダの後斜方向ヘラミガキ。	色調 茶褐色 胎土 角閃石多量に含み、既に5mmにおよぶ長石を含む。 焼成 良好
15	瓶 A-2区 包含層	底 径 5.5	急角度で立ち上がる瓶の底部で、外底面はわずかに凹む。器壁はきわめて厚い。	外面 斜方向へラミガキの痕跡をわずかに認める。 内面 接合部指圧ナダの後斜方向ヘラミガキ。	色調 茶褐色 胎土 既に7mmにおよぶ長石、角閃石を多量に含む。 焼成 表面表皮すべて剝離。内面に黒わすかに付着。
16	瓶 A-2区 包含層	底 径 7.6	直立した狭ゆるやかに大きく開く瓶の底部。器壁は薄めである。	外面 底面指圧ナダの後ハケ。その後斜方向斜方向へラミガキ。 内面 斜方向へラミガキ。	色調 緑灰褐色～茶褐色 胎土 長石、石英、角閃石多量に含み、既に5～6mmの花崗岩を散見する。 焼成 良好
17	瓶 A-2区 包含層		直立する瓶部から水平ちかくに屈曲する口縁部。口縁端部は上方へ弧曲し、外傾する面をもつて上縫部を欠損する。また、口縁下端部は大きく肥厚するため、口縁端部には凹縫状の凹みがみられる。	外面 U縁部ヨコナダ。瓶部斜方向 手いハケ。 内面 口縁部ヨコナダ。瓶部ナナ。	色調 乳白色～明褐色 胎土 石英多量に含み、チャートを散見する。 焼成 良好 内面U縁部に焦付有。
18	瓶 A-2区 包含層	口 径 11.5	「く」の字形に丸く屈曲し、斜上方へ開く豊かい口縁部。口縁端部は上下に肥厚し、内傾する広い面をもつ。器壁はきわめて厚い。 口縁端部は四縫文を2条施す。	外向 口縁部ヨコナダ。くわら部に縦方向ハケが認められるが、以下は不明瞭である。 内面 口縁部ヨコナダ。体部指圧ナダ、下部に横斜方向へケズリ(右→左)が認められる。	色調 暗茶褐色 胎土 長石、石英、玉砂、角閃石等多く、花崗岩も含む。 焼成 良好 器多量に付着。外表面わずかに磨耗する。
19	瓶 A-2区 包含層	口 径 10.5 底 径 2.9 基 高 4.1	突出する直筒から、斜上方へ内窪がみに開き、浅い瓶形を呈する直筒の瓶、粗鈍なつくりで、底部には押しつぶされたような部分もある。	外面 瓶タキの後体部上位、底面をナナ。 内面 ナナ。	色調 明褐色～乳白色 胎土 粘土、チャート、石英をわずかに含む。 焼成 良好

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粘土・焼成・備考
20	鉢 A-4 区 包含層	口 径 9.0 深 高 8.3	上方へ丸く屈曲する口縁部。口縁部は丸く終わるが、外へ尖りぎみとなる。体部は上方に最大径をもつ。	外部 口縁部ヨコナデ。体部細い横タクタ 内部 口縁部ヨコナデ。体部はナデナ	色調 茶褐色 粘土 粘土・長石・角閃石を細粒でわずかに含む。 焼成 良好 口縁部に焼付着
21	甕 包装層	口 径 15.1 最大径 8.3	「く」の字形に屈曲し、斜上方へ外反する口縁部。口縁部は上へおきめ、丸みのある頭をもつ。体部は無形にちがいでであろう。	外部 口縁部ヨコナデ。体部横タクタの後下位にユビナデ。 内部 口縁部ヨコナデ。体部はナデナ	色調 明褐色一乳黄色 粘土 長石・石英・チャートを含む。 焼成 良好 外面上に焼付着。 船上研合痕が明瞭である。

## 2) 土器器

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粘土・焼成・備考
1	高杯 SD 3	口 径 11.8	深い橢形の絞部のみ遺存。口縁部は直くなり、丸く終わる。	外面 下部へラケズリの後全体を横方向細かいヘラミガキ。その後口縁部ヨコナデ。 内部 ナデの後上位を直方向細かいヘラミガキ。その後口縁部ヨコナデ	色調 泥茶色 粘土 きわめて精良 焼成 良好 外面上位に焼付着。
2	高杯 SD 3	口 径 10.0	中まで筋形の状態から、外下方へ内側に開く握底。握底部は下へわすかに肥厚し、外傾する頭となる。	外面 杵状部ナデ。握部直射状ヘラミガキの後縁部ヨコナデ。 内部 ナデの後握部ヨコナデ。	色調 乳白色 粘土 3mmにおよぶ粗多く、チャート含む。 焼成 良好
3	直口甕 SE 2	口 径 12.8 最大径 15.6 深 高 15.7	丸く屈曲し、上方へ内側さみに伸びる口縁部。口縁部は丸く終わる。体部は球形。	外面 口縁部屈曲方向ハケの後ヨコナデ。体部斜方向ハケの後ナデ。 内部 口縁部ヨコナデ。体部上位横方向へラケズリ(左→右)、下位横方向へラケズリ(左→右)。	色調 乳白色 粘土 粘土 焼成 良好
4	甕 SE 2	口 径 16.0	丸く屈曲し、上方へ内側して伸びる口縁部。口縁部は外へ肥厚し、内側する凹面をもつ。体部は大きくなじく肩部のみ遺存。	外面 肩部に斜方向ハケの後口縁部ヨコナデ。 内部 口縁部ヨコナデ。肩部横方向へラケズリ(左→右)。	色調 乳白色 粘土 1mm前後の粗多く、チャート含む。 焼成 良好
22	小型甕 A-2 区 包含層	口 径 7.3 最大径 9.0 深 高 9.0	丸く屈曲し、上方へ外反する口縁部。口縁部は丸いが、外へ若干尖りぎみとなる。体部は球形。	外面 体部上位までヨコナデ。以下 の体部は指圧ナデの後ナデ。 内部 口縁部ヨコナデ。体部上位横 方向へラケズリ(左→右)の後 ナデ。下位はユビナデ。	色調 乳褐色 粘土 チャート・石英の颗粒 がわずかに認められる。 焼成 良

番号	種出位置	法長(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粒土・焼成・備考
23	小型盤 A-2区 包含層	口径 9.3 最大径 10.3 高さ 10.5	内にゆるい棱をもち、斜上方へ内寄り伸びた後外反する口縁部。口縫部は丸く終わる。体部はやや上位で弧状の球形。	外側 放射状ハケの後体部上位までヨコナナ。内側 口縫部ヨコナナ。体部中位横方向へラケズリ(左→右)。以下の体部には指壓子の凹みが顯著にみられる。	色調 黄褐色 粒土 チャート・石灰の細粒を含む。 焼成 良好 内外面に多量の揮付有。
24	小型丸底盤 A-1区 包含層	口径 9.1 最大径 9.5 高さ 9.7	内にゆるい棱をもち、「く」の字形に屈曲し、斜上方に伸びる口縁部。中位で一旦ふくらんだ後、兩部付近で外反みとなり、口縫部は薄く尖る、体部はきわめて扁平な球形。	外側 口縫部ヨコナナ。体部中位以下斜方向へラケズリ(右下→左下)、上位斜方向ハケの後横方向へ丁寧なヘラミガキ。内側 口縫部ヨコナナ。体部横方向へラケズリ(左→右)の後、横方向へラミガキ。	色調 淡水褐色 粒土 砂質、石灰の細粒を散見する。 焼成 良好
25	直口盤 A-2区 包含層	口径 19.6	丸く屈曲し、斜上方へ外反して伸びる山形縁部。口縫部は内に肥厚し、内側する肩部のみ直立。体部は大さく聞く肩部のみ直立。	外側 肩・斜方向ハケ。その後縫部上位までヨコナナ。肩部下位には横方向ハケ。 内側 口縫部ヨコナナ。肩部横方向へラケズリ(左→右)。	色調 黄褐色 粒土 粘質概混、長石・雲母の粗粒を含む。 焼成 直昇 口縫部に揮付有。
26	鉢 A-2区 包含層	口径 14.8	2段に屈曲し、斜上方へ外反する口縁部。口縫部は薄く尖る。体部はきわめて扁平な半球形。	外側 体部指正ナナの後全体を握り向かかいへラミガキで丁寧に仕上げる。 内側	色調 淡水褐色 粒土 粘質 焼成 良好 内面の一部に揮付有。
27	鉢 A-2区 包含層	口径 14.8	26と同じ器形であるが、屈曲部内面の棱はより低く、体部も深めとなる。	外側 横方向細かいへラミガキで丁寧に仕上げる。 内側	色調 淡水褐色・乳褐色 粒土 粘質 焼成 良好
28	鉢 A-2区 包含層	口径 13.1	体部から斜上方に折れる堅かい口縁部。口縫部は丸く終わる。体部は半球形を呈し、底部はわずかに平坦な面をもつ。	外側 口縫部ヨコナナ。体部下位横方向へラケズリ(下→上)の後全体をナナ。 内側 口縫部ヨコナナ。体部下位ナナ。	色調 外面素面 内面 淡水褐色(内面) 粒土 粘質 焼成 良好
29	高杯 A-1区 包含層	口径 20.7	平頭な杯底部から屈曲し、段をつくり斜上方へ外反して伸びる長い口縫部。	外側 ナナの後放射状ハケ。部分的にヨコナナを施し、ハケを削す。 内側 ナナの後放射状ヘラミガキ。一部に横方向へラミガキもみられる。	色調 淡褐色(外面) 乳質色(内面) 粒土 粘質、長石・石英・雲母・角閃石の細粒をわずかに含む。 焼成 良好
30	高杯 A-3区 包含層	底径 10.0	内側して聞く杯底部をわずかに残す。柱状部は比較的長めで、屈曲して下方に聞く底部を残す。被覆部は薄くなり、やや角張って終わる。	外側 柱部ナナ。柱部縦方向ハケの後ナナ。複数ナナ。屈曲部には、ハケ底部の圧痕が顯著にみられる。 内側 杯部ナナ。屈曲部指正ナナの後根部ナナ。柱部には放り波がみられる。	色調 乳褐色 粒土 粘質 焼成 良好 外表面全体および内面の一部に揮付有。

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	子法の特徴	色調、胎土、焼成、備考
31	盃	口径 13.6 根深 8.9 器高 11.3	浅い平球形の杯底で、口縁端部は丸く終わる。柱状部はゆるやかに開き、丸く膨張して根部に統く。根端部はやや角ばる。	外面 杯部ナゲ。唇部後任ナゲ。 柱状部・根部ナゲ。 内面 杯部後任ナゲ。柱状部統った後ナゲで済す。根部根部ナゲの横横方向ハケ。	色調 淡赤褐色 胎土 精良、径5mmに及ぶ長 柱、右肩をわずかに含 む。 焼成 良好
	A-3区 包含層				
32	盃	口径 27.0 根深 12.2 器高 26.0	丸く膨張する短い口縁部。口縁端部は下へ若干延びし、内傾する面となる。体部上位は筋状で、内下方へ直線的に下がり、平坦な底部へ続く。体部中位に、上面にへらによる切り込みのある舟形の把手を2個付す。底部中央に円孔を、その周囲に4個の椎円孔を備せる。	外面 斜方向ハケの後口縫部コナゲ。 把手の上下面・底側面、 根部ナゲ。口縫部と底部の境 には根部底板が側面にみられ る。 内面	色調 明褐色 胎土 精良、右肩、チャート を散見する。 焼成 良好 胎土接合部が側面にみられ る。
	A-3区 包含層				
33	盃	口径 13.3	「く」の字形に屈曲し、上方へ内寄りに伸びる口縁部。口縁端部は内に突起し、内側のする舟をもつ。体部は大きく膨らむ底部のみ済存。体部の器壁はきわめて薄い。	外面 口縫部コナゲ。肩部斜方向 ハケの接縫方向ハケ。 内面 口縫部コナゲ。肩部横方向 ハケ(左一右)。	色調 淡青褐色(外) 淡赤褐色(内) 胎土 精良、花崗岩を含む。 焼成 良好
	A-1区 包含層				
34	盃	口径 13.1	丸く屈曲し、上方へ外反する口縫部。口縫端部は上位にごくわずか肥厚し、丸味のある面となる。口縫端部に1束の灰聚が附る。	外面 根方向の後斜方向ハケ。その 後口縫部コナゲ。 内面 肩部の接合部を根部ナゲの接 縫あるいは斜方向ハケ。	色調 乳灰色 胎土 精良 焼成 良好
	A-3区 包含層				
35	盃	口径 13.0	丸く屈曲し、上方へ外反する口縫部で、上位で厚みを増す。口縫端部は丸味のある面となる。体部は丸く 弯曲する上位のみ済存。	外面 根方向ハケの後くびれ部まで コナゲ。 内面 慣習的には斜方向ハケの後口 縫部にコナゲ。体部にはユ ビナゲ。	色調 乳褐色 胎土 精良、わずかにチャー トを含む。 焼成 良好 口縫部と体部の接合痕が明瞭 である。 外面に爆付斑。
	A-1区 包含層				
36	盃	口径 15.4	「く」の字形に屈曲し、斜上方へ外反する口縫部。上位で厚みを増し、口縫端部は僅となり丸く終わる。体部は直線的に聞く上位のみ済存。	外面 左上がりリタキで口縫部を作 り出した後コナゲ。肩部斜 方向粗いハケの後ナゲ。 内面 口縫部横方向ハケ。肩部の接 合部を根部ナゲの後斜方向ハ ケズリ(右下→左上)。	色調 黄褐色 胎土 精良、わずかにチャー ト、石英を含む。 焼成 良好
	A-2区 包含層				
37	盃	口径(長)18.0 (切)16.0 最大径 21.8 器高 25.0	「く」の字形に丸く屈曲し、斜上方に外反する口縫部。口縫端部は丸く終わる。体部の張りは弱く、若干尖りぐみの丸底をもつ。	外面 口縫部コナゲ。体部斜方向 粗いハケの後肩部のところど ころにユビナゲ。 内面 口縫部コナゲ。体部斜方向 ハケズリ(下→上)の後ナゲ。 底部には根部底板がみられる	色調 淡青褐色 胎土 良、チャートを含む。 焼成 良好 外面に爆付斑 上位のためか器形はゆがむ。
	A-3区 包含層				
38	盃	口径 19.6 最大径 28.0	「く」の字形に丸く屈曲し、斜上方に外反する口縫部。口縫端部は丸く終わる。体部は根長の球形を呈する。	外面 体部上位斜方向、下位横方向 ハケの後口縫部コナゲ。 内面 根部コナゲ。体部のハ ケズリは下位(下→上)、中位 (右下→左上)、上位(右→左) の順に行なう。	色調 淡青褐色 胎土 径1~2mmの石英多く 含む。 焼成 良好 外側下部に多量の爆付斑。 裏皮の過化現象。
	A-3区 包含層				

番号	器種 出土位置	重量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調、胎土、焼成、備考
39	甕	口 径 18.9 底 大 徑 26.0  A - 3区 包含層	「く」の字形に掘出し、斜上方にまっすぐ伸びる口縁部で、上位では済む。口縁部は外へつまみ、丸く終わる。体部はやかに開く上位のみ遺存するが、長頸形になるからしない。	外面 口縁部ヨコナダ。体部斜方向の後側方向ハケ。その後接合部にヨコナダ。 内面 口縁部ヨコナダ。体部ヘラケズリの後ハケか。接合痕が確認できる。	色調 淡青色(外側) 淡灰褐色(内面) 胎土 石灰多く、チャートを含む。 焼成 良好。 内外面下に塗付有り。 内面裏皮の施毛者有し。
40	甕	口 径 15.9 底 大 徑 26.0  A - 3区 包含層	丸く掘出し、上外方へ外反込みに伸びる口縁部。口縁部は下に肥厚し、外側する丸味のある腹となる。体部はゆるやかに開く上位のみ遺存するが、長頸形になると考えられる。	外面 口縁部ヨコナダ。体部斜方向相ひヶリ。その後斜面部から体部上位までヨコナダか、腹部ちかくにヘラ光による擦痕がみられる。 内面 口縁部ヨコナダ。体部腹方向ヘラケズリ(右一左)の後ハビナダか。	色調 黄褐色 胎土 灰土、長石、石英、大粒のチャートを多く含む。 焼成 良好。 内面裏皮塗付無し。
41	甕	口 径 16.0 底 大 徑 25.6 高 30.8  A - 3区 包含層	体部から一筋くびれ、ふくらんだ後上外方へ外反込みに伸びる口縁部。口縁部は丸く終わる。体部は上位から下位まで強く盛る筒形の胴部となり先端部とからなる。	外面 体部斜方向ハケの後側方向相ひヶリ。その後口縁部から体部上位までヨコナダか、腹部ちかくにヘラ光による擦痕がみられる。 内面 口縁部ヨコナダ。体部下位斜方向ヘラケズリ(下→上)の後上位に横方向ヘラケズリ(左→右)。体部中位まで指輪压痕。	色調 青褐色 胎土 良、チャート含む。 焼成 良好。 外面下に塗付有し、外面上の表皮磨耗者有し。
42	甕?	口 径 23.5 底 大 徑 23.9  A - 3区 包含層	「く」の字形に丸く掘出し、斜上方へ外反するは縁部で、上位で厚味を増す。口縁部は厚めの腰をもたらすかにつまみ上げ込みに終わる。体部は上位のみ遺存するが、上位で強く張るため、低平な形状になると考えられる。	外面 斜方向ハケの後側ヨコナダ。 内面 口縁部ヨコナダ。体部斜方向ヘラケズリ(右→左上)の後ナダ。	色調 乳褐色~赤褐色 胎土 精良 焼成 良好。 口縁部内面および体部内面に塗付有り。

### 3) 須恵器

番号	器種 出土位置	重量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調、胎土、焼成、備考
43	蓋杯(蓋)	口 径 12.6 底 径 12.0 高 4.3  包含層	口縁部は短く外反して下った後、長く外反し、端部付近で外方向に削いて縁部に張り出る。口縁部はわずかに段を有し、内縫部との間に凹面を作る。天井部は低く平らで中央には、凹部ヘラケズリによる沈線が認められる。	外面 天井部は横端より0.9cm以上は回転ヘラケズリ。他は回転ナダ。 内面 大井部中央一定方向のナダ、他は回転ナダ。	色調 青灰色(外側) 淡灰褐色(内面) 胎土 白、灰色の小砂礫を散見する。 焼成 良好堅緻。 ロクロ剥離有り。
44	蓋杯(蓋)	口 径 13.0 底 径 12.4  A - 1区 包含層	口縁部は短く外反した後、ゆるやかに内窓し、端部付近で外方向に削く。口縁部はやや内傾し、水平面を作ると、横は短く丸い。天井部は高く平らである。	外面 天井部は横端より0.4cm以上は回転ヘラケズリ。 内面 天井部は不定方向ナダ。他は回転ナダ。	色調 青灰色 胎土 白、0.1~0.2mmの白色の砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 ロクロ剥離有り。
45	瓶(蓋)	口 径 12.4 底 径 12.0  A - 1区 包含層	口縁部は短く外反して下った後、小さく外反して終わる端部へ至る。口縁部はやや内傾し、凹面を作ると、横は短く丸い。口縁部との間に小さな凹面を作る。	外面 天井部は横端より0.5cm以上は回転ヘラケズリ。他は回転ナダ。 内面 回転ナダ。	色調 暗灰色 胎土 灰、0.1~0.2mmの白色の砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。 ロクロ剥離有り。

番号	器皿種 山土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粘土・焼成・備考
46	蓋杯(蓋)	口 径 12.6 底 径 12.6 高さ 4.4	口縁部は短く外傾した後、垂直に下って底部付近の口縁部は内傾して平面を呈する。底は厚かくて強く、口縁部との境には凹面状を作る。天井部は比較的丸い。	外面 天井部は接端より 1.4 cm以上は回転ヘラケズリ。他の回転ナデ。 内面 天井部一定方向のナデ。他の回転ナデ。	色調 青灰色 粘土 黄、白色の小砂礫を散見する。 焼成 良好堅緻 クロ回転左回り。
A-1区 包含層					
47	蓋杯(蓋)	口 径 12.0 底 径 11.8	口縁部は短く外傾した後、垂直に下り、底部付近でわずかに外反する。口縁部は内傾する凹面を作る。底は厚かくて強く、口縁部との境には凹面状の凹みを作る。	外面 天井部は接端より 1.5 cm以上は回転ヘラケズリ。他の回転ナデ。 内面 天井部一定方向のナデ。他の回転ナデ。	色調 淡灰色 粘土 粗、1~3mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好堅緻 クロ回転左回り。 外腹端以下に緑色の斑点やわずかに付着。
A-2区 包含層					
48	蓋杯(蓋)	口 径 11.2 底 径 10.7	口縁部は短く外傾して下った後、すぐに外反して底部に至る。底は厚かくて強く、口縁部との境には凹面状の凹みを作る。	外面 天井部は接端より 1.3 cm以上は回転ヘラケズリ。他の回転ナデ。 内面 回転ナデ。	色調 青灰色 粘土 粗、6.1~3mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好堅緻 クロ回転左回り。
包含層					
49	蓋杯(蓋)	口 径 12.4 底 径 12.1 高さ 4.9	口縁部は短く外傾した後、外反して底部に至る。口縁部は内傾して底を有する。底は厚かくて深い。天井部は比較的丸い。	外面 天井部は接端より 1.2 cm以上は回転ヘラケズリ。天井部は回転カキ目。他の回転ナデ。 内面 回転ナデ。	色調 青灰色 粘土 黄、白色の小砂礫を散見する。 焼成 良好堅緻 クロ回転右回り。
A-2区 包含層					
50	蓋杯(蓋)	口 径 32.1 底 径 31.8 高さ 4.7	口縁部は短く外反して平底に下った後、小さく 2 度外反して底部に至る。底は厚かくて丸い。天井部は比較的丸い。	外面 天井部は接端より 0.7 cm以上は回転ヘラケズリ。他の回転ナデ。 内面 回転ナデ。	色調 青灰色 粘土 やや密、0.1~0.2mmの白色の砂粒を含む。 焼成 良好堅緻 クロ回転右回り。 天井部外腹灰かぶり。
A-2区 包含層					
51	蓋杯(蓋)	口 径 12.2 底 径 12.6 高さ 4.8	口縁部は短く外傾した後、垂直に下り、底部付近でわずかに外反する。底は厚かくて強く、口縁部との境には凹面状の凹みを作る。天井部は比較的丸い。	外面 天井部は接端より 1.5 cm以上は回転ヘラケズリ。他の回転ナデ。 内面 回転ナデ。	色調 青灰色 粘土 やや密、小砂粒を散見する。 焼成 良好堅緻 クロ回転左回り。 黑色粒の堆出あり。
包含層					
52	蓋杯(身)	口 径 13.5 受部径 13.5 高さ 4.8	口縁部は内傾して立ちあがり、中半でふくらみをもち、底部付近で小さく内凹する。口縁部は内傾する凹面を有する。受部は外上方へのび、底部は丸い。	外面 底部は受部端より 1.9 cm以下は回転ヘラケズリ。他の回転ナデ。 内面 天井部不整方向ナデ。他の回転ナデ。	色調 青白色 粘土 やや密、0.1~2mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好堅緻 クロ回転左回り。
包含層					
53	蓋杯(身)	口 径 11.1 受部径 13.5	口縁部は内傾して立ちあがり上る。口縁部は内傾して投石を有する。受部は外上方へのび、立ちあがりとの境に北縁を有し、底部は丸い。	外面 底部は受部端より 1.6 cm以下は回転ヘラケズリ。他の回転ナデ。 内面 回転ナデ。	色調 青灰色 粘土 密 焼成 良好堅緻 クロ回転左回り。
包含層					

番号	器種	出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土・焼成・備考
54	盃杯(身)	A-1区 包含層	口 径 10.6 受部径 13.0 基 高 4.8	口縁部は内傾した後、縁部からぐで率直にのびる。口縁端部は内傾する所を有する。受部は外上方へのび、端部は丸い。底部は深く、中央は平らである。	外面 底部は受部端より 1.6 cm 以下 は回転ヘラケズリ。他は回転ナダ。 内面 回転ナダ。	色調 緑青灰色 胎土 やや密、0.1~1mmの白色砂粒含む。 焼成 良好堅緻 ロクロ回転左回り。 受部上面に薄く所々あり。 外底面に「-」のへら記号。
55	盃杯(身)	A-1区 包含層	口 径 11.8 受部径 13.2 基 高 4.9	口縁部はほぼ直立してのびる。口縁端部は内傾して段を有する。受部はたちあがりとの境に沈穂を有し、外上方へのびる。底部は深く、中央は平らである。	外面 装部は受部端より 2.0 cm 以下 は回転ヘラケズリ。他は回転ナダ。 内面 底部不定方向ナダ。他は回転ナダ。	色調 白灰色 胎土 密、0.1~3mmの白色砂粒含む。 焼成 不良、甘く軟質。 ロクロ回転左回り。
56	盃杯(身)	A-3区 包含層	口 径 11.9 受部径 12.2	口縁部は内傾した後、直立ぎみにのびる。口縁端部は内傾して段を有する。受部は外上方にのび、縁部はやや低い。	外面 底部は受部端より 1.6 cm 以下 は回転ヘラケズリ。他は回転ナダ。 内面 回転ナダ。	色調 深黒色 胎土 密、0.1~3mmの白色砂粒含む。 焼成 良好堅緻 ロクロ回転右回り。
57	盃杯(身)	A-1区 包含層	口 径 10.1 受部径 12.2 基 高 4.5	口縁部は高く、内傾した後端部付近で内窪する。口縁端部は内傾し、段を有する。受部は外上方へのび、端部はやや丸い。底部は比較的深く平らである。	外面 底部回転ヘラケズリ。他は 回転ナダ。 内面 回転ナダ。	色調 暗青灰色 胎土 やや密、0.1~1mmの白色砂粒含む。 焼成 良好堅緻 ロクロ回転左回り。
58	盃杯(身)	A-2区 包含層	口 径 10.0 受部径 11.6	口縁部は内傾して高くなる。口縁端部は内傾して段を有する。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。	外面 底部は受部端より 1.2 cm 以下 は静止ヘラケズリ。底部ナダ。 他は回転ナダ。 内面 回転ナダ。	色調 青灰色 胎土 やや密、0.1~3mmの白色砂粒含む。 焼成 良好堅緻 ロクロ回転左回り。
59	盃杯(身)	包含層	口 径 10.0	口縁部は内傾した後、ゆるやかに外反して立ち上がり、端部は丸い。受部は深く水平にのび、底部は深く、断面三角形を呈する。	外面 底部は受部端より 0.6 cm 以下 は静止ヘラケズリの後不定方向ナダ。他は回転ナダ。 内面 回転ナダ。	色調 暗灰色(外面) 灰色(内面) 胎土 密 焼成 良好堅緻 ロクロ回転不規則。 内面底部緑灰色の自然釉
60	盃杯(身)	包含層	口 径 14.6 受部径 17.7	口縁部は強く内傾して立ち上がり、縁部付近で小さく内窪し、端部は丸く終わる。受部はほぼ水平にのび、端部はやや高い。底部は平らである。	外面 底部は受部端より 0.6 cm 以下 は静止ヘラケズリ。底部ナダ。 他は回転ナダ。 内面 回転ナダ。	色調 暗灰色。底部赤茶色 胎土 密 焼成 良好堅緻
61	盃杯(蓋)	SD 2	口 径 11.7 後 径 11.4 基 高 5.2 縁部高 2.9 つまみ径 0.9 つまみ高 0.9	口縁部は丸く外腹した後、縁部がみにドリップ部に並ぶ。口縁端部は強く内傾して凹面を作る。縁は丸くつまみ、口縁部との境に凹面を作る。天井部中央には、外反して立ち上がる中央上面に凹みを有する。	外面 天井部は後退より 1.0 cm 以上 は回転ヘラケズリ。つまみは 取り付けた箇所ナダ。他は回転ナダ。 内面 天井部は回転ナダの後、一定方 向のナダ。他は回転ナダ。	色調 暗灰色 胎土 密、小砂礫を散見する。 焼成 良好堅緻 ロクロ回転右回り。

番号	器 出上位置	法 量(cm)	形 態の 特 徴	手 法の 特 徴	色調・粘土・成形・備考
62	高杯(蓋) A-3区 包含層	口 径 12.9 深 度 12.7 器 高 5.9 つまみ径 3.6 つまみ高 1.1	口縁部はやや外傾して下り、中位で外反して端部に至る。口縁端部は内傾して段を有する。縫は丸く、やや丸い。天井部中央には、比較的大きく外反して中央上面に凹みを有するつまみを有する。	外面 天井部は後端より1.9cm以上は削鉛ヘラケズリ、つまみは貼り付けの後ナダ。他は圓軸ナダ。 内面 圓軸ナダ。	色調 淡灰褐色(外面) 青灰色(内面) 粘土 粘土、0.1~0.2mmの小砂粒を多量に含む。 成形 良好厚壁。 ロクロ圓軸が鋭り。
63	有蓋高杯 A-2区 包含層	口 径 10.3 受部径 12.2 縫部径 8.0 脚部高 4.3 器 高 9.8	口縁部は内傾した後、垂直に並ぶ。口縁端部は内傾して段を有する。縫は丸く、天井部は下方に不安定な形で底に張り付いています。縫部は丸く、下方に張り付けています。縫部は丸く、下方へ外反して張り立つ形で縫部に至る。縫部に凸形のスカシを三方に穿つ。	外面 受部端より2.4cm以下は削鉛ヘラケズリ、一部に圓軸カキ目。脚部下牛眼輪カキ目。他は圓軸ナダ。 内面 圓軸ナダ。	色調 青灰色 粘土 粘土、0.1~0.2mmの小砂粒を多量に含む。 成形 良好厚壁。 ロクロ圓軸右回り。 杯底部にスカシ切り取りの跡のヘラ痕あり。
64	有蓋高杯 A-2区 包含層	口 径 12.3 受部径 14.9 縫部径 9.2 脚部高 5.0 器 高 8.8	口縁部はやや外傾した後、内傾して受部端に至る。口縁端部は内凹し、急角、常に内凹する段を有する。縫部は丸く、下方へ外反して張り立つ形で縫部に至る。縫部に複数の凸形のスカシを三方に穿つ。	外面 受部端より2.1cm以下は削鉛カキ目。縫部上半部圓軸カキ目。他は圓軸ナダ。 内面 圓軸ナダ。	色調 青灰色。 粘土 やや密、0.1~0.2mmの小砂粒を多量に含む。 成形 良好厚壁。 ロクロ圓軸右回り。 杯底部にスカシ切り取りの跡のヘラ痕あり。
65	有蓋高杯 A-2区 包含層	口 径 12.3 受部径 14.0 縫部径 9.4 脚部高 5.7 器 高 10.7	口縁部は内傾して高くなるのがいる。口縁端部は水平に中央が凹む。受部は丸く、縫部は丸く、底は深く平らである。脚部は基部が太く外反して下り、斜上方に凸出した後外反して縫部に至る。縫部は丸く、脚部は丸く、縫部に1.1cmの円孔を入れて三方に穿つ。	外面 受部端より1.6cm以下は削鉛ヘラケズリ後圓軸ナダ。他は削鉛ナダ。 内面 圓軸ナダ。	色調 青灰色 粘土 粘土 成形 良好厚壁。 ロクロ圓軸不明。
66	無蓋高杯 A-1区 包含層	口 径 15.8	口縁部は長く外傾しながら立ち上がり、縫部付近で外反して縫部に至る。口縁端部は丸い。底部は円柱状を有し、内側にして立ち上がり、中位には2条の凸縫部を有している。凸縫部の下方には底状の凹窓が開かれているが、全体に底かぶりを受けているため、縫部の単位は不明である。脚部三方にスカシを穿つ。	外面 全体に底かぶりを受け、調整不明。 内面 圓軸ナダ。	色調 青灰色 粘土 やや密 成形 良好厚壁。 ロクロ圓軸不明。 杯部外底面に暗緑色の自然物が沿る。
67	無蓋高杯 包含層	口 径 17.8	口縁部は長く外反しながら立ち上がり、縫部は丸く、底を欠損するが、内側ぎみに外傾して5cm1条の波状文を施した後、やや内側ぎみに外傾して縫部に至る。11縫部は丸く終わる。	外面 削鉛ナダ。 内面 底かぶりのため削鉛不明。	色調 黒灰色 粘土 密 成形 良好厚壁。 ロクロ圓軸不明。 内面底かぶり。
68	縫? A-2区 包含層	口 径 8.6	口縁部は斜上方に立ち上がり、2本の凸縫部の間に4cm1条の波状文を施した後、やや内側ぎみに外傾して縫部に至る。11縫部は丸く終わる。	外面 圓軸ナダ。 内面 圓軸ナダ。	色調 灰色 粘土 密 成形 良好厚壁。 ロクロ圓軸不明。
69	縫? A-2区 包含層	口 径 14.0	脚部は外反して立ち上がり、15cm1条の波状文を施した後、その上に1条の凸縫部をめぐらせて口縁部に至る。口縁部は内側して5cm1条の波状文を施した後、外反して縫を有する浦面に至る。	外面 圓軸ナダ。 内面 底かぶりのため削鉛不明。	色調 灰色 粘土 密 成形 良好厚壁。 ロクロ圓軸不明。

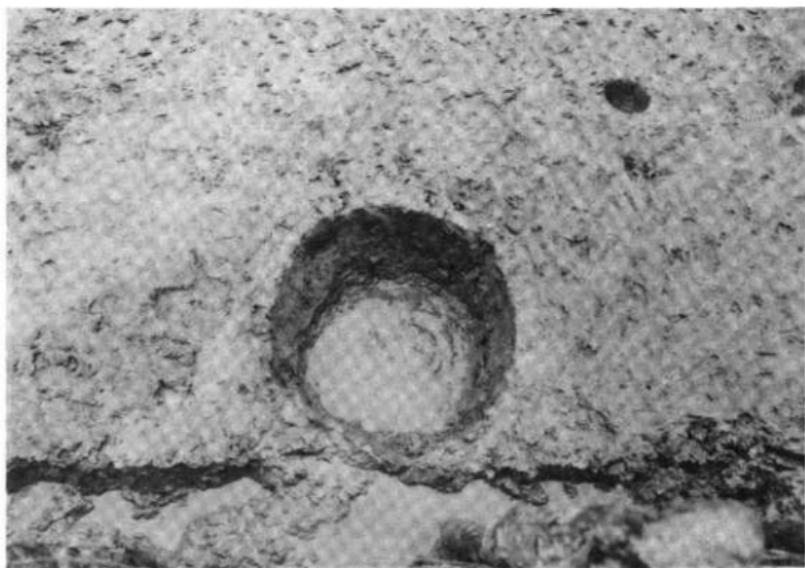
番号	基盤 出土位置	法寸(㎝)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粘土・焼成・備考
70	茎 A-2区 包含層	口徑 11.2 最大径 14.9	口部基部は口縁部より小さく外反して立ちあがる。口縁部は丸く終わる。腹部は口部基部より内寄しながら外方に張り出す。底部は尖らず、内寄さまに外傾する。	外面 口縁部回転ナダ、網筋上位回転カキ目、中位籠毛ナダ、下位回転ヘラケズリ。 内面 回転ナダ。	色調 灰色 粘土 やや密 焼成 良好堅焼 ロクロ回転底面。
71	茎 A-2区 包含層	口徑 17.5	口縁部より外傾しながら立ち上がり、腹部端で外下方に屈曲して口縫部に至る。口縫部は少し内寄した後、中位から内寄さまに立ち上がり、丸く終わる端部に至る。	網筋部に回転カキ目その後、全体を回転ナダ。 内面 回転ナダ。	色調 灰色 粘土 やや密、0.1~0.2mmの白色小砂粒を多く含む。 焼成 良好堅焼 ロクロ回転不明。
72	茎 A-2区 包含層	口徑 22.4	口部基部より外傾しながら立ち上がり、内縫部を境として上には6本1巻の波状文を施した後、大きく外反して前面に三角形の凸縫部をめぐらす。口縫部は斜上方に立ち上かった後、小さく外反して尖りぎみに終わる端部に至る。	外面 网筋部に毎方向の平行タクキ。 内面 網筋は回転ナダ。 腹部不定方向ナダ。回曲部跡はヘラケズリの後回転ナダ。	色調 灰色 粘土 やや密 焼成 良好堅焼 ロクロ回転不明。 口縫部に褐色色の自然焼、網筋灰かぶり。



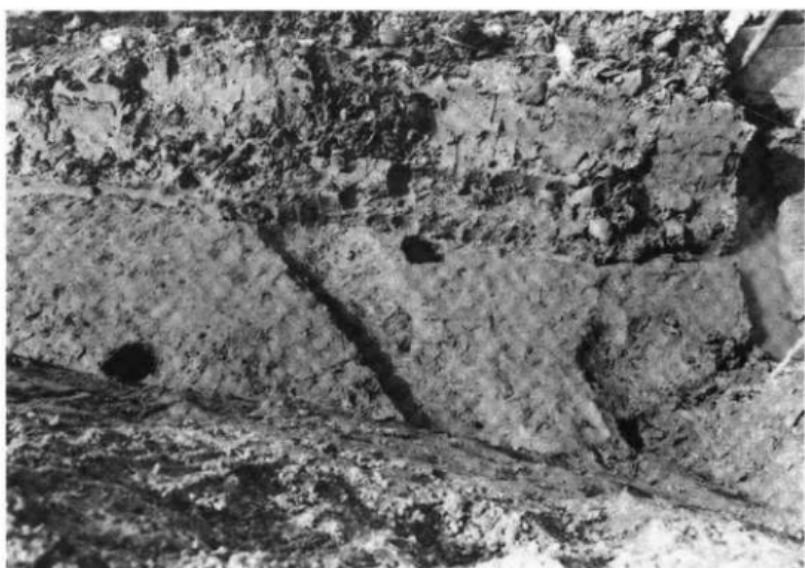
調査地全景（東より）



S P 6 柱根検出状況（西より）



S K 1 検出状況 (南より)



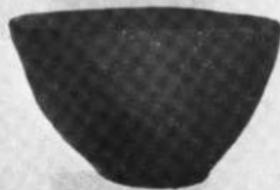
S B 1・S D 3 検出状況 (南より)



5



8



6



9



7



10



11

弥生式土器



1



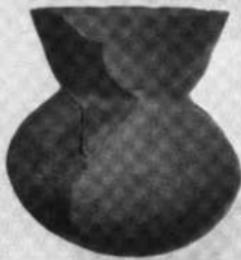
22



2



23



3



24



4

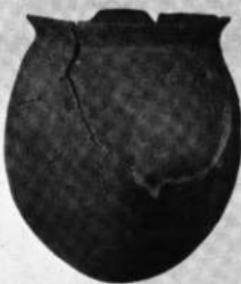


31

土師器



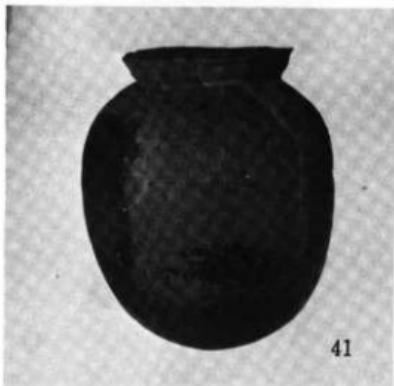
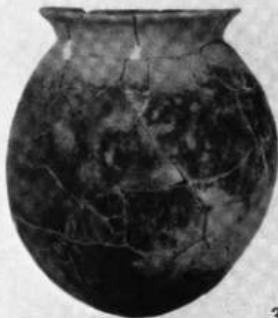
32



37

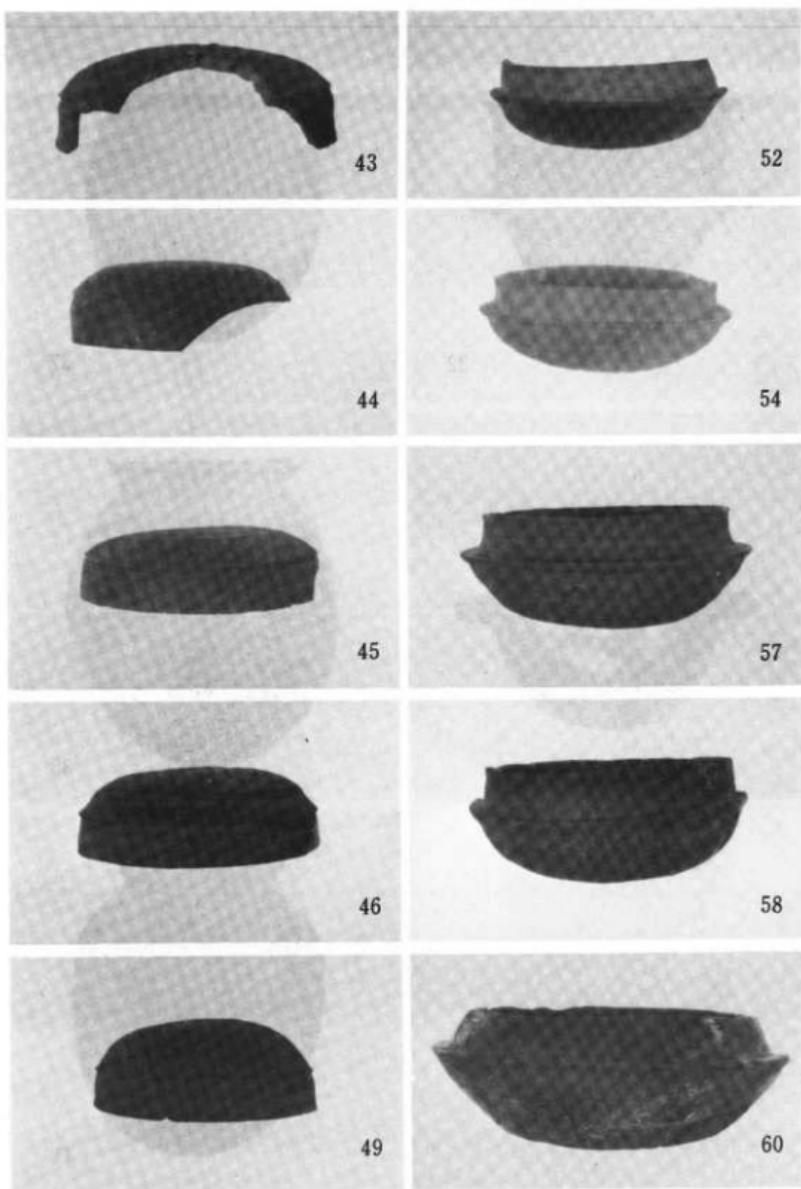


38



41

土師器



須恵器



61



67



62



71



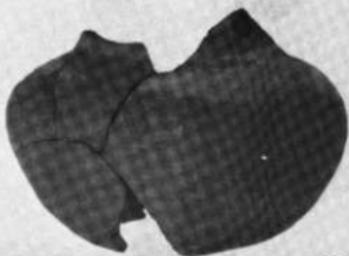
63



72

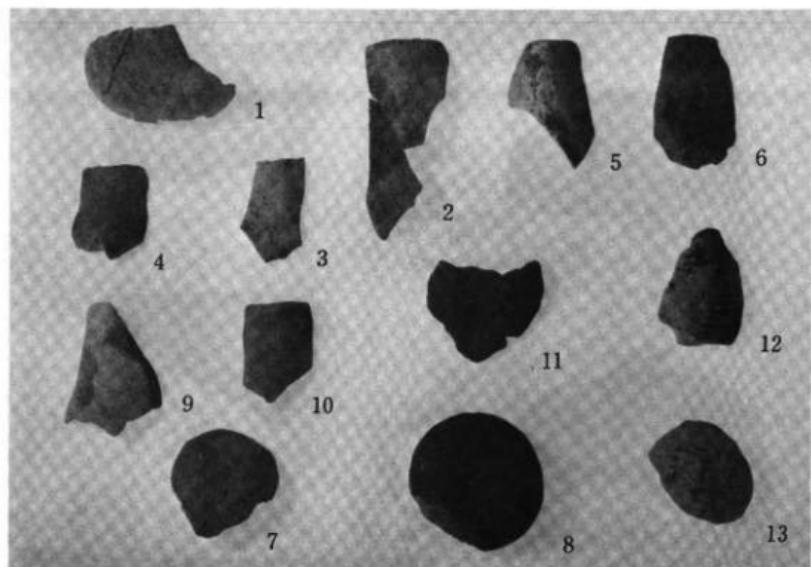


65

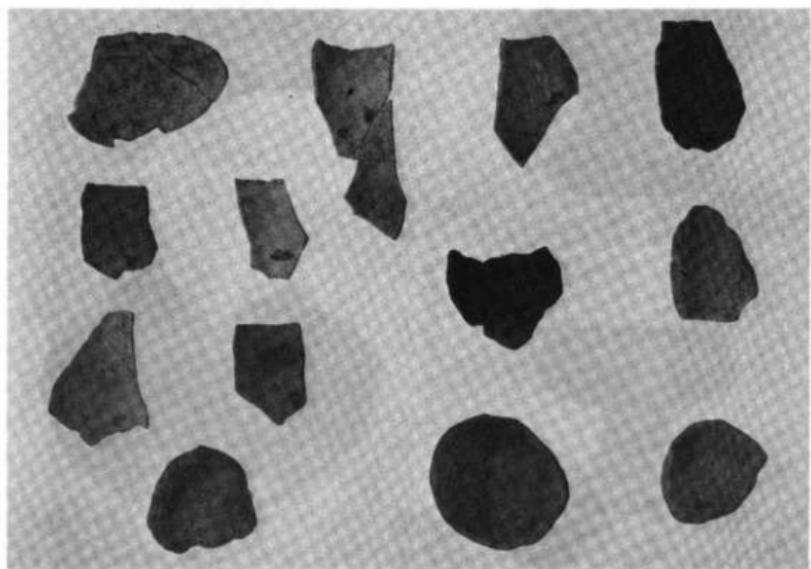


70

須惠器



製塙土器



同上 内面

## 第4章 八尾南遺跡発掘調査概要報告

## 例　　言

1. 本書は、八尾市西木の本4丁目11番地において実施した、防衛庁宿舎建設工事に伴なう発掘調査の概要報告である。
1. 発掘調査は、昭和56年6月3日から7月11日にかけて実施した。
1. 発掘調査は、八尾市教育委員会文化財室が行ない、米田敏幸・原田昌則が現地を担当した。なお、調査にあたっては中野慶太・野田雅彦・竹花田建設の協力があった。
1. 本書作成にあたっては、上記担当者のほか成海佳子・池田まゆみ(遺物実測・トレース)があたり、執筆はI・IIを米田敏幸、IIIは成海佳子が担当した。

## 本　文　目　次

I 調査の目的と経過 .....	111
II 調査の概要 .....	113
1) 異序と年代 .....	113
2) 平安時代埋没水田址の調査 .....	113
3) 古墳時代遺構面の調査 .....	115
III 出土遺物観察表 .....	120

## 挿図目次

図1	調査地周辺図	111
図2	トレント設定図	112
図3	土層模式図	113
図4	水田上面出土遺物実測図	114
図5	SK1 平断面図	115
図6	SK1 出土須恵器実測図	116
図7	平面図(折込)	117~118
図8	SK1 出土七輪器実測図	119

## 図版目次

図版1	調査地全景 古墳時代遺構面	図版3 水田全図 水田拡張図
図版2	土地遺物出土状況 同上 完報	図版4 土墳出土遺物

## 第4章 八尾南遺跡（西木の本4丁目11番地）

### I 調査の目的と経過

八尾南遺跡は八尾市木の本・西木の本・若林町に所在する縄文時代から鎌倉時代に至る複合集落遺跡であり、昭和53年—54年にに行なわれた地下鉄谷町線建設に伴なう事前発掘調査により、古墳時代を中心とする数多くの遺構群が検出され、当遺跡が河内古代史を復元する上で重要な位置を占めていることが明らかとなった。

西木の本4丁目はこの八尾南遺跡の北辺部にあたり、昭和55年度の八尾南遺跡範囲確認調査で、この地点に平安時代の水田址および古墳時代の遺物包含層が存在することが確かめられていた。ところが、西木の本4丁目の旧陸軍省兵舎跡地に防衛庁防衛施設局より、昭和56年度に自衛隊八尾駐屯地の宿舎の建設を計画したいとの申し出があり、この旨が文化庁長官に通知された。これによって文化庁・大阪府教育委員会・八尾市教育委員会は予想される地下遺構の保存について防衛庁と再三にわたる協議を行なった結果、宿舎建設に先立って事前に記録保存を行なうことを決定した。八尾市教育委員会は昭和56年7月3日より、約1ヶ月半にわたる発掘調査を施行した。



図1 調査地周辺図

発掘調査は、基礎工事によって遺構の破壊が予想されている宿舎建設予定地を対象として行なった。調査地は西木の本4丁目11番地で、昭和55年度範囲確認調査で発掘を行なった第4調査区の北に隣接する土地である。したがって、あらかじめ地下2.0mに平安時代の水田遺構、地下2.4mに古墳時代の遺物包含層が埋没していることが判明していた。そのため、建物予定地を中心幅8m・長さ54mの東西に長いトレンチを設定し、平安時代水田遺構上面に被る乳褐色砂層直上までの約1.7mを機械掘削、以下は手振りによる精査を行なった。

調査は2度の工程に分けて実施した。まず、第1工程では平安時代埋没水田址の検出を行ない、当時の水田区画および水田面の状況を確認することを目的としてトレンチ上面より垂直に掘り下げて調査を行なった。第2工程は平安時代水田の調査終了後約40cm下の古墳時代の遺物包含層を掘り下げ、古墳時代の遺構の有無の確認を目的としたが、掘り下げによりかなりの出水とトレンチ壁面の崩壊が予想されたため、第1調査面に幅1mの段を残して幅5m・長さ50mのトレンチによって第2調査面までの掘り下げを行なった。また、調査途中で昭和55年度

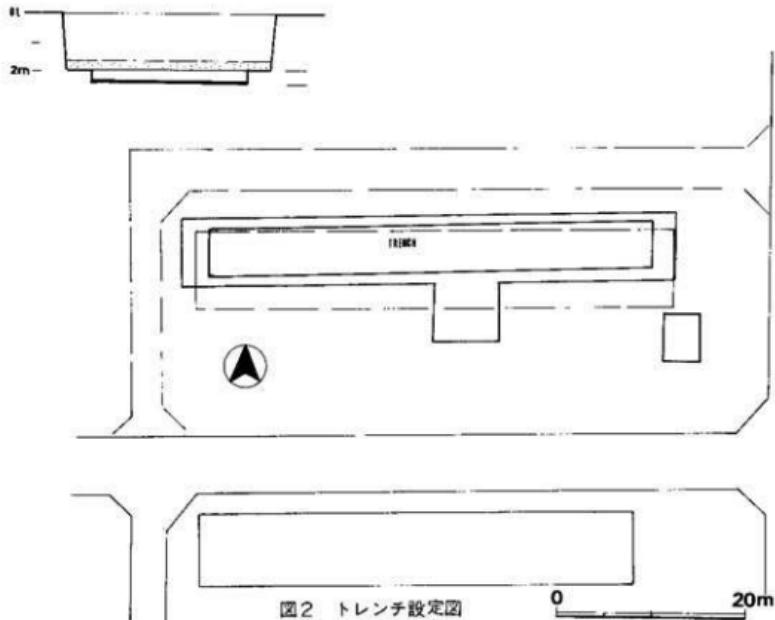


図2 トレンチ設定図

調査区との関連を確認する必要が生じたため、トレント中央部分を南へ6m拡張した。これら全工程終了までに約1ヶ月半、のべ33日を要した。調査の記録は、各工程終了のつど写真撮影を行ない、実測図を作成した。

## II 調査の概要

### 1) 層序と年代

当調査地区の層序は基本的に8層に分けることができる。

地表下100cmまでは第1層の盛土で第2層は近年まで耕作されていた厚さ20cmの旧耕土である。第3層灰緑色砂質土は厚さ15cm、第4層灰色砂質土は厚さ16cmで両者はほとんど同質の状況で旧水田の床となっている。

第5層は灰色粘土で厚さ12cm、第6層は灰色粘砂で厚さ24cm、遺物はほとんど含まれていない。

第7層淡灰色砂は平安時代埋没水田の上に被っており、洪水により一挙に堆積した状況を示している。この層中には同時代の土器の細片が含まれている。この層の厚さは西側が14cm、東側で28cmである。

第8層暗灰色粘土は平安時代埋没水田址の耕作土である。この上面に水田畦畔や足跡などの遺構が残存している。厚さは西側で40cm、東側で50cmとなっている。粘性はかなり高い。

第9層黒灰色砂粘土は約10cmと薄く、古墳時代中期の包含層であり、土師器片や須恵器片を含んでいる。包含状況は中央付近が最も多く、東側では希薄である。第10層乳灰色砂質土は古墳時代遺構のベースであり、この層の上面より溝や土塹などが掘り込まれている。

### 2) 平安時代埋没水田址の調査

水田面に被る淡灰色砂層は微砂・細砂・粗砂が入り混じっており、これらを注意深く取り除

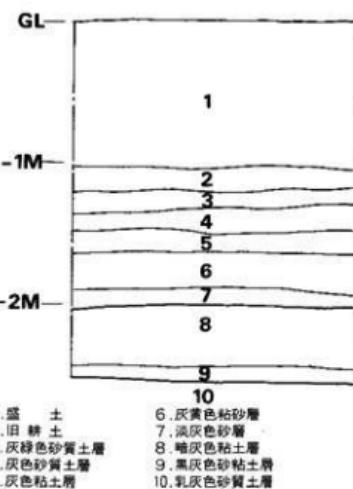


図3 土層柱状図

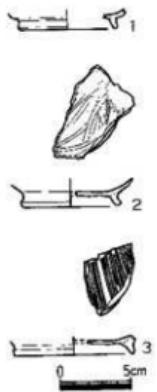


図4 水田上面出土遺物実測図

くと、畦畔や足跡をはじめとする水田遺構を検出することができた。この調査によって検出した畦畔は4本、水田の枚数は6枚である。この他、水口・落ち込み状遺構・流水路などがある。水田の標高はO.P. +9.50～9.60cmである。この水田は、水田直上に被る淡灰色砂層から出土した黒色土器など(図4)により、平安時代に埋没したことが判る。

#### 1. 畦畔

##### 1号畦畔

昭和55年度に実施した八幡南遺跡範囲確認調査で検出した畦畔で、当調査地区東部の南側を東西方向にのびる。トレンチ南側拡張区で、この畦畔の西端部分を検出した。幅40cm・高さ16cm・長さ26.5m以上を測る。西端は2号畦畔とT字形に接続するが、その手前約150cmにわたって途切れしており、水口になっている。この部分は南北方向の流路状遺構が存在するためにあけられたものと考えられる。なお、昭和55年度の調査で東側にも水口が存在することが判っている。

##### 2号畦畔

調査区の中央東側を南北方向にのびる畦畔で、幅40～90cm・高さ27cm・長さ13m以上を測る。畦畔には、流水による凹凸がみられる。拡張区で東よりのびる1号畦畔と接続するが、接続点の南側で40cmにわたって途切れおり、水口になるものかと思われる。

##### 3号畦畔

調査区の中央西側を南北方向にのびる畦畔で、幅30～70cm・高さ30cm・長さ7.5m以上を測る。この畦畔は中間で4号畦畔と接続するが、接続点の北側50cmにわたって途切れ、水口になる。また、接続点の南と北で食い違いになっており、この畦畔が直線的にのびていないことを示す。

##### 4号畦畔

3号畦畔の3m東より東西にのび、西は調査区外へ至る。幅30～80cm・高さ18cm以上、長さ21.5m以上を測る。畦畔は崩壊が著しく、田状をほとんどとどめていない。

#### 2. 水田面

##### 水田A

1号畦畔と2号畦畔に区画された南側の水田で、昭和55年度の調査ではこの水田の北東側の一部を検出しているが、今回は南西側の一部を検出した。部分的な検出のため、規模等は不明

であるが、水田面には多数の足跡が残存している。

#### 水田面B

1号畦畔と2号畦畔にX画された南側の水田で、トレンチの西半部26.5mの間はこの区画の中にはいる。この水田面上には、西側の一部を除いて足跡は概して少ない。

#### 水田面C

2号畦畔と3号畦畔に挟まれた東西11mの区画で、水田面のレベルは他の水田のレベルより低く、流水を被った形跡が強くみられ、粗砂が水田面上に厚く堆積する。

#### 水田面D

3号畦畔と4号畦畔にX画された南側の水田で、足跡は点在する程度である。

#### 水田面E

3号畦畔と4号畦畔にX画された北側の水田で、南東側の4号畦畔に沿って径90cm・深さ16cmのogni状の遺構が存在し、ここにも砂の堆積がみられた。足跡は調査区西側に点在する。

#### 3) 古墳時代遺構面の調査

水田耕作上下には厚さ5~10cmの黒灰色粘砂層がみられ、古墳時代の遺物包含層になっている。この層を取り払うと古墳時代の土塙や溝などの遺構群を検出できた。

#### SK1

長径160cm・短径110cm・深さ40cmの長円形を呈する土塙で、乳灰色砂質土に切り込んでいるため、漏水が著しい。この土塙上層の暗灰色粘土および濃灰色粘土内からは、多数の土器が一括出土した。

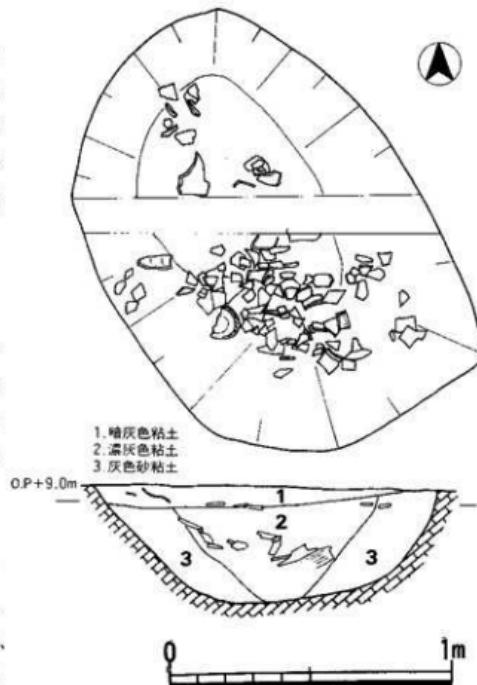


図5 SK1 平断面図

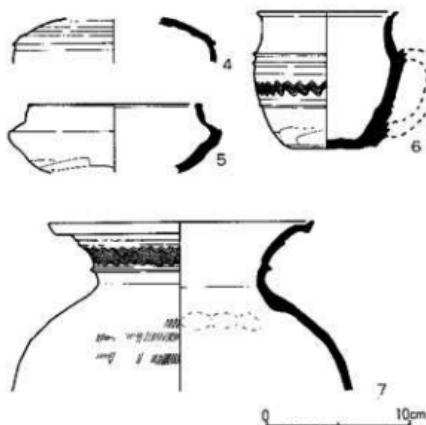


図6 SK1出土須恵器実測図

器種には須恵器蓋杯(4・5)、把手付椀(6)、土師器平底鉢(9・10)・高杯(11・12)・甕(13~16)などがある。

これらは同時性の高い一括遺物で、須恵器の形態から、陶邑編年によるI型式2段階の時期に比定できる資料である。特に土師器甕<sup>①</sup>には長胴化の傾向が著しく、縱方向に行なう粗いハケ目は土師器平底とともに特徴的である。

このことは、八尾南遺跡S E 1・S E 2・S E 5・S E 27出土の資料に後出する資料として興味深い<sup>②</sup>特徴を示しているといえよう。

#### (注記)

- 大阪府教育委員会『陶邑III』大阪府文化財調査報告書30號 1978年
- 八尾南遺跡調査会『八尾南遺跡』大阪市高速電気軌道2号線建設に伴なう発掘調査報告書 1981年

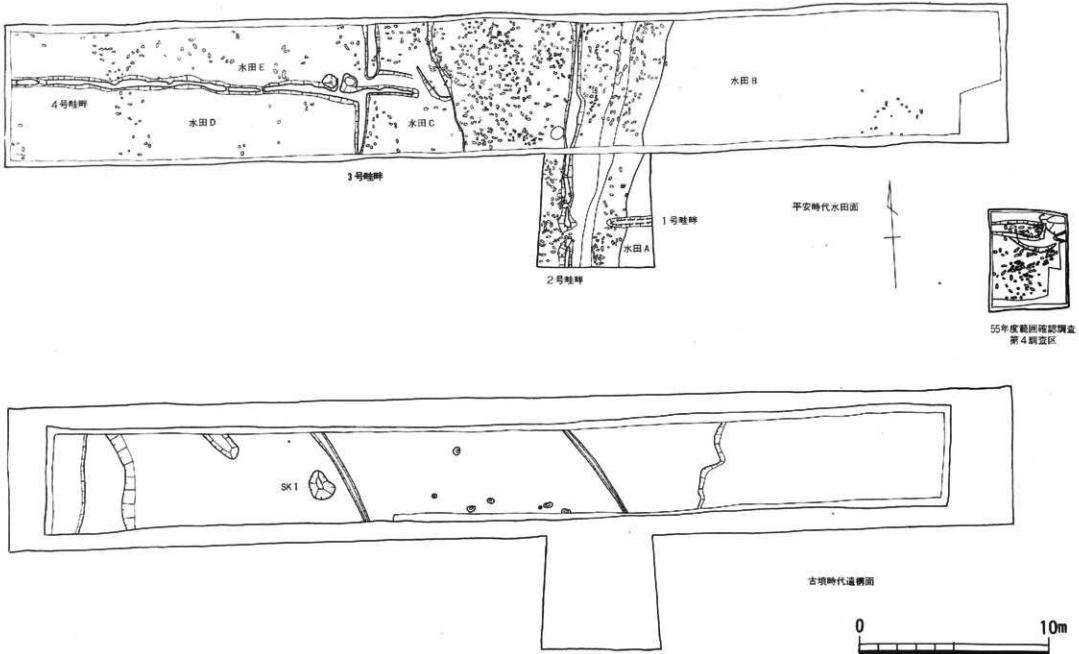


図7 平面図

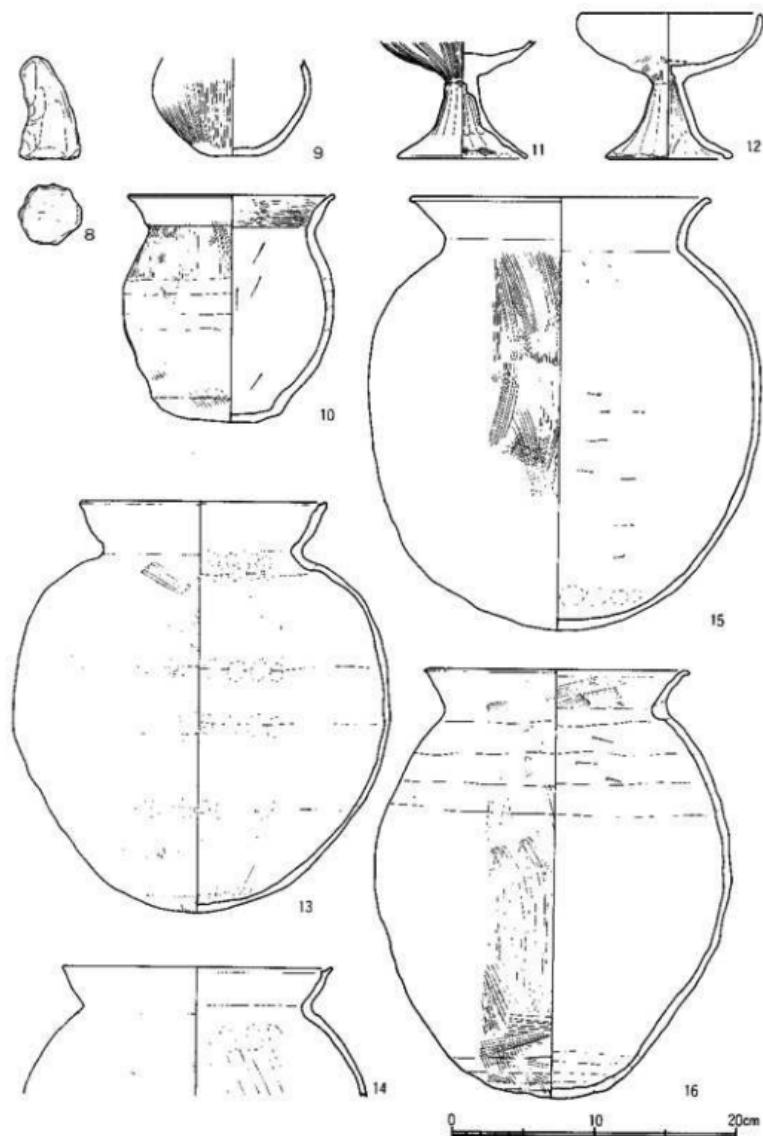


図8 SK1出土土師器物実測図

### III 出土遺物観察表

#### 1) 中世遺物

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粘土・地成・備考
1	土師質碗 高台裡	6.8	高台部は「へ」の字形に聞く。高台端部は丸く終る。	高台部内外面ヨコナナ子調整、内底面ナナ子。	色調 乳白色 粘土 良好 地成 無
	水田上層				
2	黑色上器碗 高台裡	6.6	重要な高台で「へ」の字形に聞き端部に渠る。高台端部は外側に凹窓が行なわれていて、やや尖り気味で終る。内底面は水平面を作る。	体部外側及び高台裡内外面ナナ子。底部外側は指廻り成形後ナナ子。体部内面へラミガキ。	色調 黒色(内)茶褐色(外) 粘土 良好 地成 良好 Aタイプ
	水田上層				
3	黑色土器碗 高台裡	8.2	高台部は、高くほぼ平齊に貼り付けられている。高台端部はわずかに内傾し、下面を作る。	高内部内外面ナナ子調整。底部内面は細かいラミガキ調整。	色調 黒色(内)茶褐色(外) 粘土 良好。小砂粒を散見する。 地成 良好 Aタイプ
	水田上層				

#### 2) 須恵器

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・粘土・地成・備考
4	蓋杯(蓋)	受部裡 14.2	口縁部は堅く外反した後、ゆるやかに内弯して下る。口縁部と底との境に凹面を作る。	外面 天井部は底部端より0.6cm以上に回転ヘラケタリ成型。他の回転ナナ子調整。 内面 天井部は回転ナナ子調整。	色調 青灰色 粘土 粘土 0.1~0.2mmの白色砂粒を含む。 地成 良好無鉛 ロクロ回転左回り。
	SK1				
5	蓋杯(身)	受部裡 15.2	口縁部は受部端から陥く内傾した後、内斜上方に弧曲し底部に至る。口縁端部は水平な面を有する。 受部は、ほぼ水平で外方向に尖出しない。	外面 天井部は受部端より2cm以下静止ヘラケタリ調整。他の回転ナナ子。 内面 天井部は回転ナナ子調整。	色調 青灰色 粘土 粘土 良好無鉛
	SK1				
6	把手付碗 口 従 身 高	9.8 9.7	口縁部はゆるやかに外反して立ち上がり、頂部上位と下位に凸縦帯を作り口縁部に至る。 口縁部はやや内弯気味に外傾し、丸く終る溝部に至る。凸縦帯の間には10本1条の強状文を施す。 底部下位は内弯気味に下平底の底部に至る。底部上位と下位に把手の貼り付け痕がある。	外面 天井部は体部下半ナナ子調整、底部は指廻り成形の後ナナ子、他の回転ナナ子調整。 内面 天井部は四軸ナナ子調整、内底面はナナ子調整。	色調 青灰色 粘土 やや密、小砂粒を散見する。 地成 良好無鉛 ロクロ回転左回り。
	SK1				
7	碗	口 従 18.6	口縁部より外反し立ち上がり、頂部上位と下位に凸縦帯を作り口縁部に至る。 口縁部はやや内弯気味に外傾し、丸く終る溝部に至る。凸縦帯の間には10本1条の強状文を施す。 肩部は外傾した後、内弯して掠がり肩部に至る。	外面 天井部は口縁部が回転ナナ子調整、肩部は平行クタキの後、回転ナナ子調整。 内面 天井部は肩部が指廻り成形後、回転ナナ子調整。	色調 黒灰色(口縁部) 青灰色 粘土 粘土 0.1~0.2mmの白色砂粒を含む。 地成 良好無鉛 肩部、側部の一部に灰かぶり。
	SK1				

## 3) 土師器

番号	器種 出土位置	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調、胎土、焼成、備考
9	鉢	最大径 11.2	球形に近い体部下位のみ道存。底部はわずかに平坦な面をもつ。	外底 極方向ハケ。 内面 ヘラナデ。	色調 乳白色 胎土 やや不良 焼成 良好 内外面上位に爆付着。
	SK 1				
10	平底鉢	口 径 14.3 最大径 14.8 基 高 16.3	上外方へ外反する口縁部。口縁部は薄くなり、外へつまむ。体部は中位に最大径をもつが、張りは少ない。底部はやえんみをもつ平底。	外底 板方向長いハケの後口縁部ヨコナデ。体部下半ナデ。 内面 口縁部横方向ハケ。体部ヘラナデ。	色調 淡灰褐色 胎土 精良、チャート、石灰多く含む。 焼成 良
	SK 1				
11	高杯	口径 8.8	比較的平坦な杯縁部を持つが、口縁部を欠損する。脚部はゆるやかに開く柱状部からわざわざに開き、柱状部では底がる構造とからなる。柱状部は薄くなり、丸味のある曲となる。	外底 杯部放射状ハケ。柱状部ヘラナデ。脚部ヨコナデであろう。 内面 材部ナデ。柱状部しばり目。脚部粗粒ナデの後ハケ。	色調 乳黄色 胎土 精良、長石の粗粒多く含む。 焼成 良好
	SK 1				
12	高杯	口 径 12.5 基 高 10.3	浅い半球形を呈する杯部。口縁部は丸味を持つが、口縁部を欠損する。脚部は柱状部と脚部の境を持たず、ゆるやかに広がる。底邊部近くでは若干内凹し、脚部は水平な面をつくす。	外底 杯部放射状ハケ。口縁部ヨコナデ。柱状部ヘラナデ。脚部ヨコナデであろう。 内面 材部ナデ。口縁部ヨコナデ。柱状部しばり目。脚部ナデ。	色調 淡灰褐色 胎土 精良 焼成 良 表面の表層著しい。
	SK 1				
13	甕	口 径 17.1 最大径 26.5 基 高 29.2	内にゆるい棱を持ち、上外方へ内凹して伸びる口縁部。口縁部は外へ肥厚し、内側する平底をもす。体部は中位に斜方向を持ち、肩の張る扁平な倒卵形を呈す。	外底 口縁部ヨコナデ。体部斜方向長いハケ。複合部ユビナデ。 内面 口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリの後ユビナデ。複合部ユビナデ。	色調 淡灰褐色 胎土 やや粗く、長石・石英、チャート等多く含む。 焼成 良 外面中位に爆付着。
	SK 1				
14	甕	口 径 18.9	内にゆるい棱を持ち、上外方へ内凹ぎみに伸びる口縁部。口縁部は内側する凹面を成す。	外底 口縁部ヨコナデ。体部斜方向長いハケ。 内面 口縁部ヨコナデ。体部ユビナデ。	色調 淡灰褐色 胎土 やや粗く、長石・石英、チャート等多く含む。 焼成 良
	SK 1				
15	甕	口 径 20.4 最大径 27.4 基 高 30.6	内にゆるい棱を持ち、斜上方へ外反する口縁部。口縁部は外へ肥厚し、外傾する平底を成す。体部は上位から下位まで強く張る長卵形である。	外底 口縁部ヨコナデ。体部上半側方向長いハケ。下キナデ。 内面 口縁部ヨコナデ。体部側方向ヘラケズリ(左一右)の後上半をナデ。底部には粗粒压痕が顯著に残る。	色調 淡灰褐色 胎土 やや粗く、長石・石英、チャート等多く含む。 焼成 良 外面中位に爆付着。
	SK 1				
16	甕	口 径 18.0 最大径 25.0 基 高 30.4	内にゆるい棱を持ち、斜上方へ外反する口縁部。口縁部は外へ肥厚し、丸く終わる。体部は張りの小さい長卵形を呈す。	外底 粗いハケの後口縁部、肩部的一部分をヨコナデ。 内面 口縁部横方向ハケの後底部ヨコナデ。体部ヘラケズリの後上半ヘラナデ。下キユビナデ。底部に明瞭な指痕压痕。	色調 淡灰褐色～乳白色 胎土 やや粗く、チャート多く含む。 焼成 やや不良 外面中位に爆付着。接合部明確にみられる。
	SK 1				





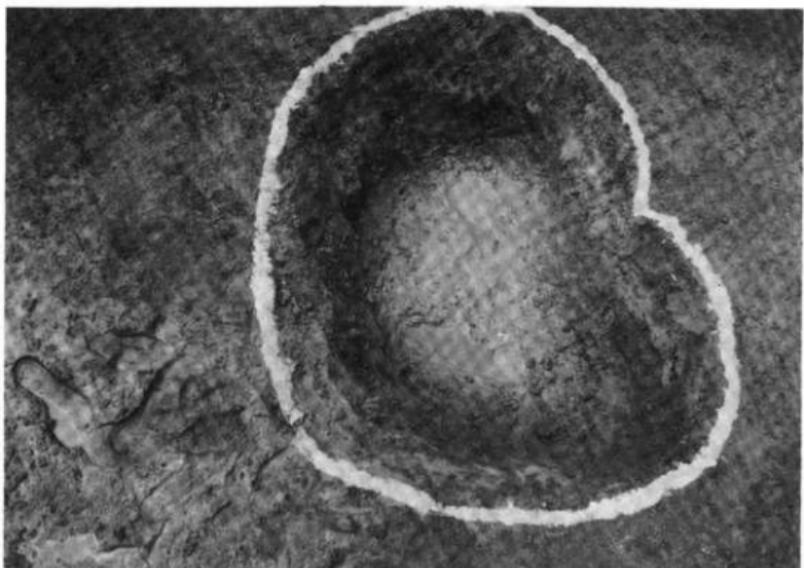
調査地全景（西より）



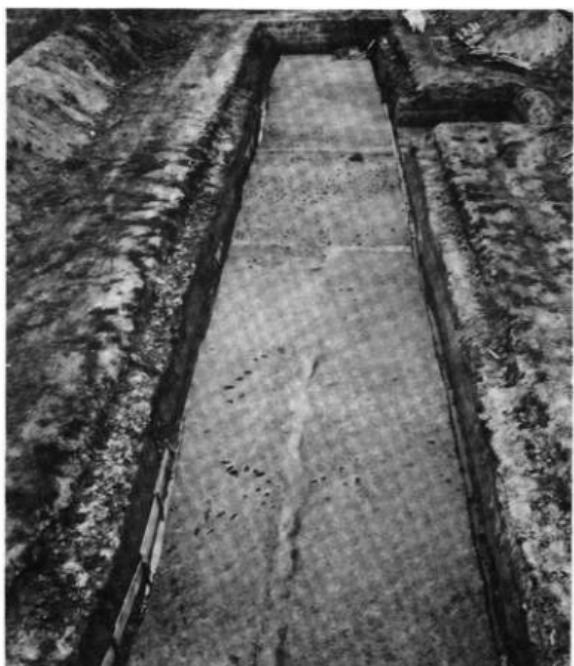
古墳時代遺構面（西より）



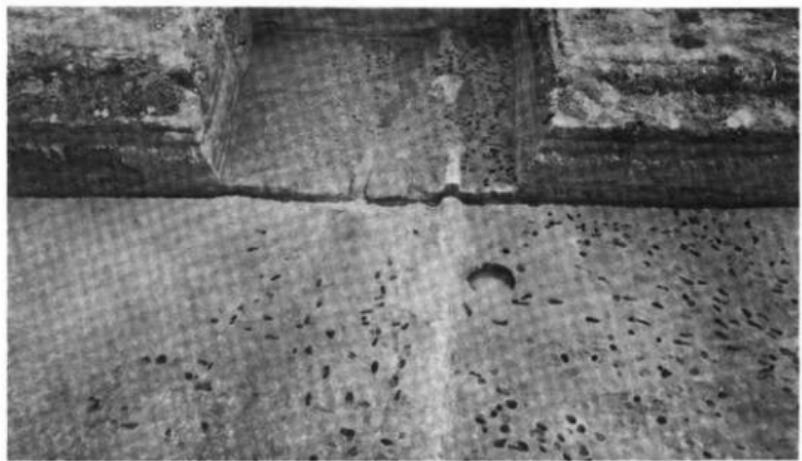
SK 1 遺物出土状況（東より）



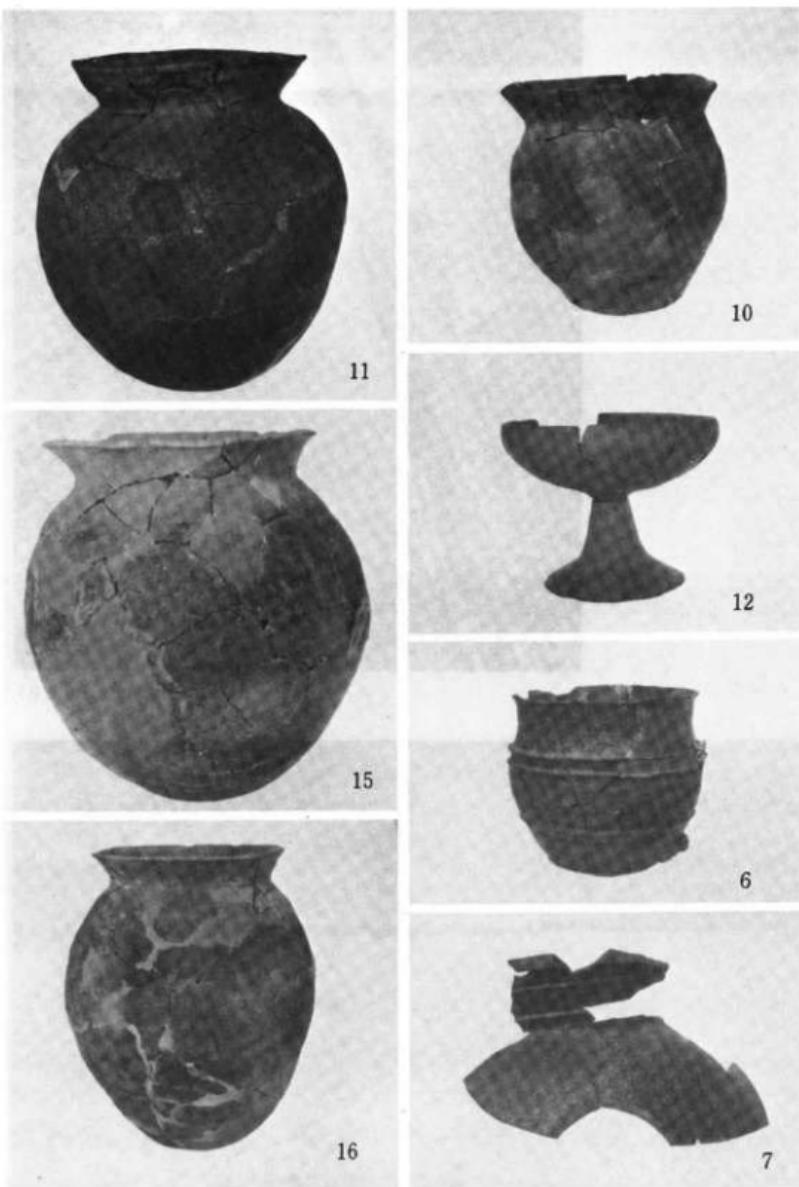
同上 完擺



水田全景（西より）



水田拡張区（北より）



SK 1 出土遺物

## 第5章 美園遺跡発掘調査概要報告

## 例　　言

1. 本書は、八尾市美園町2丁目48-1において実施した、倉庫  
建設に伴なう発掘調査の概要報告である。
1. 発掘調査は、昭和56年7月15日より8月20日にかけて実施した。
1. 発掘調査は八尾市教育委員会文化財室が行ない、米田敏幸が現地を担当した。  
なお、調査にあたっては、駒沢敦・中野慶太・西辻正信・鶴奥村組の協力があ  
った。
1. 本書作成にあたっては、上記担当者のほか駒沢敦(遺物実測)、池田まゆみ(ト  
レース)が行ない、執筆は米田敏幸が担当した。

## 本　文　目　次

I	調査の目的と経過	129
II	検出遺構	129
III	出土遺物	130
IV	まとめ	132

## 挿図目次

図1 調査地周辺図.....	129
図2 S E 1 平断面.....	130
図3 平断面.....	133
図4 出土遺物実測図.....	134
図5 S E 1 出土遺物実測図.....	135

## 図版目次

図版1 近世遺構面  
古墳時代遺構面

図版2 S E 1 遺物出土状況  
S E 1 完掘

## 第5章 美園遺跡(美園町2丁目48)

### I 調査の目的と経過

美園遺跡は八尾市美園町一帯に所在する弥生時代から鎌倉時代の遺跡で、旧大和川の本流である長瀬川右岸の沖積地に位置する。

北には古墳時代の集落址である友井東遺跡<sup>①</sup>、東には平安時代後期の寺院址と推定される宮町遺跡があり、南には助大阪文化財センターが実施した発掘調査で古墳時代の竪穴式住居、中世の井戸等が検出された佐堂遺跡が隣接している。<sup>②</sup>

当遺跡は、助大阪文化財センターの最近の調査で、家形埴輪を備えた古墳や、古墳前期の集落址が発見されたことで知られる。<sup>③</sup>

今回の調査地は、この調査地の東方約100m地点に位置している。調査期間は昭和56年7月

15日から8月20日までである。



図1 調査地周辺図

### II 検出遺構

検出した遺構は近世の井戸、平安時代の河遺跡(SD1)、古墳時代の建物(SB1)・溝(SD2~11)・井戸(SE1)等である。ここでは古墳時代の遺構の概略を述べる。古墳時代の遺構は、GL-3mの古墳時代の遺物を包含する黒灰色粘土を除去したところで、TP+4.4mの黄灰色砂質土または粘土をベースに掘り込まれている。

#### SB1(建物)

2間×3間の掘立柱建物であろうと思われる。東西4.2m・南北5.9mを測り、主軸方向はN-14°Wを指す。柱穴は総個数7個を数え、掘形は径30cm程度の円形である。北側と東側の柱穴は明確にできなかった。

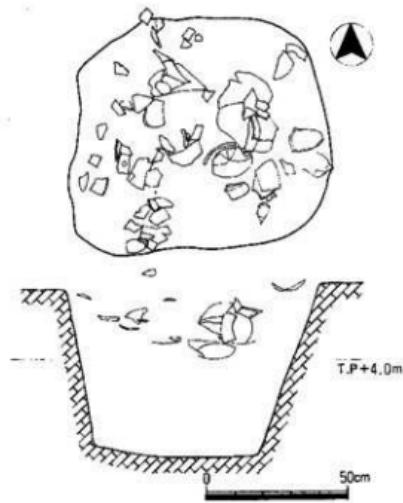


図2 SE1 平断面図

### SD 2(大溝)

調査地の西隅、SB 1の西6mの地点で建物に平行する南北の溝を検出した。溝幅は2m以上と推定され、深さは50cmを測る。溝内からは、庄内式の土器が出土する。

### SD 3～SD II(小溝)

SB 1の主軸やSD 2に直交する9本の小溝を検出した。いずれも幅50cm以下で浅く、0.5～1m間隔で走る。溝内より布留式の土器が出土する。

### SE 1(井戸)

SB 1とSD 2の間に位置する素掘りの井戸で、断面は逆台形を呈する。径90cm・深さ60cmを測る。この井戸の上層より、布留式の古相に属する土器が一括で出土した。

## III 出土遺物

出土遺物は、包含層および各遺構から出土している。

### 包含層出土遺物(1～14)

包含層を形成する黒灰色粘土層は上層と下層とに分けることができる。上層からは古墳時代後期の遺物(1～13)、下層からは古墳時代前期の遺物(14)が出土している。

(1)は須恵器杯蓋で、天井部は低く平坦で内窓して口縁部に至り端部は丸い。外面は口縁部より天井部付近まで回転ナデ、天井部回転ヘラケズリを行なう。須恵器杯身(2～6)は、内傾する短かめの立ち上がりをもち、受部は上方外へのびる。杯底部は丸いもの(1・2・4)と平坦で深いもの(3・5)がみられる。いずれも外面受部下まで回転ナデ調整、他は回転ヘラケズリを行なう。内面はすべて回転ナデ、色調は灰色～淡灰色、胎上は緻密で焼成は良好である。(7)は須恵器有蓋高杯で、短かく開く脚部をもつ。脚部は内外面ヨコナデ、杯部外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ調整、色調は乳灰色を呈し、胎上には砂粒を含む。

(8)は土師器の小型壺である。扁平な球形を呈する肩部よりわずかに外反する短かい口縁部をもつもので、体部外面を指窓ナデ、口縁付近および内面はヨコナデ調整する。色調は赤褐色

色で胎土は精良である。

(9~13)は土師器高杯で、杯部は小さな杯底部より屈曲し、内反ぎみにのびる口縁部をもつ。いずれも屈曲部にわずかな段を有し、口縁端部は内傾ぎみにおさめる。脚部は中空の長い柱状部と屈曲して聞く裾部をもつ。杯部は内外面ともヨコナデ、脚部は外面縦方向のヘラナデ、内面は縦方向の強いエビナデを行なう。色調はいずれも赤褐色で、胎土は精良である。これらは形態・技法がきわめて類似している。

(14)は土師器甕で、球形の胴部より内窵して立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は平坦面をもって内厚する。器壁は薄く、体部内面はヘラケズリ、外面には細かい横方向のハケ目がみられる。口縁部は内外面ともヨコナデを行なう。色調は淡赤褐色を呈し、胎土には微砂粒を含む。

#### S D 2 出土遺物(15~18)

S D 2 の埋土からは、庄内式の古式土師器が出土している。(15~17)は、いわゆる庄内甕で、体部より脱く屈曲して直線的にのびる口縁部である。端部は上方へのつまみ上げがみられる。色調は暗褐色~淡褐色を呈し、胎土には角閃石の微粒を多く含む。(18)は複合口縁甕であろう。球形の体部より直立して立つ頸部を有する。体部内面はヘラケズリ、外面はヘラナデ調整を行なう。色調は灰黄褐色を呈し、胎土には微砂粒を含む。

#### S E 1 出土遺物(20~28)

井戸の一括遺物には、壺・器台・鉢・甕の各器種がみられる。

(20)は短頸甕で、球形を呈する大きな体部より、直立して外反ぎみにのびる直口の口縁部をもつ。外面は粗い不整方向のハケ目がみられ内面はヘラケズリする。色調は淡黄褐色、胎土には粗砂粒を含む。(21)は小型丸底壺で、扁球形の体部よりくびれ、斜外方に大きく開く口縁部をもつ。外面および口縁部内面は横方向の細かいヘラミガキを行なう。色調は淡赤褐色、胎土は精良で、器表に赤色顔料が残る。

(22・23)は小型器台の受部と脚部である。受部は基部より内窵して口縁部に至る浅い皿状を呈し、端部はつまみ上げぎみにおわる。外面を横方向のヘラミガキ、見込み部は放射状のヘラミガキで調整する。脚部は円錐状に開き、中位の4方に円孔をあける。外面は縦方向のヘラナデ、色調は(22)は赤褐色、(23)は灰褐色を呈し、胎土はいずれも精良である。(24)は小型鉢で、半球形の体部に2段に屈曲する口縁部を持つ。外面は底部付近ヘラケズリ、他は横方向の細かいヘラミガキを行ない、内面は口縁付近のみ横方向ヘラミガキがみられる。

甕は庄内系甕(25・26)と布留系甕(27・28)とに分けられる。庄内系甕は胴部より屈曲し、外反ぎみに開く口縁部をもつもので、端部はつまみ上げをおわる。体部上半部外面には右上がり

の極細のタタキが明瞭に残り、下半部より左上へのハケ調整がみられる。内面は横方向にヘラケズリをする。胎土には砂粒を多く含む。(26)は赤色顔料を塗布する。布留系の甕(27・28)は、球形の体部に内窓して立ち上がる口縁部をもち、口縁端部は肥厚する。外面には縱方向の細かいハケがみられ、内面はヘラケズリをする。色調は灰青褐色を呈し、胎土には細砂粒を含む。(28)は体部外面に煤が付着する。

#### その他の出土遺物

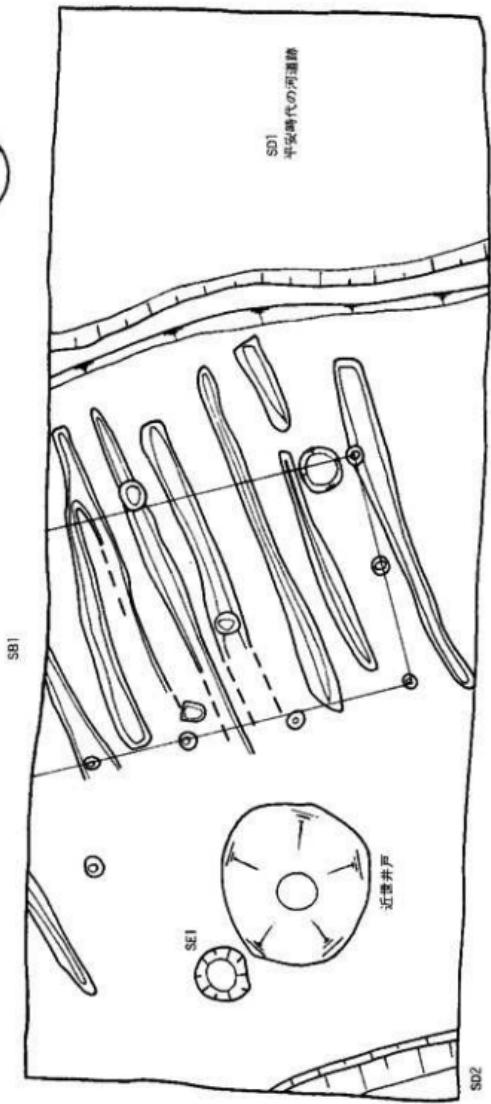
(19)は、調査終了後施工者により発見され届け出された遺物である。出土位置は不明であるがほぼ完形品である。体部は上ぶくらみの球形を呈し、外反ぎみに立ち上がってのびる直口の口縁部を有する。外面には左上への細かいハケ目がみられ、内面は下半部を斜方向、上半部を横方向のヘラケズリを行なう。色調は外面茶褐色、内面黒色を呈し、胎土には粗粒の角閃石が多く含まれる。

## IVまとめ

ここで検出した遺構は、いずれも庄内式～布留式の古相の時期に比定できる。このことは、建物(SB1)・溝(SD2)・井戸(SE1)が同時併存していた可能性を示しており、建物と溝が同一方位を示すことやこの両者の間に井戸が位置していることから、これら三者の間に密接な関連性が考えられる。このことは古墳時代の生活様式を解明する何らかの手がかりとなるものであろう。さらに、北150mで発掘された同時代の集落遺構や西100mに所在する美國古墳の存在も含めて、古墳時代の美國遺跡の解明に重要な資料を提示している。

#### 〔注記〕

- 1 大阪文化財センター「友井東道跡現地説明会資料」1981年
- 2 八尾市教育委員会「宮町遺跡発掘調査概要」1982年
- 3 大阪文化財センター「近畿自動車道天理吹田線予定地内瓜生堂他5遺跡第1次発掘調査報告書」1975年
- 4 大阪文化財センター「美國遺跡現地説明会資料」1981年
- 5 今回の調査は遺構面が地表下約3mにあり、工事によって破壊される部分すべてを調査することは技術的に困難であった。とはいっても現状では記録保存として充分な調査を行なっていないことは認めざるを得ない。多忙であるにもかかわらず当遺物を届けていた工事関係者の方々の善意と良識ある行為には、調査担当者として感謝にたえない。



5m  
0

図3 平面図

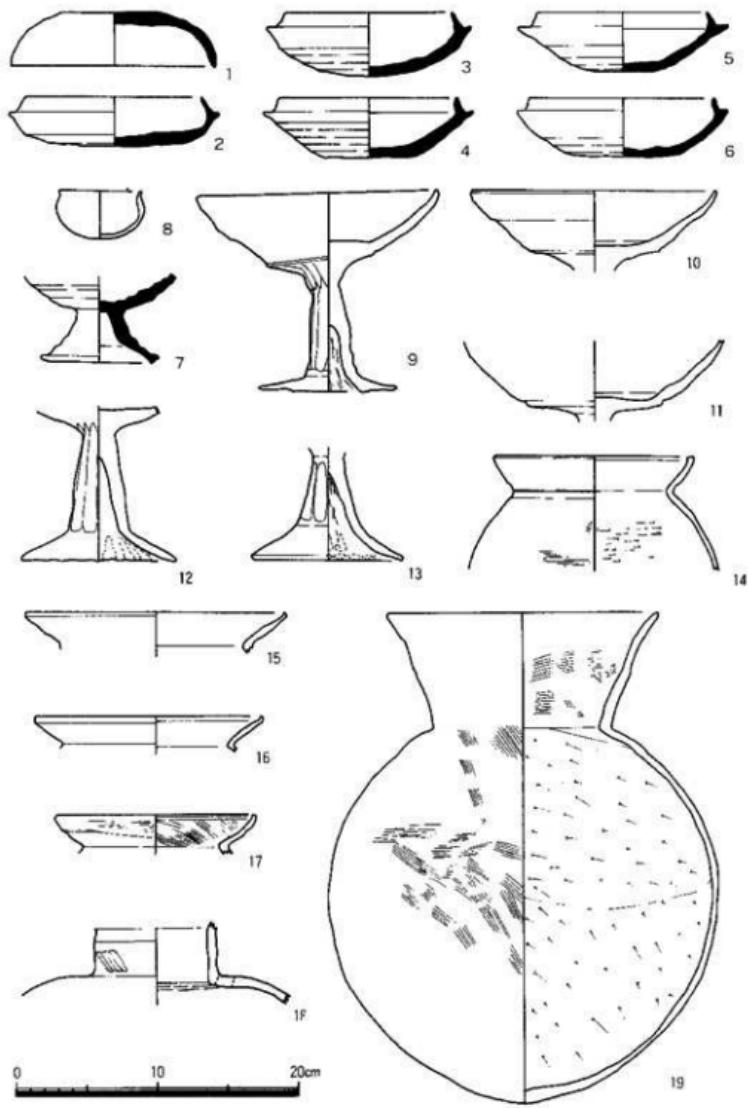
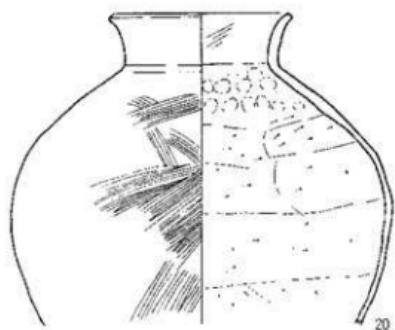
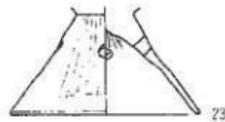


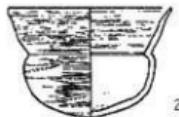
図4 出土遺物実測図



22



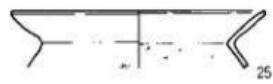
23



21



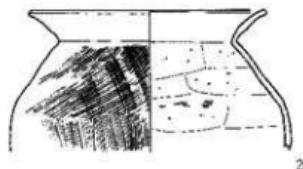
24



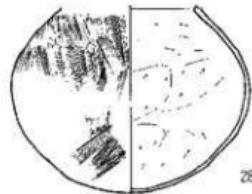
25



27



26

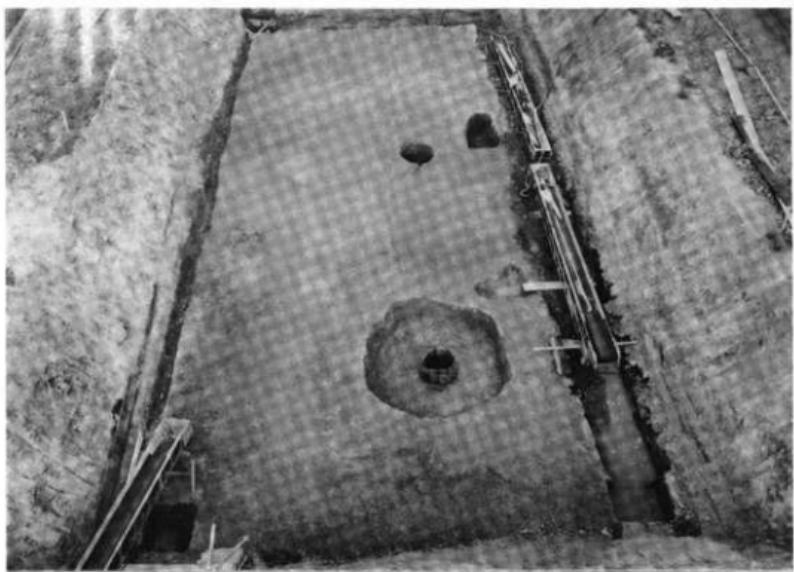


28



図5 SE1出土遺物実測図

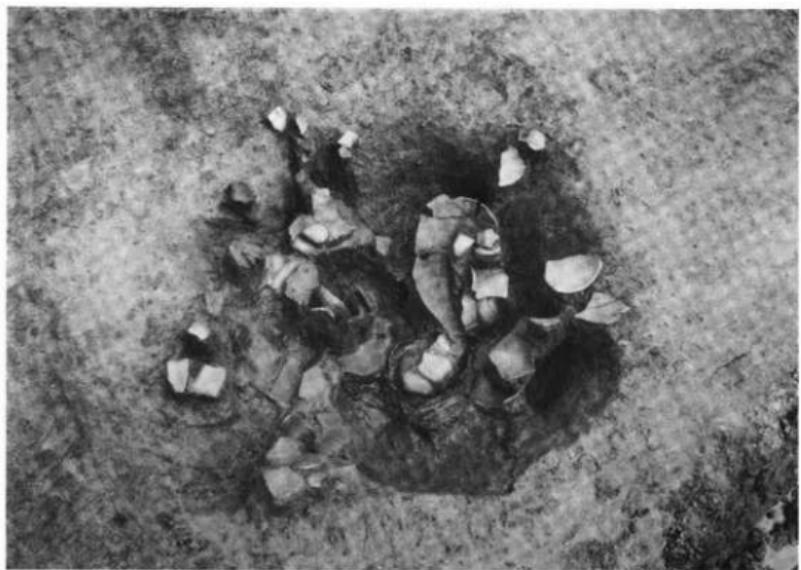




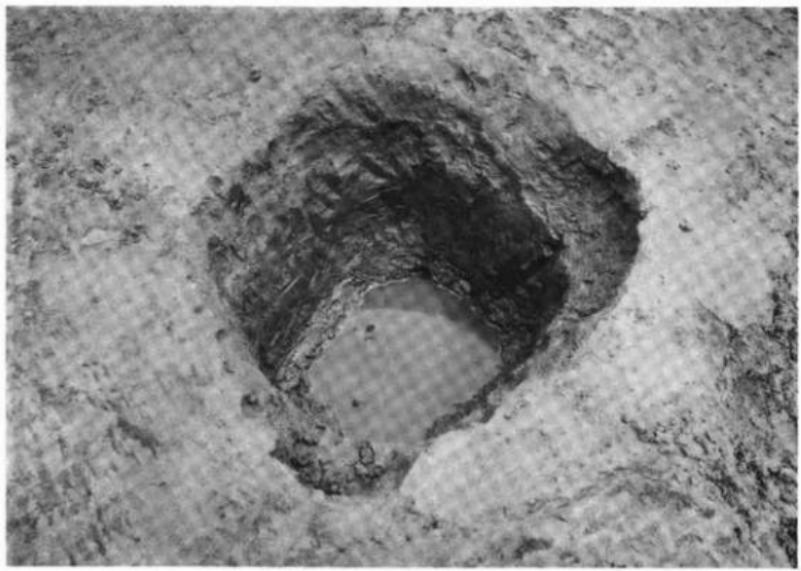
近世遺構面



古墳時代遺構面



S E 1 遺物出土狀況



S E 1 完掘

## 第6章 跡部遺跡発掘調査概要報告

## 例　　言

1. 本書は、八尾市春日町1丁目57番地において実施した。 建設工事に伴なう発掘調査の概要報告である。
1. 発掘調査は、昭和56年11月9日から11月19日かけて実施した。
1. 発掘調査は八尾市教育委員会文化財室が行ない、高木真光が現地を担当した。  
なお、調査にあたっては西村公助の協力があった。
1. 本書作成にあたっては、上記担当者のほか成海佳子(遺物実測)、中谷聖子(トレース)が行ない、執筆は高木真光が担当した。

## 本 文 目 次

I	調査の目的と経過	141
II	調査の概要	142
III	層序	142
IV	検出造構	142
V	出土遺物	144
VI	まとめ	145
VII	出土遺物観察表	151

## 挿図目次

図1 調査地周辺図	141
図2 Aグリッド上層遺構平面図	143
図3 Cグリッド下層遺構面出土石器実測図	145
図4 平断面図(折込)	147~148
図5 木棺・人骨実測図	149
図6 出土遺物実測図	150

## 図版目次

図版1 Aグリッド 上層遺構検出状況 同上 木棺検出状況	図版3 Bグリッド 灰色粘土I層出土遺物 人骨遺存状況
図版2 Bグリッド 上層遺構検出状況 Cグリッド F層遺構検出状況	

## 第6章 跡部遺跡(春日町1丁目57番地)

### I 調査の目的と経過

跡部遺跡は昭和53年に春日町1丁目で実施された国鉄職員官舎の建設の際、弥生時代前期の壺や鎌倉時代の屋瓦片等の遺物が採集されたことによって発見された遺跡である。今回申請されたマンション建設予定地は、この採集地点の西方約200mに位置するため、これに先立って遺跡の拡がりなどを確認する目的で試掘調査を行なった。

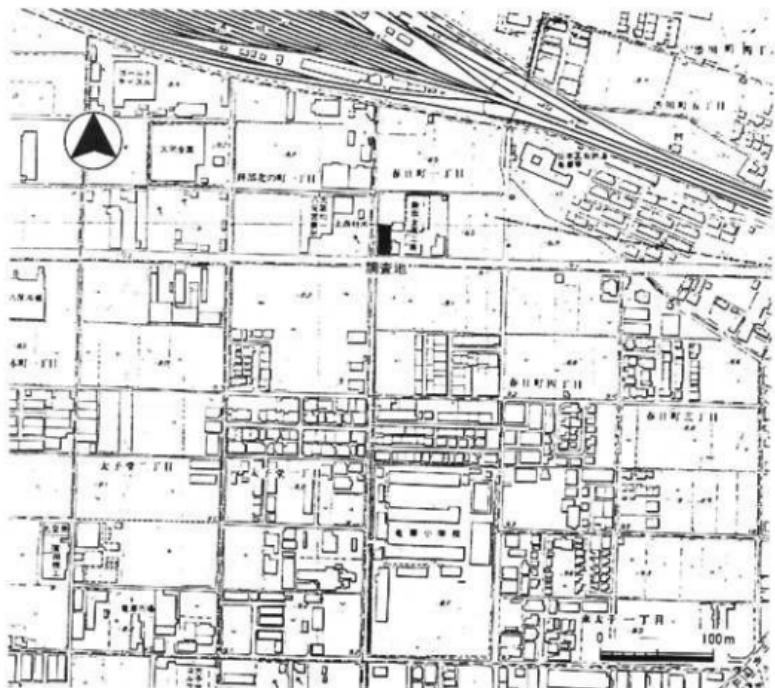


図1 調査地周辺図

試掘調査では、弥生時代前期・弥生時代後期末～古墳時代前期の遺物や遺構を認めたため、昭和56年11月9日から11月19日にかけて、発掘調査を実施した。

当遺跡は、地形的には長瀬川と平野川に挟まれた沖積地に立地する。また、周辺には、西～北西に龜井遺跡(弥生時代前期～江戸時代)、久宝寺遺跡(弥生時代～室町時代)<sup>②</sup>が位置し、南には木の本遺跡(弥生時代中期～古墳時代中期)<sup>③</sup>が近接している。また、遺跡推定範囲内には、淡川庵寺の推定地も含まれている。<sup>④</sup>

## II 調査の概要

調査地に3ヶ所のグリッドを設定した。各グリッドは北からAグリッド(3.5m×4.5m)、Bグリッド(3.5m×4.0m)、Cグリッド(4.0m×15.5m)と付称し、全体として1つのトレンチを意図した。調査はA～Cへ順次行なったが、このうちCグリッドの南側は壁面の崩壊により、調査できていない。調査総面積はCグリッド南側を含めて約92m<sup>2</sup>である。

## III 層序

各グリッドの基本的な土層堆積は、上層より盛土、旧耕土、茶灰色混砂粘土、緑灰色シルト、暗灰色粘土、灰青色シルトである。

これらの基本層序の他に、A・B両グリッドでは旧耕土下に黒色粘土があり、緑灰色シルト下には灰色粘土Ⅰがみられる。Cグリッドでは、A・B両グリッドの黒色粘土と同レベルに緑灰色混砂粘土があり、茶灰色混砂粘土下には灰色粘土Ⅱが認められた。

また、A・Bグリッド内の灰色粘土Ⅰの下部は古墳時代前期の遺物包含層で、各グリッドでみられた暗灰色粘土は弥生時代前期から中期にかけての遺物包含層と考えられる。

## IV 検出遺構

遺構には暗灰色粘土をベースにするものと、灰青色シルトをベースにするものがある。上層に位置する前者を上層遺構、後者を下層遺構と呼び、記述する。

### 1) 上層遺構

Aグリッドで方形周溝墓と考えられる遺構、Bグリッドで溝を検出した。時期については、遺構の内部からは決め手となるものは出土しなかったが、層位の比較や遺物含包層出土の小型鉢(1・2)や壺(3)から、古墳時代前期に比定できるものと考えられる。

### 方形周溝墓状造構

A グリッドの南側で一部を検出した。主体部には木棺の底板や側板が認められ、底板上には腐朽の著しい人骨が遺存していた。底板は長さ 210 cm・幅40cmが遺存しており、側板は内部に倒れ込んだ状態で長さ 120 cm・幅20cm程度が残存していた。

周溝と考えられる溝は幅約80cm・深さ約25cmを測り、グリッド西壁近くでわずかに屈折する状態が認められた。溝内には暗灰色粘土が堆積し、弥生時代前期の壺(4・5)等の破片が少量出土した。この上層は、上層造構のベースとなっている弥生時代前期～中期の包含層とほとんど同質であり、溝掘削後に付近の包含層が流入したものと考えられる。

### SD1

B グリッドで検出した北西方向に延びる溝である。幅約80cm・深さ30cm前後を測り、溝内には暗灰色粘土が堆積する。

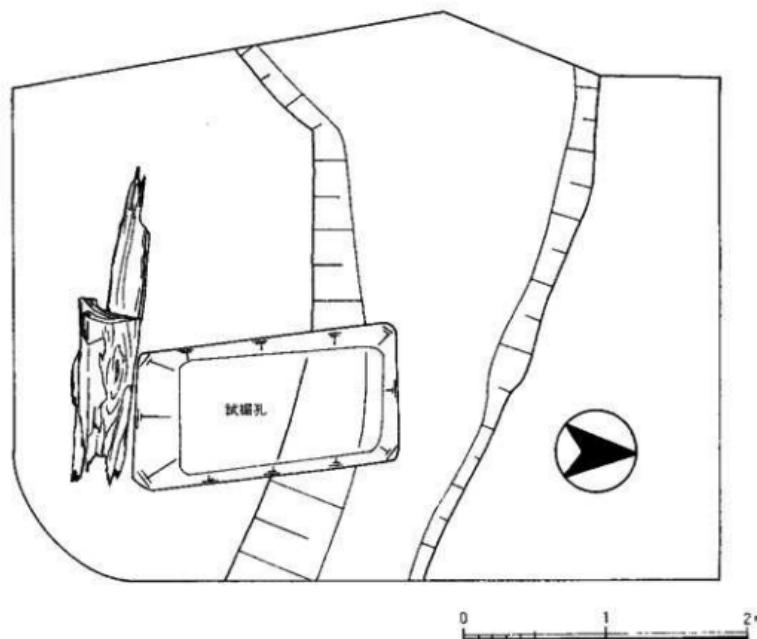


図2 A グリッド上層造構平面図

## 2) 下層遺構

Bグリッドで土塙・溝、Cグリッドで溝を検出した。これらの遺構および遺構を被覆する包含層より、弥生時代前期～中期と考えられる遺物が出土している。

### S K 1

Bグリッド南側で検出した。東側はS D 2に切られ、土塙内には暗灰色粘土が堆積する。

### S D 2

Bグリッド南東で北側の肩のみを検出した。SK 1を切っているが、堆積状況は同様である。内部から弥生時代中期の甕(10)等の破片がわずかに出土した。

### S D 3

Cグリッドで検出した南北方向の溝である。北側は大溝に切られている。幅約60cm・深さは25cm前後を測る。溝内には暗灰色粘土が堆積し、弥生時代中期の遺物が少量出土した。また、この溝の延長線上にS D 2があり、同一の溝としての可能性がある。

### S D 4

Cグリッドで検出した。北側は壁面の崩壊によって明確ではないが、幅約4m程度で、深さ約1.2mを測り、南西から北東へ延びると考えられる。上部には暗灰色粘土、下部には暗灰色粘土が堆積し、上部より弥生時代中期の壺(12～14)が出土した。規模・堆積状況等から自然河川とも考えられるが、部分的に検出したのみで、詳細は不明である。

## V 出土遺物

土器や石器等が出土し、総量はコンテナ1箱である。このうち実測可能なものは土器14点、石器2点で、灰色粘土より出土した小型鉢(1・2)、壺(3)を除き、他はすべて磨耗をうけた細片である。

### 1) 土器

時期的に、弥生時代前期～中期のものと、古墳時代前期のものが出土した。なお、土器個別について観察表にまとめた。

### 2) 石器

Cグリッド下層遺構面より、サスカイト製の刀器(1)と楔形石器(2)が出土した。

(1)は全長4.8cm・幅4.0cm・厚さ0.8cmを測り、横長剣片を利用した刀器で、背腹両面に